

NAGA-TANI

長谷横穴墓群

大分県大分市期田所遺跡の発掘調査報告書

1992

大分市教育委員会

NAGA TANI

長谷横穴墓群

大分県大分市羽田所在遺跡の発掘調査報告書

1992

大分市教育委員会

序 文

東九州の拠点として古くより豊かな自然と歴史を培い、新たな発展を遂げつつある郷土大分市は、近年、宅地造成や住宅建設が急増し、これに伴う発掘調査件数も年を追って増加傾向を示しています。大分市教育委員会では、これに呼応して緊急発掘調査を進める一方、史跡の保存整備、文化財愛護思想の高揚、文化財の公開など文化財行政の推進に向けて努力をしているところであります。

本書は、平成3年度に宅地造成に伴い緊急発掘調査をおこないました、大分市羽田の長谷横穴墓群の発掘調査報告であります。

本調査を通じて、大分市内における横穴墓の新たな資料が追加され、また、これらの資料によって郷土の歴史がいっそう解明され、埋蔵文化財への理解と文化財保護への関心の深まり、文化的で豊かな市民生活への一助が得られれば幸いです。

本書の発刊、並びに発掘調査にあたり、ご協力いただいた株式会社 藤友、羽田地区の関係の方々、その他関係各位に対して深く感謝の意を表す次第であります。

平成4年8月31日

大分市教育委員会

教育長 安 東 裕

例 言

1. 本報告書は大分市教育委員会が株式会社藤友の委託を受けて実施した、大分市大字羽田に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社藤友の宅地造成に伴い、大分市教育委員会が調査主体となって、平成3年12月より平成4年3月にかけて実施した。
3. 発掘調査にあたっては、株式会社藤友ならびに株式会社佐藤組の全面的な協力を得た。
4. 遺跡名である「長谷横穴墓群」については大分県教育委員会によって作成された遺跡台帳に登録されている名称を使用した。
5. 本書の執筆は調査を担当した塔鼻光司・池道千太郎がおこなった。なお、執筆分担は下記の通りである。
第1章1・第2章……………塔鼻光司
第1章2・第3章・第4章 ……池道千太郎
6. 遺構の実測は担当者が行ったほか、株式会社佐藤組の協力を得た。
7. 写真撮影は担当者がおこなった。
8. 遺物の実測は池道千太郎がおこない、拓本は釘宮香苗（大分市教育委員会社会教育課文化財室臨時職員）がおこなった。
9. 実測図製図は釘宮香苗・井口あけみ・松村千里（同上）がおこなった。
10. 遺物整理は渡辺里美・三重野八重子（同上）がたった。
11. 遺物の写真撮影は池道千太郎がおこなった。
12. 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
13. 遺構図の配色は当初の掘削を黒色で表し、二次的加工は茶色を付して表した。
14. 遺構の配置図および座標・標高については東洋技術株式会社に委託した。
15. 遺跡出土の人骨については田中良之氏（九州大学文学部九州文化史研究施設）より御教示を得た。
16. 地質構造の概要については三輪崇夫氏（株式会社佐藤組）より玉稿をいただいた。
17. 本書の編集は池道がおこなった。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	1
第Ⅱ章	地理的・歴史的環境	3
1	位置ならびに地質構造	3
2	周辺の遺跡と歴史的環境	5
第Ⅲ章	長谷横穴墓群の調査	11
1	分布と概要	11
2	横穴墓	15
1	1号横穴墓	15
2	2号横穴墓	15
3	3号横穴墓	18
4	4号横穴墓	18
5	5号横穴墓	18
6	6号横穴墓	20
7	7号横穴墓	20
8	8号横穴墓	20
9-1	9-1号横穴墓	20
9-2	9-2号横穴墓	22
10	10号横穴墓	22
11	11号横穴墓	22
12	12号横穴墓	25
13	13号横穴墓	25
14	14号横穴墓	25
15	15号横穴墓	25
16	16号横穴墓	25
17	17号横穴墓	28
18	18号横穴墓	28
19	19号横穴墓	31
20	20号横穴墓	31
21	21号横穴墓	31
22	22号横穴墓	33
23	23号横穴墓	33

24号横穴墓	33
25号横穴墓	35
26号横穴墓	35
27号横穴墓	35
28号横穴墓	37
29号横穴墓	37
30号横穴墓	37
31号横穴墓	37
32号横穴墓	42
33号横穴墓	42
34号横穴墓	42
35号横穴墓	46
36号横穴墓	46
37号横穴墓	46
38号横穴墓	50
39号横穴墓	50
40号横穴墓	50
41号横穴墓	50
42号横穴墓	55
43号横穴墓	55
44号横穴墓	57
45号横穴墓	57
46号横穴墓	57
47号横穴墓	60
48号横穴墓	60
49号横穴墓	60
50号横穴墓	64
3 出土遺物	69
第IV章 まとめと考察	75
1 形態分類について	75
2 分布と群構成について	77
3 工具類について	79
4 結論	83
5 その他	85

挿 図 目 次

第1図	地質模式柱状図 (1/200)	4
第2図	長谷横穴墓群地質概要図 (1/750)	4
第3図	長谷横穴墓群の位置と周辺の遺跡 (1/50000)	7
第4図	大分市横穴墓分布図 (1/75000)	9～10
第5図	長谷横穴墓群分布図 (1/2000)	11
第6図	長谷横穴墓群配置図 (1/300)	13～14
第7図	1号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	15
第8図	2号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	16
第9図	3号・4号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	17
第10図	5号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	18
第11図	6号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	19
第12図	8号横穴墓 平面・断面実測図 (1/30)	20
第13図	9-1号・9-2号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40、1/20)	21
第14図	10号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	23
第15図	11号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	24
第16図	12号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	26
第17図	13号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	27
第18図	14号・15号横穴墓 平面・断面実測図 (1/30)	28
第19図	16号・17号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	29
第20図	18号・19号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	30
第21図	20号横穴墓 平面・断面実測図 (1/30)	31
第22図	21号・22号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	32
第23図	23号横穴墓 平面・断面実測図 (1/30)	33
第24図	24号・25号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	34
第25図	26号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	36
第26図	27号横穴墓 平面・断面実測図 (1/20)	38
第27図	28号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	39
第28図	29号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	40
第29図	30号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	41
第30図	31号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	43
第31図	32号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	44
第32図	33号・34号横穴墓 平面・断面実測図 (1/40)	45

第33图	35号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	47
第34图	36号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	48
第35图	37号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	49
第36图	38号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	51
第37图	39号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	52
第38图	40号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	53
第39图	41号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	54
第40图	42号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	55
第41图	43号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	56
第42图	44号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	57
第43图	45号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	58
第44图	46号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	59
第45图	47号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	61
第46图	48号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	62
第47图	49号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	63
第48图	50号横穴墓	平面・断面実測図 (1/40)	65
第49图	49号・50号横穴墓	平面・正面実測図 (1/60)	66
第50图	出土遺物実測図 ①		71
第51图	出土遺物実測図 ②		72
第52图	出土遺物実測図 ③		73
第53图	出土遺物実測図 ④		73
第54图	群構成と墓道推定線		77
第55图	横穴墓玄室内工具痕 (1/6)		80

表 目 次

第 1 表	層序表	3
第 2 表	横穴墓遺構一覽表 (1)	67
第 3 表	横穴墓遺構一覽表 (2)	68
第 4 表	出土遺物一覽表	74
第 5 表	形態分類表	76
第 6 表	形態表選表	78
第 7 表	工具分類表	82

写 真 目 次

写真 ①	35号横穴墓 (玄室内部)	89
写真 ②	36号横穴墓 (玄室内部)	89
写真 ③	49号横穴墓 (前庭部)	90
写真 ④	49号横穴墓 (前庭部)	90

写真図版目次

第1図版	87
・調査区全景（西方向から）	87
・長谷横穴墓群遠景（西南方向から）	87
・長谷横穴墓群全景（南方向から）	87
第2図版	88
・9号横穴墓（正面から）	88
・14号横穴墓（玄室内部）	88
・26号横穴墓（玄室内部遺物出土状況）	88
・26号横穴墓（玄室内部人骨出土状況）	88
・31号横穴墓（玄室内部又鍬状工具痕）	88
・33号横穴墓（玄室内部）	88
第3図版	89
・35号横穴墓（玄室内部幅10cm工具痕）	89
・32号・33号・34号・35号横穴墓	89
・37号・38号・39号横穴墓	89
・40号横穴墓（前庭部土層堆積状況）	89
・40号横穴墓（前庭部遺物出土状況）	89
・48号横穴墓（玄室内部）	89
第4図版	90
・49号・50号横穴墓（全景）	90
・49号横穴墓（正面から）	90
・49号横穴墓（玄室内部）	90
・49号横穴墓（羨門遺物出土状況）	90
・50号横穴墓（玄室内部）	90
第5図版	91
・滝尾百穴横穴墓群全景（南方向から）	91
・長谷横穴墓群発掘参加者	91
第6図版	92
・出土遺物①	92
第7図版	93
・出土遺物②	93

第Ⅰ章 はじめに

1 調査に至る経過

長谷横穴墓群は大分市大字羽田地区の東側丘陵斜面に所在する。付近はミカン畑を中心とした畑地が広がっていたが米良有料道路と市道丸尾2号線に挟まれ、横穴墓群は屏風状に切り立った状態となった。そのような折り、当横穴群を含む周辺約110,000㎡で民間業者による宅地造成が計画され、遺跡の取り扱いについて慎重に協議をおこなった結果、現状ではミカン畑・雑木・土砂などに阻まれ、横穴墓の全体数や規模がつかめないため、大分市教育委員会では横穴の状態・遺構の保存状況などを把握することが先決かつ重要と判断し、現地のミカンの収穫を待って平成3年12月2日から重機による表土剥ぎ並びに調査用足場組みをおこない、続いて全体について発掘調査を実施することとなった。

2 調査組織

調査指導	小田富士雄（福岡大学教授） 賀川 光夫（別府大学教授） 後藤 宗俊（別府大学教授） 橋 昌信（別府大学教授）
調査主体者	大分市教育委員会 教育長 安東 新
事務局	大分市教育委員会 内田 悟（大分市教育委員会社会教育課課長） 野尻 政文（ 同上 文化財室室長） 宮崎 英雄（ 同上 文化財室室長・平成4年4月～） 泰 政博（ 同上 社会教育課主幹） 佐藤 良藏（ 同上 文化財室主査） 佐藤 小夜（ 同上 文化財室主任） 村山 貴子（ 同上 文化財室主事・平成4年4月～）
調査担当	塔鼻 光司（大分市教育委員会社会教育課文化財室主任） 池造千太郎（ 同上 文化財室技師）

調査参加者 兵谷有利・内野武・水田裕文・嶋田由希・川鍋知秋
(以上別府大学学生)

濱口剛子(大分大学学生)

江藤サカエ・江藤美代子・江藤ツヤ子・児玉都美子

後藤サチ子・増本文子・山田ツル子・坂本和子

実測協力者 大石雅義・岡本秋博・財津公明・賤川恵一・三輪崇夫・森田洋子
(以上株式会社佐藤組)

整理作業員 調野玲子・渡辺里美・三重野八重子・西嶋スミエ・町田ユカリ

松村千里・釘宮香苗・井口あけみ・本宮初代・得丸礼子

(以上大分市教育委員会社会教育課文化財室臨時職員)

以上の他、発掘調査期間中、清水宗昭氏、渋谷忠章氏、高橋 徹氏、村上和久氏、小林昭彦氏、吉田 寛氏、綿貫俊一氏(以上大分県教育庁文化課)、木村幾多郎氏、王永光洋氏(大分市歴史資料館)の各氏が来訪され、種々の御教示・御助言を得た。ここに記して感謝の意を表します。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1 位置ならびに地質構造

長谷横穴墓群は大分県大分市大字羽田に所在する。

横穴墓の所在する大分市は九州の北東部、県のほぼ中央に位置し、北に別府湾を望む。市内には大分川と大野川の二大河川が流れ、沖積平野を形成している。二大河川の内、市内東部をながれる大野川は祖母山麓を水源とし、西部には大分川が水分時の北東、立石山を水源とし、湯布院盆地を貫流し、大分市に至る。平野部では、両岸に河岸段丘を形成し、横穴墓は河口付近の右岸の段丘斜面に南面して開口している。

大分市内で最も広い分布をしめす大分層群は、市内西部から鶴崎台地北半を経て大野川以東の大在・坂ノ市まで分布している。多量の火山噴出物（火山灰・軽石・火山礫など）をいくつかの層準に含む堆積層と火山岩・火砕流からなっている。

大分層群の一つである滝尾層は、鶴崎台地北半から、上野丘陵を経て西大分丘陵から高崎山東側まで分布している。層序的に下位から上位に、片島部層・羽田火砕岩層・下郡部層に分けられる。片島部層は滝尾地区片島付近に厚く発達している。羽田火砕岩層は滝尾中学校グラウンドの崖に模式的に露出しているが、羽田付近から、上野丘陵・西大分丘陵の脚にも露出している。

横穴墓の形成されている地質構造は、大分層群下郡部層に相当される。（第1表）

下郡部層は、大分市長谷町付近を中心に分布しており、層厚約50cmの黒色粗粒砂と礫からなる大規模斜交層理をしめす互層を主体とし、海成と考えられるシルト層をはさむ。

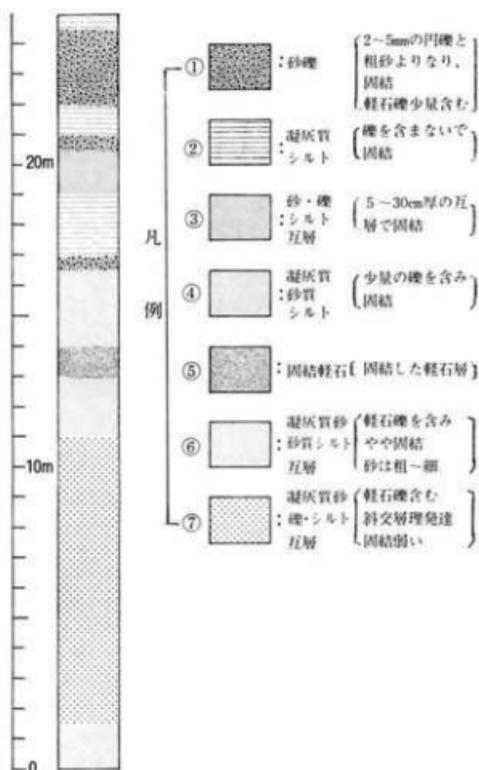
現地踏査の結果、横穴墓付近は第1図の模式柱状図のような層序をなし、下郡部中部～上部に位置すると考えられる。走向はN15～65°Wで、傾斜は北東へ10～18°である。

大部分の横穴墓は、第2図の地質概要図に示すように、上部の固結した凝灰質シルト～砂質シルト層に掘られており、地層の傾斜に沿って西側のものほど位置が高くなる傾向がある。

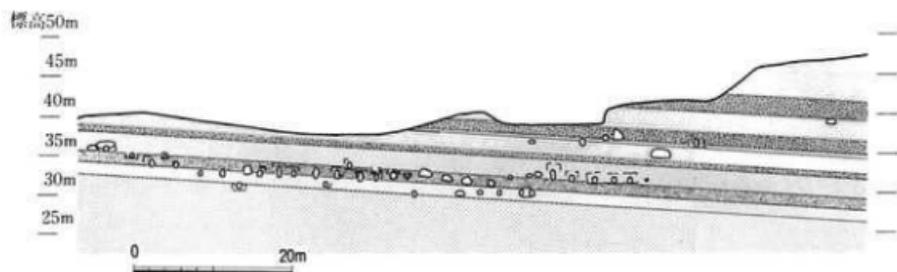
新 生 代	第 四 紀	完新世	沖積層		
		更新世	阿蘇火砕流		
			九重層群	段丘礫層	
				城原層	
	大在層	高崎山火山岩			
	大分層群	鶴崎層			
		山布川火砕流			
筑紫溶岩					
		滝尾層	下郡部層	羽田火砕岩	片島部層
	新第三紀	須南層群	東横田層	判田層	
中生代・白亜紀		大野川層群			
古生代		野津原古生層 佐賀岡変成岩類			

第1表 層序表

下部は、斜交層理の発達した粗粒砂と礫と砂質シルトの互層であり、固結度が低く、降雨等により崩壊しやすいため、横穴墓は一部を除いて掘られていない。



第1図 地質模式柱状図 (1/200)



第2図 長谷横穴墓群地質概要図 (1/750)

2 周辺の遺跡と歴史的環境

長谷横穴墓の周辺には数多くの遺跡が存在する。

横穴墓の築かれている鶴崎丘陵上には尾崎遺跡、多武尾遺跡で旧石器遺物が採集されているが、明確な遺構等の確認はなされていない。

縄文時代の遺跡では縄文後期の貝塚として小池原貝塚が存在した。また、縄文晩期土器を出土したと伝えられる牧六分遺跡が存在する。

弥生時代に入ると前期末以降には大分川の上流約1.5kmの右岸に位置し、比高63mの独立丘陵上に所在する守岡遺跡で住居跡と貯蔵穴群を検出している。また、前述の尾崎遺跡、多武尾遺跡でも貯蔵穴や遺物が検出されている。

古墳時代において、大分川の河口右岸地域では現在のところ墳丘をもつ高塚古墳の存在は確認されていないが、対岸の上野台地東側には5世紀のものと考えられる前方後円墳の大匠塚古墳が存在する。現在、前方部は削平をうけ、後円部のみが残っている。

古墳時代後期には横穴墓群が各所で営まれる。高城から重にかけての丘陵の斜面には市指定の滝尾百穴横穴墓群（84基）を始め、下部横穴墓群など多数の横穴墓群が分布している。この地域においては6世紀後半代から7世紀前半代に最盛期を向かえ、その後しだいに衰退していく。

また、大分平野では石を使用した横穴式石室が造られる。千代九古墳・井坂古墳・弘法穴古墳がこれにあたるが、これらは6世紀後半から7世紀前半にかけて大分平野をおさえていた豪族の墓と考えられている。

さらに終末期になると石を削り貫いて主体部が造られた古宮古墳が見られる。古宮古墳の墳丘規模を薄葬令の規定では「上臣」にあっており、被葬者としては「日本書紀」天武天皇の条に登場する「大分君思尺」である説が有力である。

古代には大分川対岸（大分川左岸）に豊後国府推定地である古園府遺跡、また、平安中期以降には「高園府」の名称で知られるように豊後国府がこれに隣接した上野台地上に営まれた可能性も考えられる。

そして、この台地は中世になると、豊後守護職を務めた大友氏の館跡が設けられることになる。最後に、長谷横穴墓の歴史的環境を考える上で切り離すことが出来ない遺跡が下部遺跡・羽田遺跡である。

下部遺跡では、遺構は検出されていないものの縄文後期の土器がかなり発見されている。弥生時代にはいると前期末以降終末期まで数多くの遺構・遺物が検出されている。中でも青銅製のヤリガンナや大塚の木製品、獣骨などが注目される。古墳時代には陶質土器を検出した住居跡など多くの住居跡、古代には規格制をもった掘立柱建物群、くりぬきや組み合わせの井戸、また、中世の建物群など連続と人々の生活が続いている。羽田遺跡も調査例が少ないが下部遺

跡と同じような状況と考えられる。特に、古墳時代終末期、横穴墓を造り、そこに埋葬されていた人々と下郡遺跡・羽田遺跡との関係は重要であるといえよう。

参考文献

- 「大分市史 上巻・中巻」 大分市 1987年
「多武尾遺跡調査概報」 大分市教育委員会 1982年
「尾崎遺跡調査概報」 大分市教育委員会 1984年
賀川光夫、橋晶信「小池原貝塚」 「大分県文化財調査報告 第13集刊」 1967年
「守國遺跡・昭和50・51年度発掘調査概報」 大分市教育委員会 1979年
「下郡遺跡群 発掘調査概報」(1)・(2) 大分市教育委員会 1990・1991年
「上野遺跡」 大分市教育委員会 1990年



第3圖 長谷塚穴群の位置と周辺の遺跡 (1/50000)

大分市全圖



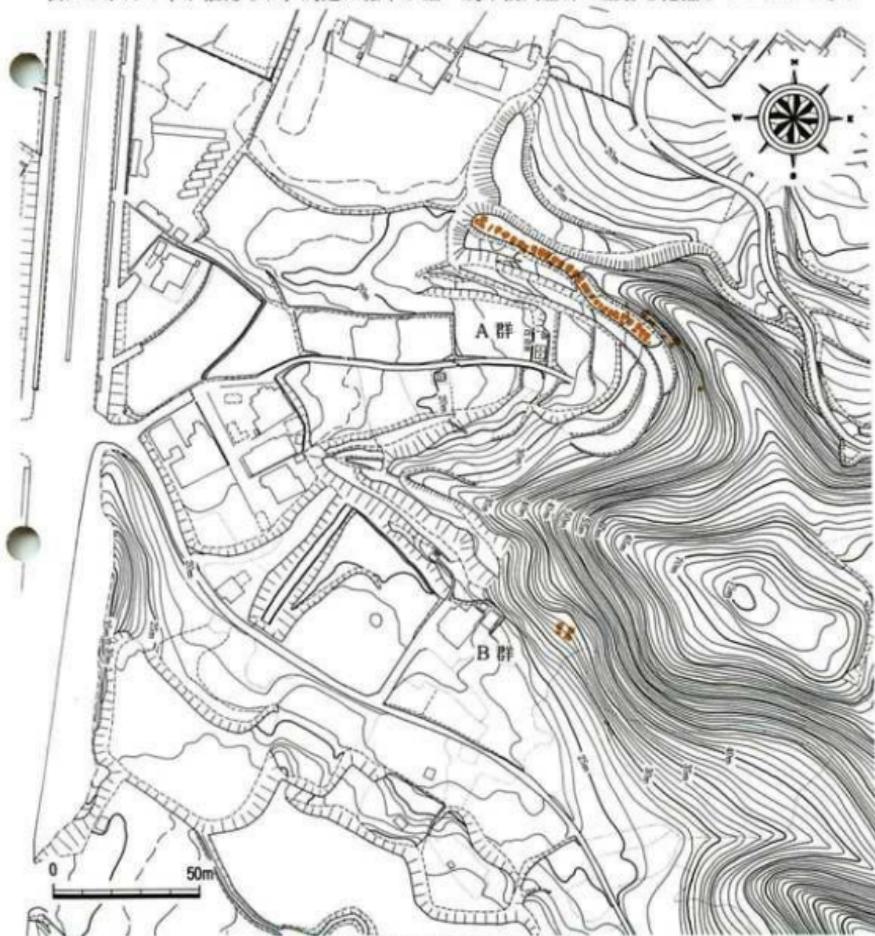
区	名称	区数	備考
1	長谷橋六重群	106	
2	神尾六重群	104	
3	柳川六重群	104	
4	生石六重群	107	
5	六重崎六重群	106	
6	石原六重群	106	
7	小野六重群	106	
8	餅田六重群	106	
9	井手ノ上六重群	106	
10	上片瀬六重群	106	
11	南平今津六重群	106	北平今津(2)・南平今津(2)
12	小野新六重群	106	
13	大野六重群	106	大野(1)・大野(2)
14	志保六重群	106	
15	志保下六重群	106	
16	志保下六重群	106	
17	志保下六重群	106	
18	志保下六重群	106	
19	志保下六重群	106	
20	志保下六重群	106	
21	志保下六重群	106	
22	志保下六重群	106	
23	志保下六重群	106	
24	志保下六重群	106	
25	志保下六重群	106	
26	志保下六重群	106	
27	志保下六重群	106	
28	志保下六重群	106	
29	志保下六重群	106	
30	志保下六重群	106	
31	志保下六重群	106	
32	志保下六重群	106	
33	志保下六重群	106	
34	志保下六重群	106	
35	志保下六重群	106	
36	志保下六重群	106	
37	志保下六重群	106	
38	志保下六重群	106	
39	志保下六重群	106	
40	志保下六重群	106	
41	志保下六重群	106	
42	志保下六重群	106	
43	志保下六重群	106	
44	志保下六重群	106	

第三章 長谷横穴墓群の調査

1 分布と概要

長谷横穴墓群は大きく2群に分かれる。A群は小谷に挟まれた南側斜面にあたり、標高30mから40mに東西100mに亘り48基の横穴墓が分布する。一方、B群はA群が存在する小谷を越えた南側の標高32mに2基存在する。

A群の分布は地質の影響により西側にやや高い傾斜で広がりを見せる。調査以前は、ひな壇状にみかんの木が植えられ、周辺は雑木が生い茂り横穴墓群の全容を把握することはできな



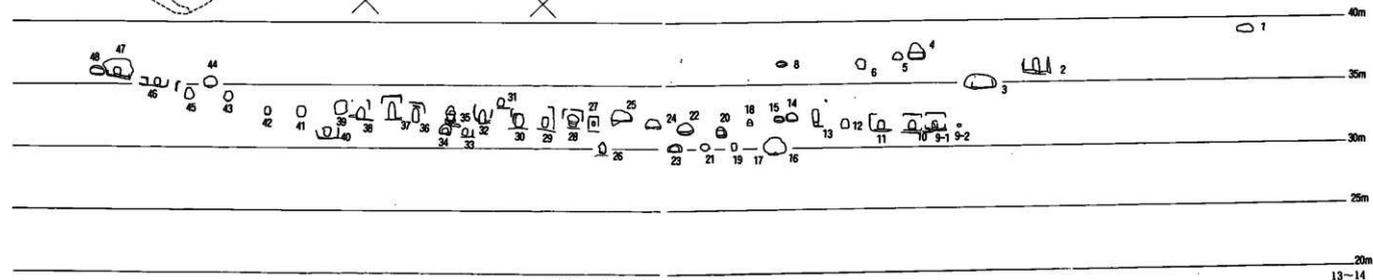
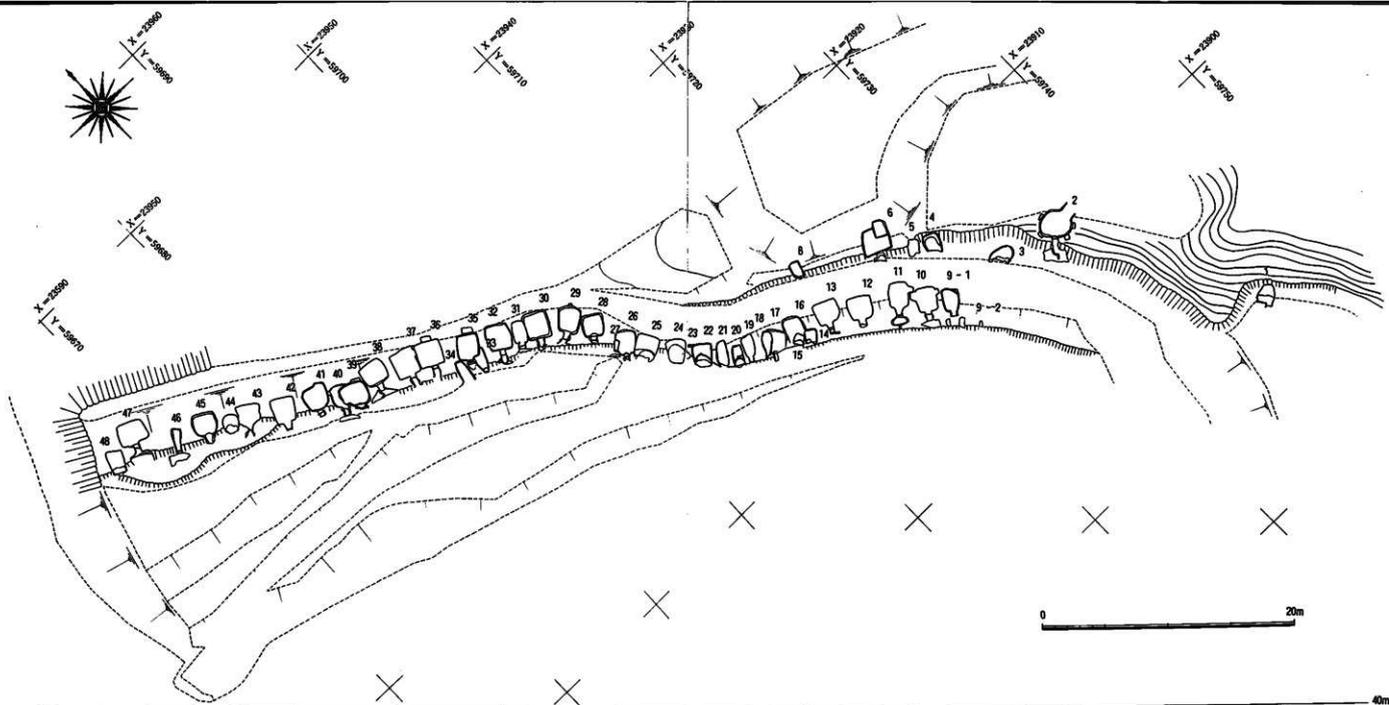
第5図 長谷横穴墓群分布図 (1/2000)

かった。このため、調査対象区域の樹木の伐採を始めにおこなった。これにより埋没の横穴墓をかなりの数確認できた。横穴墓の分布する南側斜面は大きく3つのテラスが認められた。テラス部分は横穴墓に付随する墓道ではなく、開墾時に造られたテラスであることが表土を剥いだ時点で確かめられ、斜面も地山を削っていた。さらに地元の話によると昭和30年代にブルドーザーによって造成をおこなったといい、横穴墓の羨門の大半が削平され、前庭部や墓道が残されていないのはこの時点におけるものと考えられる。1番上のテラスは標高35～36m付近にあり、2号横穴墓から8号横穴墓が存在する。2番目のテラスは標高30～35mの比高差で東西に長く延び、9号横穴墓から48号横穴墓が存在する。3番目のテラスは27～28m付近に見られ、この部分では横穴墓は掘削されていない。

横穴墓の群構成は大きく3支群（Ⅰ支群：1号横穴墓、Ⅱ支群：2号～8号横穴墓、Ⅲ支群：9号～48号横穴墓）に分布し、さらに細かく単位群に細分されると考えられる。これらの横穴墓は大半が削平され、原形を留めているものが少ない。横穴墓玄室より平安・鎌倉・室町・江戸・昭和時代の各時代の遺物が出土し、また、各時代にそれぞれの二次的利用があったことが確認された。遺存状態のよい横穴墓としては26号・40号・46号横穴墓が上げられる。

B群の49号・50号横穴墓の2基は単独で掘削されており、遺構の遺存状態は良かった。

以上のように、A群とB群を合わせて50基の横穴墓の存在が明らかになった。大半が後世に何等かの利用が認められており、当時の状態を残しているものはほんの一部であった。

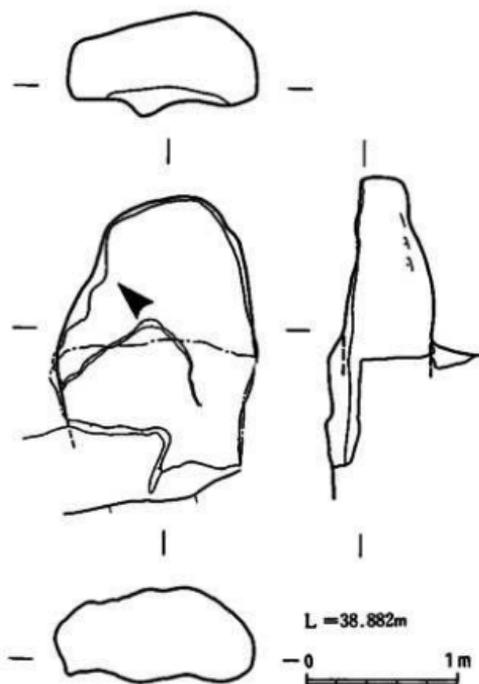


第6図 長谷横穴墓群 配置図 (1/300)

2 横穴墓

1号横穴墓

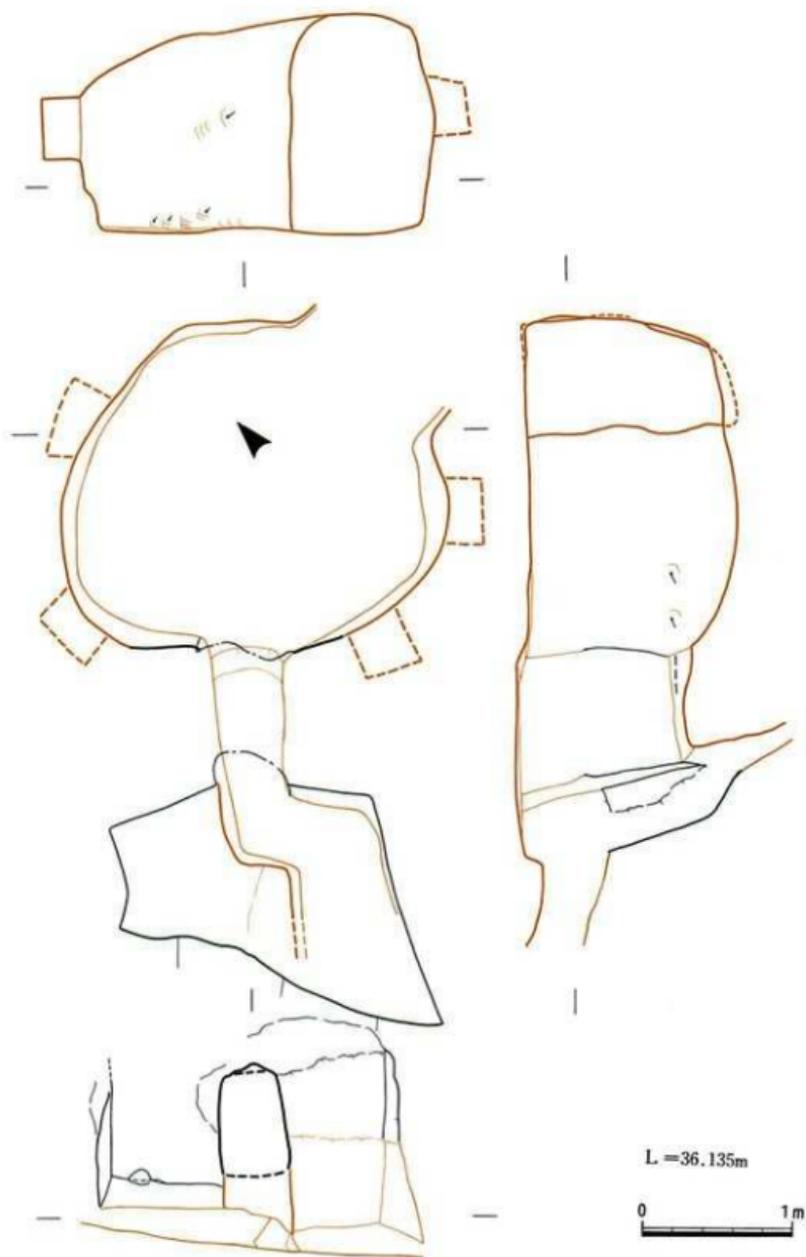
1号横穴墓は調査区最東端にあり、標高約39m付近にある群中で最も高い所に位置している。玄室主軸をN-52°-Eに振り、南西方向に開口する。羨門部から玄室前方部は削平されており構造を窺い知ることはできない。玄室平面は不整形であり、奥壁も形成されているが、不明瞭な形態を呈する。天井部はアーチ形を呈し、最大高が56cmと低い。右側壁に幅4cmの工具痕が奥壁方向に見られた。更に天井部においても手前から奥壁方向に向かって側壁同様の工具痕が認められた。



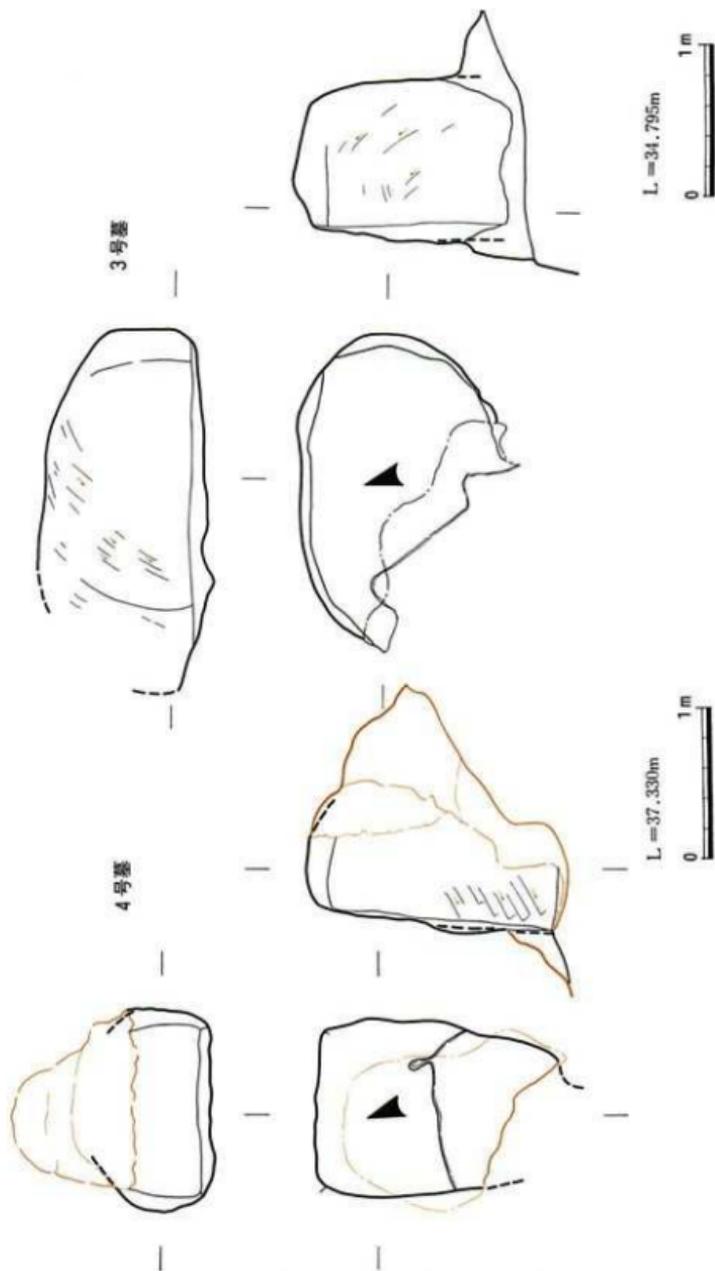
第7図 1号横穴墓平面・断面実測図(1/40)

2号横穴墓

2号横穴墓は1号横穴墓より一段低い位置にある。玄室主軸をN-44°30'-Eにとり、西南方向に開口する。調査前は羨門が半分以上埋まった状態であったため、遺存状態がよいと考えられたが、内部はかなりの二次的加工が見られた。前庭部は確認されたが、東側は床面が約40cm程掘り下げられていた。これは玄室および羨道部においても同様な状態であった。玄室はほぼ全体にわたり二次的加工がされており、円形に近い平面形態となっていた。両壁には40-50cm程の棚状の掘り込みが4ヶ所あり、さらに奥壁と右側壁とのコーナー付近には幅が1mを越えるトンネルが後世に造られ、これは東に3m程で左側にL字状に曲がり2m先で行き止まりとなっていた。玄室の壁には幅10cmの工具痕が全体に認められ、奥壁は右上から左下方向に斜めに連続して掘削している。これらの工具痕は当初の玄室壁工具痕を切っており、このような状況からすれば横穴墓を防空壕として二次的に加工し、利用したと考えられる。



第8图 2号横穴墓平面·断面实测图(1/40)



第9图 3号·4号横穴墓平面·断面实测图(1/40)

3号横穴墓

3号横穴墓は2号横穴墓の西側の一段低い位置にあり、玄室主軸を $N-17^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

南西部分が削平されているため、開口部分が南側で平入りとなるか西側で妻入りとなるか判断に迷ったが、周りの横穴墓の状況や玄室内部の状態から南側を開口部にするのが妥当であると判断した。玄室床面は楕円形を呈しており天井部はアーチ形を成す。壁および天井全体には幅1cm程の棒状の工具で広げられた跡があり、玄室全体が二次的加工されたことを窺い知ることができる。よって当初どのように掘削されて、構造がどのようなものであったかは不明である。

4号横穴墓

4号横穴墓は5号横穴墓と併存してやや高い所に位置し、玄室主軸を $N-19^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

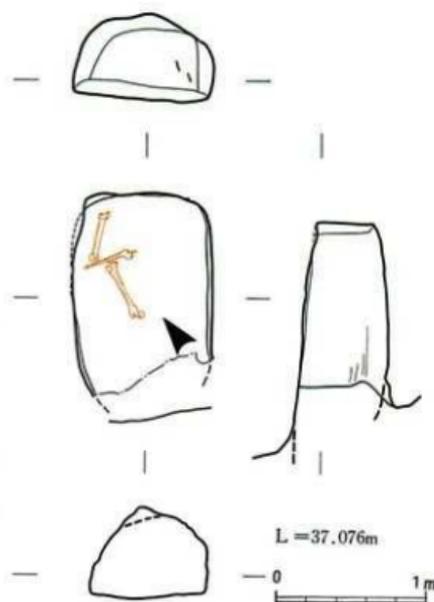
羨道部と前庭部は削平され、天井部分も崩落しており不明である。玄室床面は玄室前幅がやや狭い隅丸長方形である。奥壁と側壁との境には稜線があり、アーチ状を成す。右側壁には幅6cmの工具痕が左上から右下斜め方向に平行して認められた。遺構の状態から掘削当初に使用された工具痕と思われる。遺物としては、耳環(25)が1点出土している。

5号横穴墓

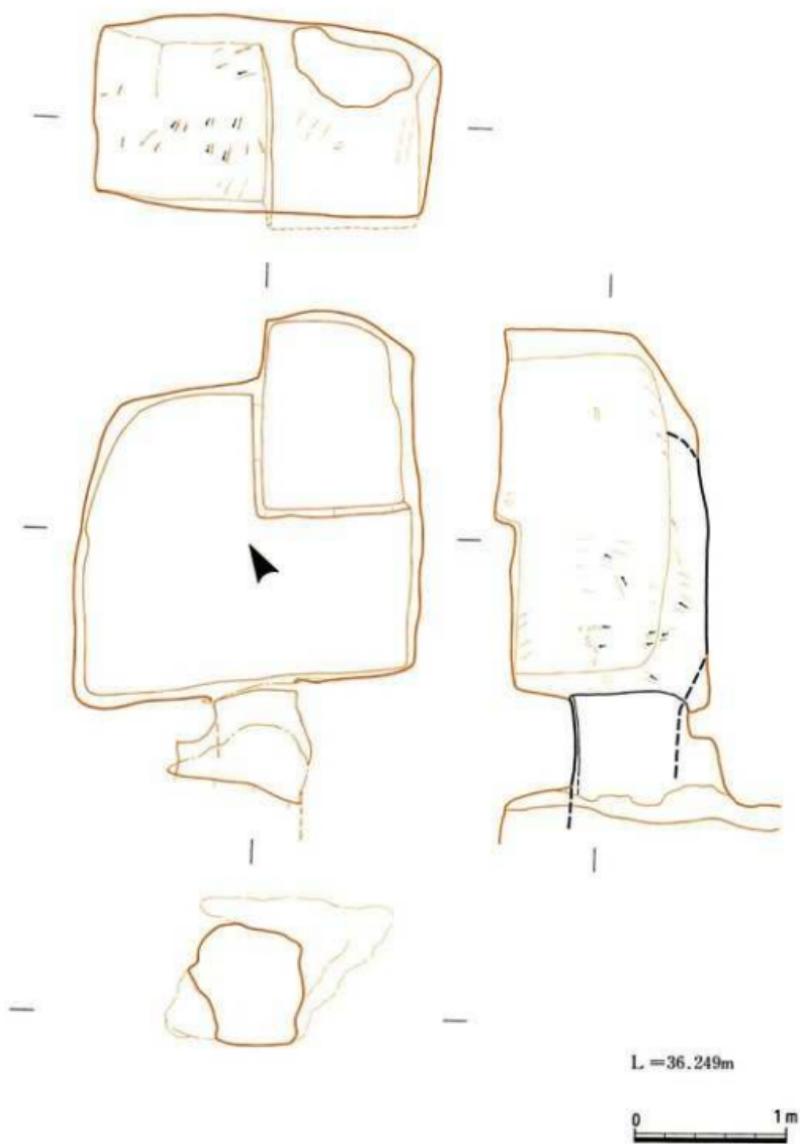
5号横穴墓は4号横穴墓と並んで掘削されており、玄室主軸を $N-41^{\circ}-E$ にとり、南西方向に開口する。

羨道から玄室前端部は削平されているが、左側面では玄室前壁の稜線が見られることから、およその規模を知ることができる。玄室は4号横穴墓と並んで群中ではやや小型である。奥壁は側壁と明瞭に区分されアーチ状の形態を成し、アーチ形天井を呈する。右側壁には幅5cmの工具痕が奥壁方向に見られ、奥壁には幅4cmの工具痕が2ヶ所で突いた状態で認められた。これらは掘削当初のものであるが、二次的に幅1cmの棒状工具が使用されていた。

なお、玄室より頭骸骨、大腿骨などの人骨



第10図 5号横穴墓平面・断面実測図(1/40)



第11图 6号横穴墓平面·断面实测图(1/40)

が出土している。骨の遺存状態は大変よく埋葬された後動かした形跡があり、埋土層が腐葉土中にあることから二次的に埋葬されたものと判断される。

6号横穴墓

6号横穴墓は5号横穴墓よりやや下に位置し、玄室主軸を $N-31^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

羨門と前庭部は削平され、玄室内部は二次的加工により掘り広げられていた。かろうじて天井部分は当初のものと思われる。床面は約40~50cm程掘り下げられていた。また、右奥壁沿いには方形の掘り込みが認められた。また、奥壁の一部は背後より削平を受け穴が穿たれていた。側壁には幅3cmの工具痕と幅1cmの棒状の工具痕が認められた。

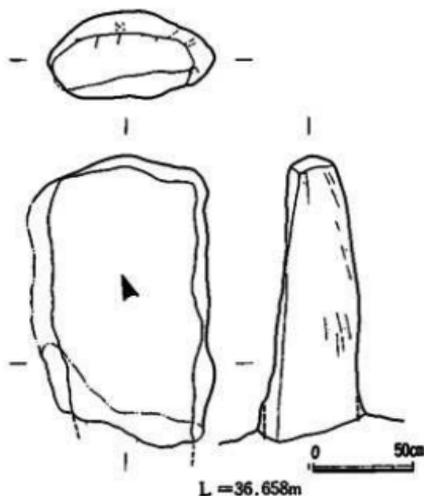
7号横穴墓

7号横穴墓は6号横穴墓と8号横穴墓の中間に位置する。遺構は前方部と後背部からの削平により、わずかに玄室の半分しか遺存していなかった。また天井の上部も削平されており、崩壊の危険性が高かったことから、安全面を考え調査を断念した。

8号横穴墓

8号横穴墓は2号横穴墓から8号横穴墓で形成される支群の中で最も西に位置し、玄室主軸を $N-19^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

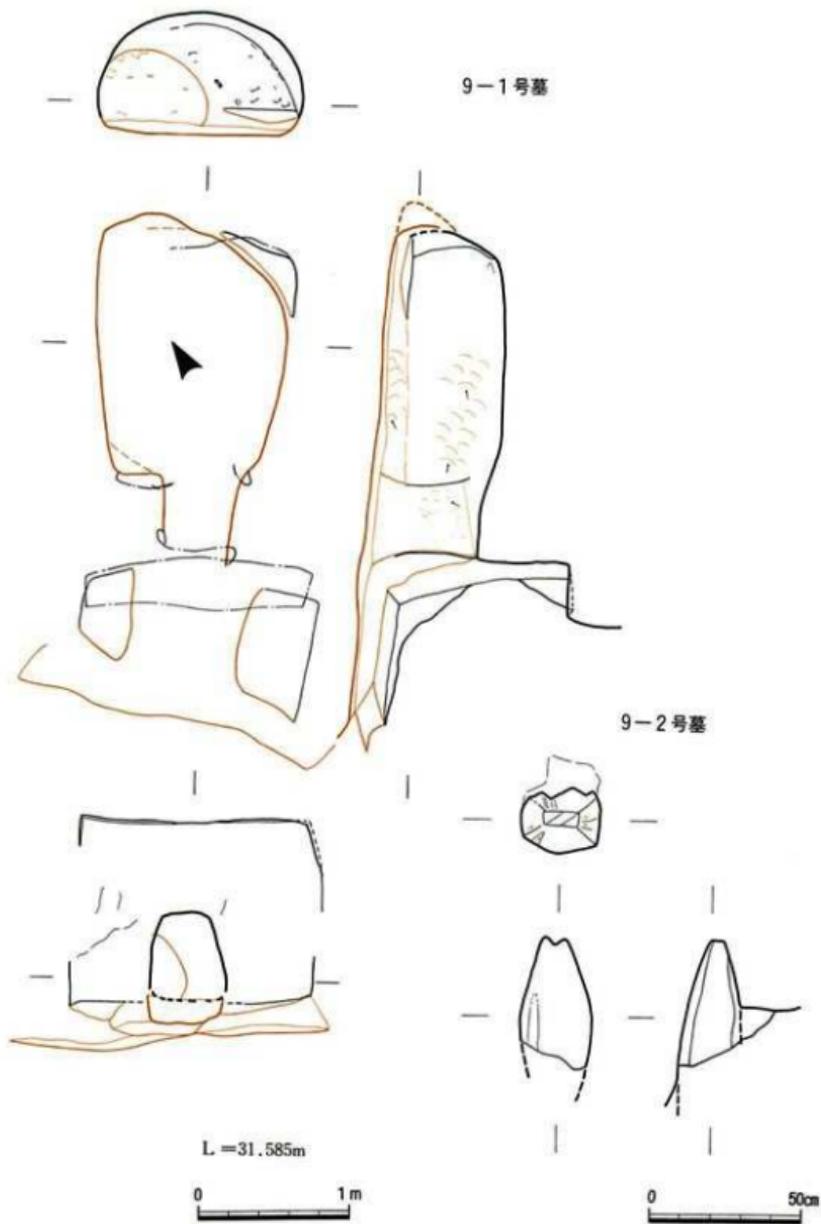
玄室前端部は削平されており規模は不明であるが、玄室床面は隅丸長方形を呈する。奥壁は不整ながらもアーチ状を成しており、天井部は最大高70cmと非常に低いアーチ形天井である。側壁ならびに奥壁と側壁との境には幅5cmの工具痕が認められた。奥壁と側壁との境は工具で突くことにより稜線を仕上げている。工具痕の方向は全て手前から奥に向かってまっすぐ伸びていた。



第12図 8号横穴墓平面・断面実測図(1/30)

9号横穴墓

9号横穴墓は下段に群集する中で最も東側に位置し、玄室主軸を $N-34^{\circ}-E$ にとり、南南



第13图 9-1·9-2号横穴墓平面·断面实测图 (1/40·1/20)

西方向に開口する。

前庭部と飾縁は遺存しているが床面は玄室内部まで約10cm程二次的に掘り下げられていた。玄室の左奥壁が掘り広げられていたが、当初は前壁が狭い羽子板のような平面形態を呈していたと思われる。奥壁は明瞭なアーチ状を呈し、天井部はアーチ形を成す。側壁には幅10cmの工具痕が玄門方向上から奥壁方向下に向かって削り広げられていた。床の掘り下げも同様に認められた。また、奥壁の左部分は幅10cmの工具で掘削した後、さらに幅5cmの工具が使用されていた。また、幅5cmの工具痕が奥壁に向かって突いた状態で残っていた。これらの工具痕は二次的に掘削を行った際、残されたものと考えられる。一方、羨道の天井部には幅4cmの工具痕が見られ、当初のものとは判断される。

なお、9号横穴墓の東側約50cm程の所に小型の掘り込みが認められた。遺構の性格は不明であるが発掘調査では9-2号横穴墓として扱っている。

9-2号横穴墓

9-2号横穴墓は9号横穴墓の東側にあり、玄室主軸を $N-42^{\circ}30'-E$ にとり、南西方向に開口する。

遺構の性格は明白ではないが小型の横穴墓として扱うことにした。

玄室の前庭部は削平されており規模と構造は不明である。玄室床面は楕円形を呈するものと考えられる。側壁や天井部には幅3cmの工具痕が奥壁に向かって直線状に認められる。

10号横穴墓

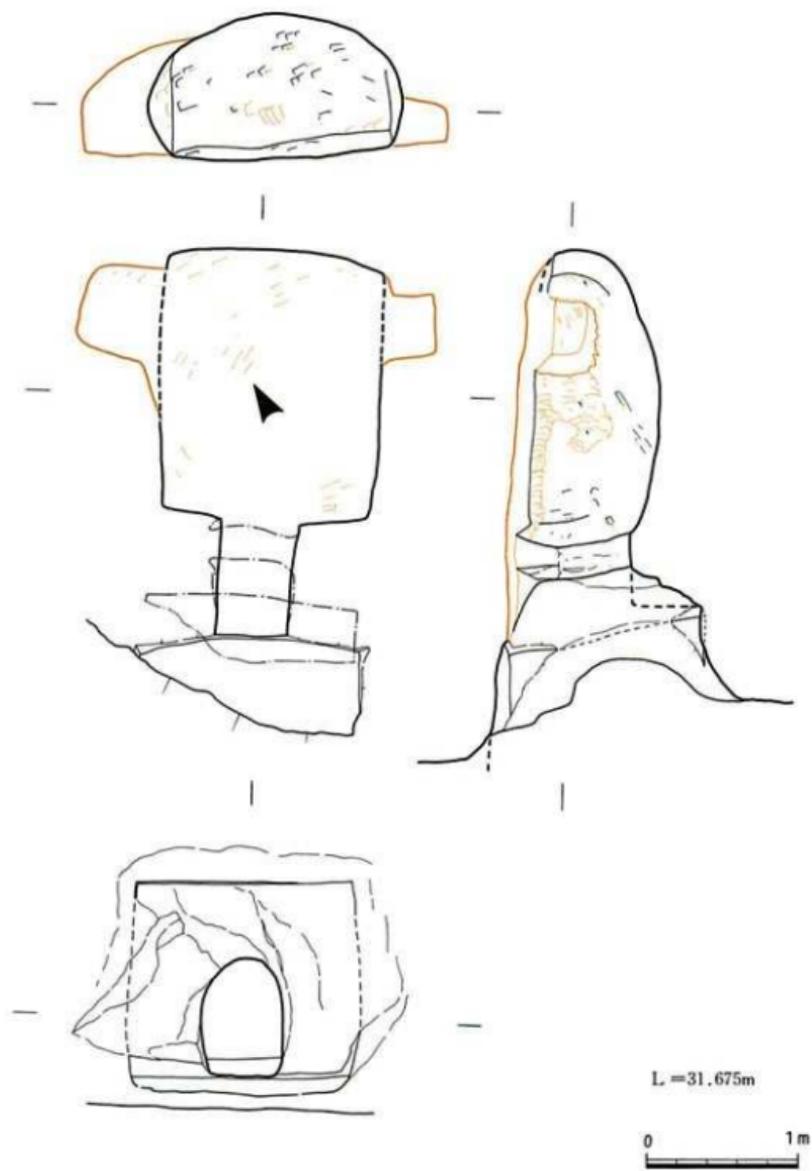
10号横穴墓は9号・10号・11号横穴墓で形成された単位群の一基である。玄室主軸を $N-31^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

前庭部は床と前端部がやや掘削されていた。羨門の上部は崩落し、羨道側壁の上面は剝離していた。玄室床面は二次的に掘り下げされていたが、妻入り長方形の平面形態を呈すると思われる。両側壁の奥側には方形の掘り込みが認められ、幅10cmの工具痕が見られた。また、当初の掘削に使用された幅5.5cmの工具痕が側壁と奥壁の一部に認められた。

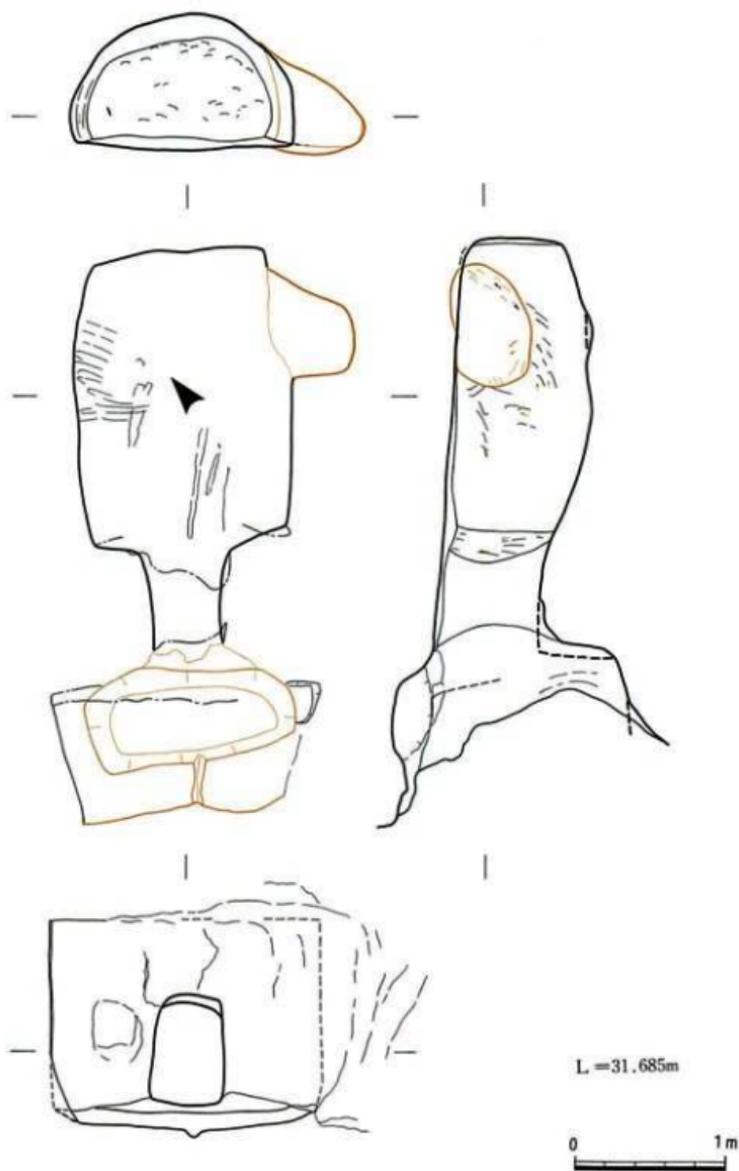
11号横穴墓

11号横穴墓は玄室主軸を $N-42^{\circ}-E$ にとり、南西方向に開口する。

前庭部の中心には楕円形の掘り込みが見られ、切り合いより二次的加工と思われる。玄室床面は10号横穴墓よりやや長い妻入り長方形を呈する。奥壁は垂直に立ち上がりアーチ形天井を形成する。なお、右側壁の奥側には奥行き40cm程の掘り込みが見られた。その壁面には幅1cmの棒状の工具痕が見られ、二次的に掘削を行ったことを示唆している。また、奥壁面には幅5cmの工具で突いた跡が認められ、これは当初のものと思われる。玄室内より須臾器の壺(11)の



第14图 10号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)



第15图 11号横穴墓基平面·断面实测图(1/40)

破片と思われる遺物が1点出土している。

12号横穴墓

12号横穴墓は玄室主軸を $N-32^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

前庭部および羨道の一部は削平されていた。玄室床面はやや前壁幅が狭いものの方形に近い形態を呈する。奥壁はやや高さが低いアーチ状を呈し、アーチ形天井を形成する。床面および側壁・奥壁には幅4cmの工具痕が残っていた。天井部は下から見て右回りに掘削が行われた痕跡が見られた。なお、羨道の側壁にも水平方向に削り方向が認められた。

13号横穴墓

13号横穴墓は12号横穴墓よりやや高い位置にあり、玄室主軸を $N-26^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

玄室および羨道の床面は二次的に約30cm程掘り下げられており、羨門付近では階段状に掘削されている。玄室の右側壁は大きく掘り広げられていたが、当初床面は方形を呈していたと思われる。拡張部分には幅10cmと幅1cmの棒状の工具が使用されていた。また奥壁左端下部には上から下方向に連続して幅7cmの工具で削った跡が見られた。なお、天井部分や側壁上部には当初使用されたと思われる幅6cmの工具痕が残っていた。

14号横穴墓

14号横穴墓は13号横穴墓とほぼ同じ高さにあり、玄室主軸を $N-35^{\circ}30'-E$ にとり、南南西方向に開口する。

玄室前端部は削平されており、規模は不明である。奥壁は台形に近いアーチ形を呈し、その高さで天井を形成している。床面、側壁・天井部には幅5cmの工具痕を使用し削った痕跡が見られた。天井中央部分に工具痕の区切りが見られ、掘削工程を窺い知ることができる。また、奥壁には工具で突いた跡が見られたため、掘削時は壁面を突くように削ったのであろう。

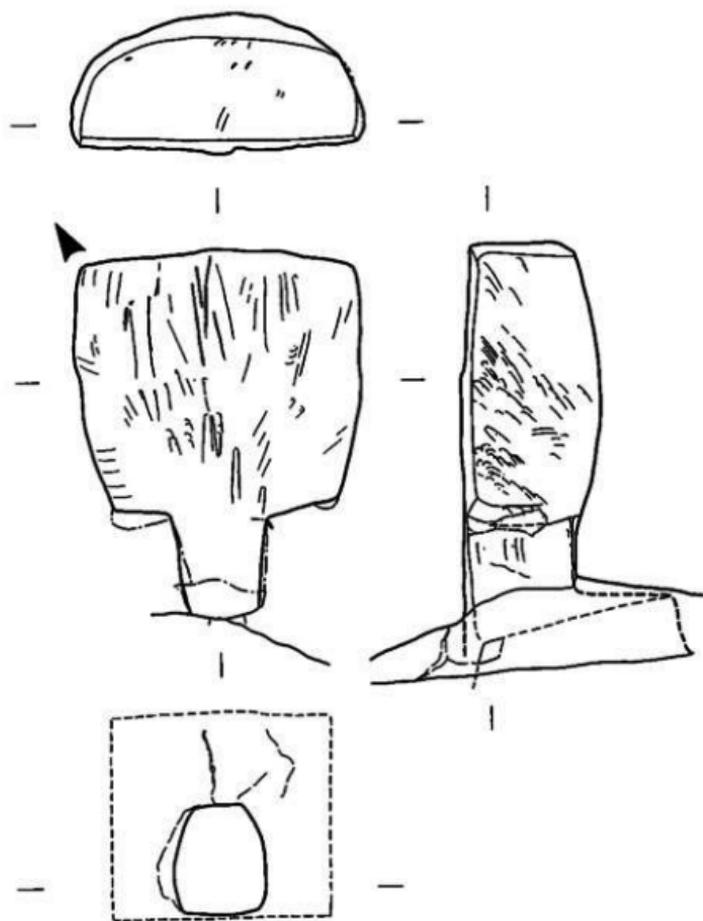
15号横穴墓

15号横穴墓は14号横穴墓と併存し、玄室主軸を $N-48^{\circ}-E$ にとり、南西方向に開口する。

形態はやや小型であり、玄室前端部分が削平され、全体の形状は不明であるが、奥壁は明瞭に形成されアーチ形天井を呈する。床面および側壁には手前から奥壁方向に向かって工具で突いた跡が見られた。さらに奥壁には幅5.5cmの工具痕が残されていた。

16号横穴墓

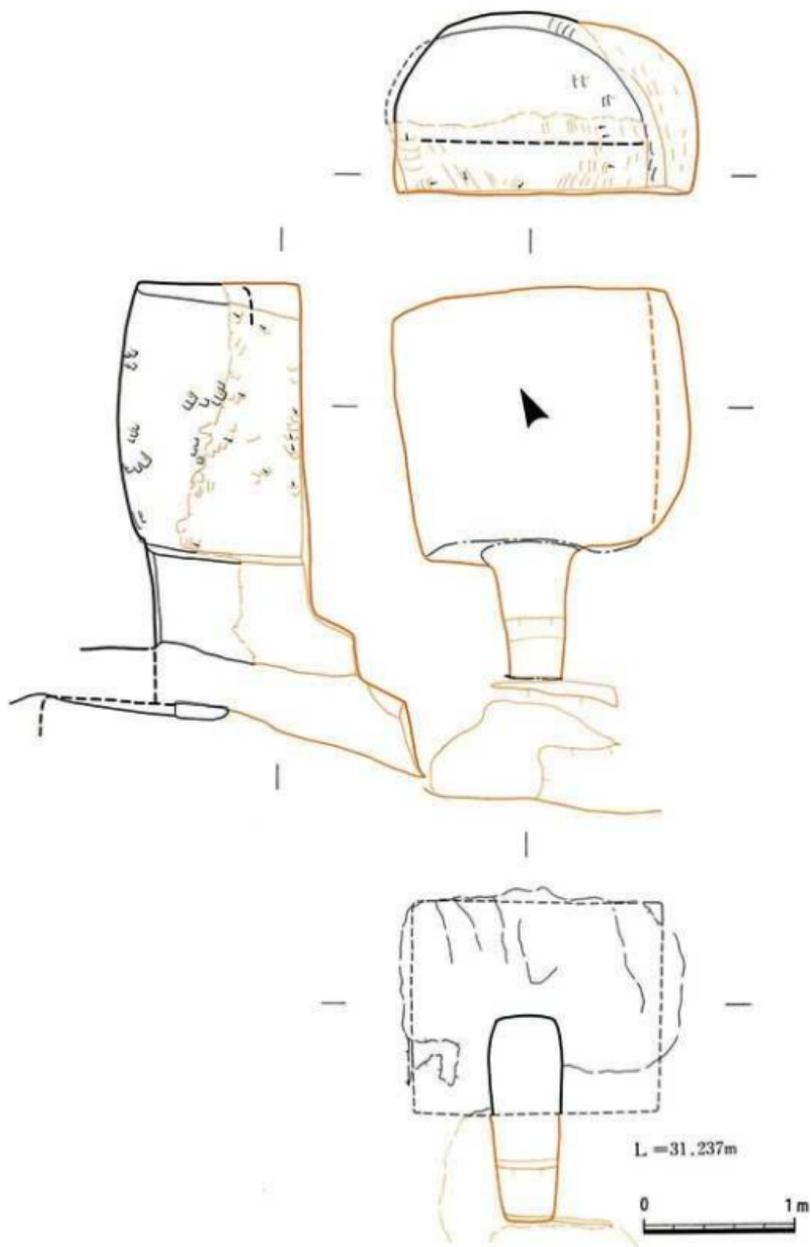
16号横穴墓は15号横穴墓の下部にあたり、玄室主軸を $N-29^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。



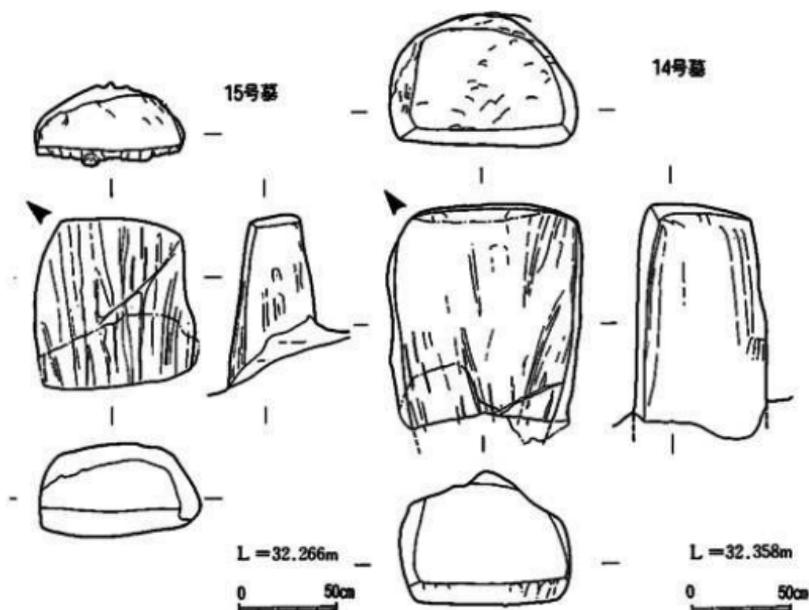
L = 31.666m



第16图 12号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)



第17图 13号横穴墓平面·断面实测图(1/40)



第18図 14号・15号横穴墓平面・断面実測図 (1/30)

羨門部分と玄室の左壁面は拡張され17号横穴墓の羨門部分とつながり、大きく開口していた。玄室床面は妻入り隅丸長方形を呈し、天井部は中央が最も高いドーム形天井を成している。また、天井と羨道の天井には後線で境界が明瞭に見られる。

玄室内より鉄製の鏝(26)が出土しており、二次的加工に使用された工具であると思われる。

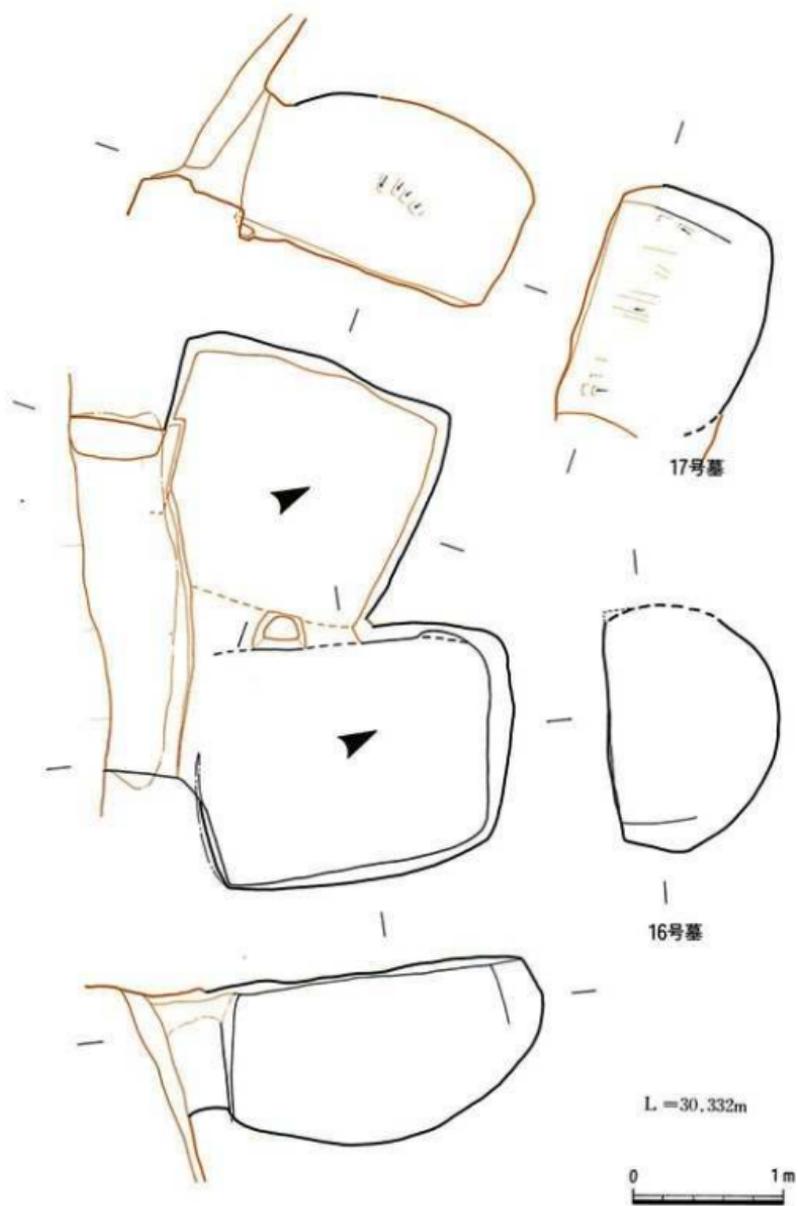
17号横穴墓

17号横穴墓は16号横穴墓と接し、二次的に右側壁が取り払われ、玄室が広げられていた。玄室主軸は $N-30^{\circ}-E$ をとり、南南西方向に開口する。

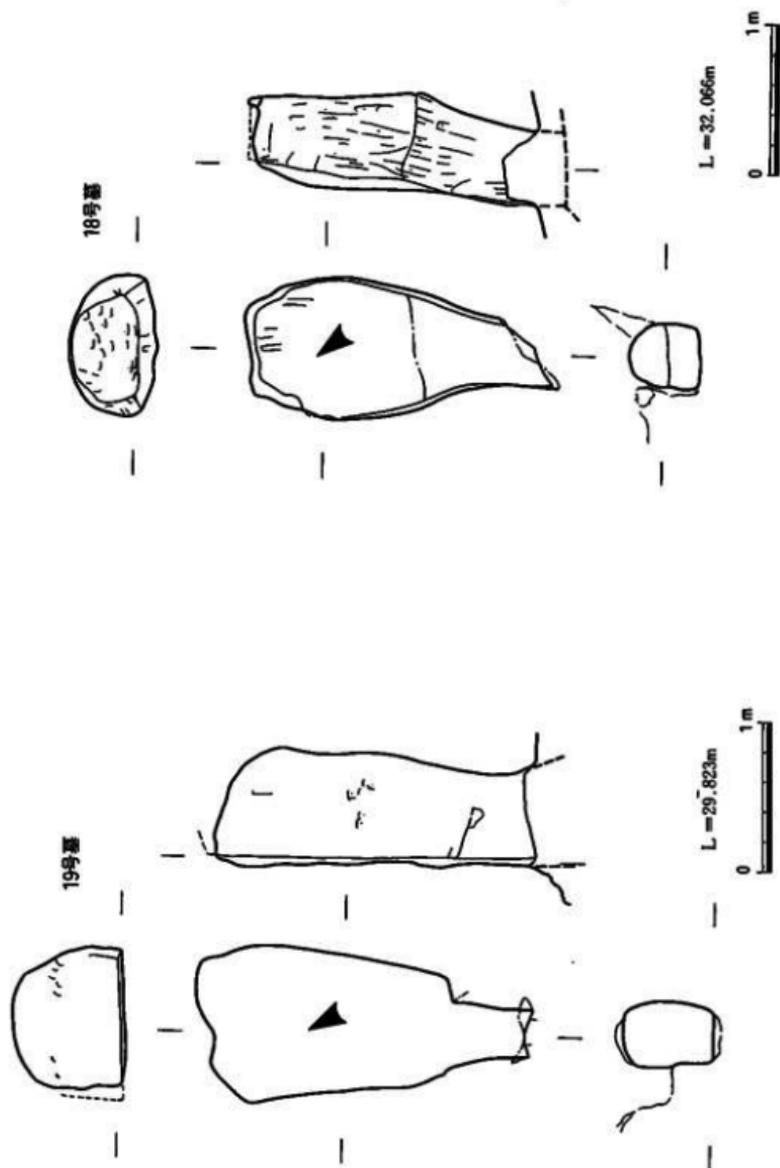
玄室床面は二次的な加工により広げられているが、方形を呈していたものと思われる。また、羨道の床面と玄室の床面との間に高低差が見られることや奥壁下部に二次的拡張時の工具痕が認められることから床面が約20cm程掘り下げられたものと考えられる。なお、奥壁の工具痕は幅6.5cmの熊手状工具痕が見られ、二次的に使用されたものであろう。

18号横穴墓

18号横穴墓は玄室主軸を $N-38^{\circ}-E$ にとり、南西方向に開口する。



第19图 16号·17号横穴墓平面·断面实测图(1/40)



第20图 18号·19号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)

羨門は斜めに削平されているが、左羨門部分の壁面は遺存しており規模・形態を復元することができた。横穴墓の全長は205cmを有し、玄室と羨道との境は見当たらない。玄室床面は妻入り楕円形を呈し、アーチ形天井を成す。羨門から1m程の所には1段階目に掘削を施した工具痕が側壁と天井を巡っていた。そして一旦掘り進んだ後、さらに2段階目には天井高を水平方向に変え、そのまま奥壁まで掘り込んでおり、掘削行程が窺える。掘削には幅5cmの工具を使用し、突くように掘削を行っている。

19号横穴墓

19号墓は玄室主軸を $N-29^{\circ}-E$ をとり、南南西方向に開口する。

羨道の一部は削平されていた。玄室は奥壁部分がやや不整であるが羽子板の形に類似する。天井はアーチ形を呈するが羨道部との境は明確になっておらず、平面形態でその境を確認した。側壁と奥壁の一部に当初掘削に使用されたとと思われる幅4cmの工具痕が認められた。なお、玄室内より人骨の小片が確認されたが、風化しており遺存状態は良好でなかった。

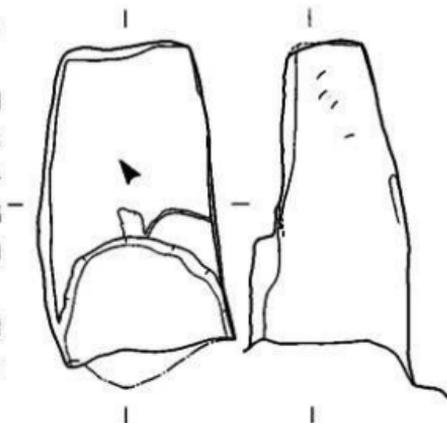


20号横穴墓

20号横穴墓は玄室主軸を $N-35^{\circ}-E$ をとり、南南西方向に開口する。

玄室前端部は削平されており、規模は不明である。玄室平面は長方形を呈し、奥壁面は台形に近い平面形態を成し、アーチ形天井を呈する。側壁や天井部には掘削当初の幅6cmの工具痕が見られ、手前から奥壁に向かって削りの方向が見られた。

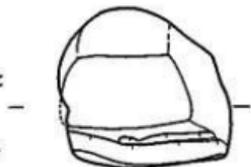
玄室内より人骨の小片が見られたが、腐葉土の中より出土しており二次的埋葬であろう。



21号横穴墓

21号横穴墓は玄室主軸を $N-36^{\circ}-E$ をとり、南西方向に開口する。

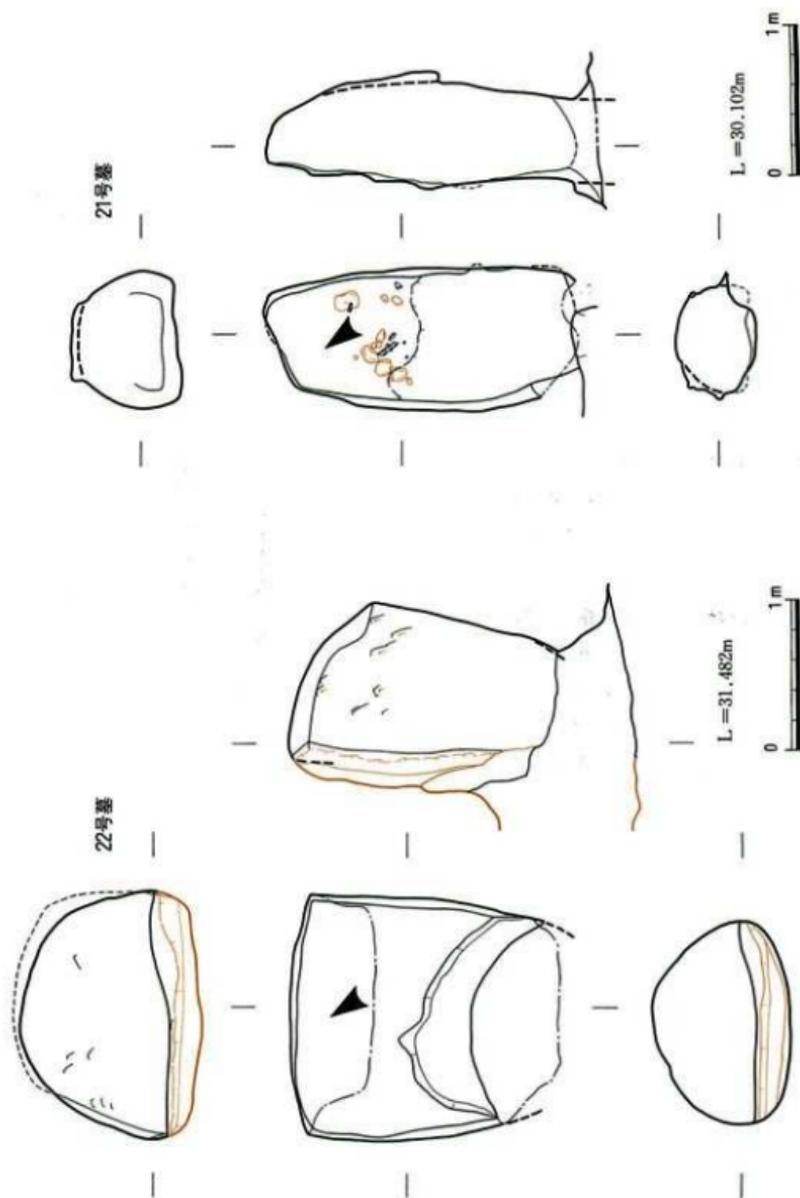
全長は羨道が削平されているため不明であるが、玄室床面は妻入り隅丸長方形を呈し、玄室長200cmを有する。奥壁面と側壁と



L = 31.253m

0 50cm

第21図 20号横穴墓平面・断面実測図(1/30)



第22图 21号·22号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)

の境は不明瞭であるが、床面から奥壁面の立ち上がりは明瞭に区分されており天井部はアーチ形天井を形成する。なお、玄室の天井部は羨道部に向かって緩やかに下降し羨門に至るが、境界は不明瞭であった。

玄室中央床面より人骨数点が検出されている他、須恵器の甕(13)の破片が1点出土している。

22号横穴墓

22号横穴墓は21号・23号横穴墓の間の上段に位置する。玄室主軸をN-35°-Eにとり、南西方向に開口する。

遺構は羨道部から玄室の玄門側が失われていた。玄室の平面形はやや前壁部分の袖が狭いものの方形に近い形態を呈するものと思われる。奥壁は床面より緩やかに弧を描きながら内側に反り天井部分に至る。天井はそれより羨道部に向かって緩やかに下降し、アーチ形天井を形成している。

床面は、二次的拡張により10cm程掘り下げられていた。奥壁には掘削当初の幅5.5cmの工具痕が認められた。

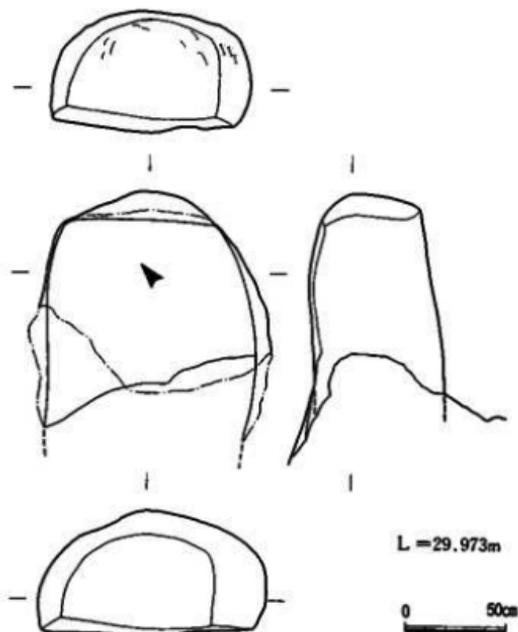
23号横穴墓

23号横穴墓は玄室主軸をN-43°-Eにとり、南西方向に開口する。

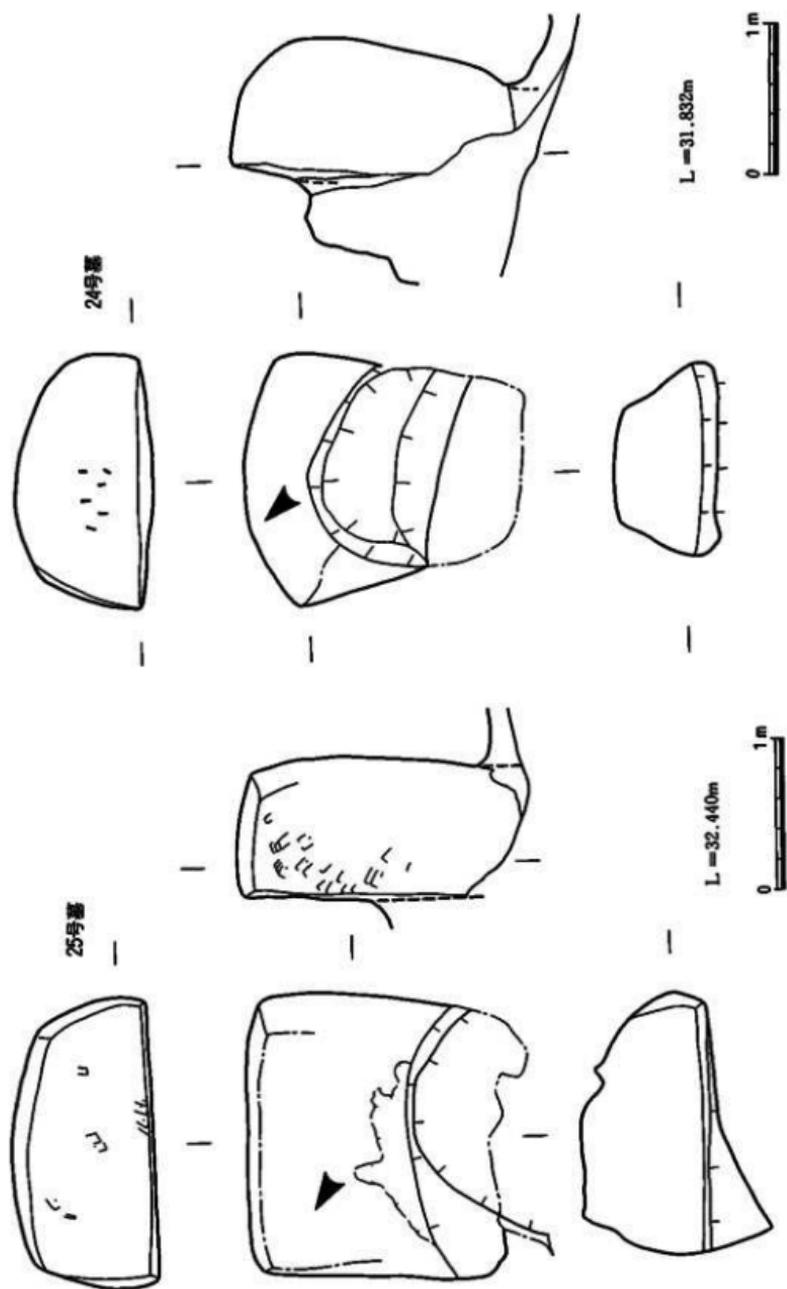
玄室は半分近くが削平されており、羨道部は遺存していない。玄室は主軸方向に長いことから平面形が妻入り隅丸長方形になるものと推測される。奥壁はアーチ形を呈し、側壁との境界が明瞭に認められた。また、掘削当初の幅4cmの工具痕が壁面に見られた。

24号横穴墓

24号横穴墓は22号・25号横穴墓の間に位置する。玄室主軸をN-44°-Eにとり、南西方向に開口



第23図 23号横穴墓平面・断面実測図(1/30)



第24图 24号·25号横穴基平面·断面实测图 (1/40)

する。

玄室の床面半分から羨道は削平され、形態を失っていた。玄室の天井部分は辛うじて遺存していた。玄室の平面形は遺存する遺構より隅丸逆台形を呈するものと考えられる。奥壁と側壁との境は明瞭ではないが、床面から天井に向かって緩やかに弧を描き、天井部に至ってアーチ形天井を形成する。内部構造は22号横穴墓と近似するが、やや天井部が退化した構造と言える。なお、側壁と奥壁との境の稜線が幅5.5cmの工具により削り出されたことが認められた。

25号横穴墓

25号横穴墓は玄室主軸をN-59°-Eにとり、西南西方向に開口する。

遺構は玄室の玄門部から羨道部にかけて失われ、玄室の床面半分まで削平を受けていた。玄室平面はほぼ方形を呈するもので、奥壁の形態はやや角張ったアーチ形を呈し、床面よりは垂直に立ち上がっている。また、天井部と側壁との境には稜線が見られ、平天井形に近い構造である。奥壁には上方から下方に向かって掘削当初の幅5cmの工具痕が認められた。側壁の奥は手前上部から奥斜め下部方向に工具痕が多数見られた。

26号横穴墓

26号横穴墓は玄室主軸をN-40°-Eにとり、南西方向に開口する。

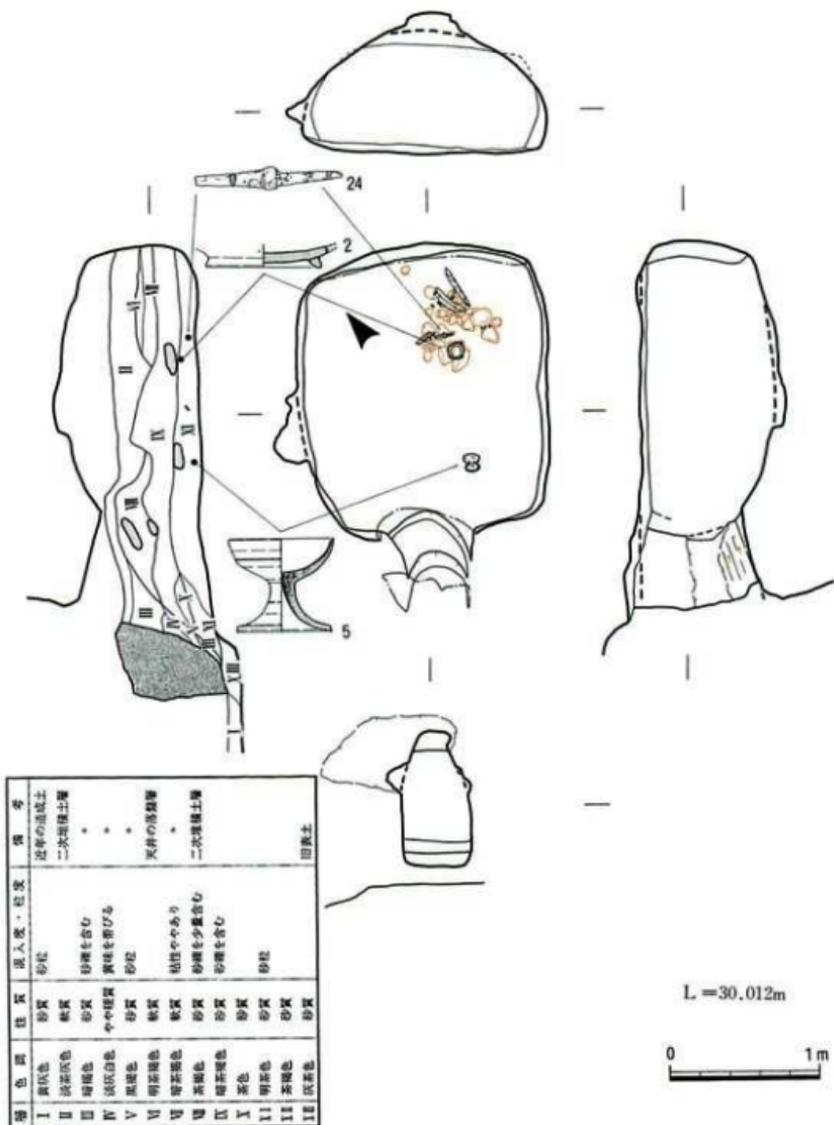
遺構は、羨門がやや削平されているが遺存状態は良い。羨道の長さは不明であるが、逆台形の形態を呈しており、天井部は羨門に向かってやや上がり気味である。羨門前方には入口を覆うほどの大きな地山礫で塞がり、一見、閉塞時のものかと思われたが、土層の埋土状況から落盤によることが判明した。したがって、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は落石の後に流れ込んで堆積したか、落石時に土が流れ込んで堆積したものと思われる。

玄室は長さ180cm、幅160cmを有し、方形の平面形態を呈する。奥壁は側壁との境が明瞭に形成されたアーチ状を呈し、天井部はアーチ形を成す。玄室の右側前方部のⅪ層から須恵器の高坏(5)が出土している。また、玄室中央には拳大から人頭大の石に混じって、須恵器(2)、刀子(24)、さらには人骨が出土している。埋土状況からすれば遺物・人骨共に床面より浮いた状態にあることから追葬時のものと考えられる。また、この追葬人骨も埋葬した後に動かしただけで認められるが、これに続いて埋葬された痕跡が窺えないため、骨の片付けのみを行ったのであろう。

掘削状況は掘削した岩盤が脆く工具痕の遺存状態が悪いが、かろうじて羨道部の側壁部分と玄室天井部に幅4cmの工具痕が認められた。

27号横穴墓

27号横穴墓は28号横穴墓の東側に位置する小型の横穴墓である。玄室主軸をN-51°-Eに



第25図 26号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

とり、南西方向に開口する。

遺構はほぼ当初の形態を保っていたが、前庭部はやや削平されていた。玄室と羨道との境は見られず羨門に至る。玄室の平面形は無袖の妻入り長方形を呈するもので奥壁に向かい幅が広がる。玄室の長さは90cm、奥壁の幅は40cmを有する。天井部はほぼ平らで平天井形を呈する。玄室の壁面には幅5cmの工具痕が手前から奥壁方向に突いた痕跡が認められた。

28号横穴墓

28号横穴墓は玄室主軸をN-35°-Eにとり、南西方向に開口する。

遺構は二次的加工により玄室の床面が10cm程掘り下げられ、羨道は広げられ改変されていた。玄室床面はほぼ方形を呈し、アーチ状の奥壁が床面より垂直に立ち上がる。天井部の高さはほぼ平らを成し、羨道付近で次第に丸味を帯びて玄門に至る。奥壁には幅6cmの工具で突いた痕跡と上方から下方に振り下ろした痕跡が認められた。一方、二次的に掘削された床面には幅1cmの棒状の工具痕と幅8cm工具痕が観察された。

29号横穴墓

29号横穴墓は28号・30号横穴墓の間に位置し、玄室主軸をN-46°-Eにとり、南西方向に開口する。

遺構の遺存状態は非常に悪く、玄室の床面は二次的加工により約30cm掘り下げられ、側壁並びに奥壁は半分近くが拡張を受けている。更に、羨門部の飾縁は一部を残すのみであり、奥壁沿いに幅26cm程の掘り込みが見られるなど改変が著しい。玄室平面形は主軸方向が長い妻入り長方形を呈していたものと考えられる。天井部は丸味を帯びドーム形天井を呈する。側壁の上方には幅4cmの掘削当初の工具痕が認められた。一方、二次的に拡張された所には、幅1cmの棒状工具痕と幅7cmの工具痕が見られた。なお、天井部分は造墓時の工具痕の方向が下から見て右回りに認められた。

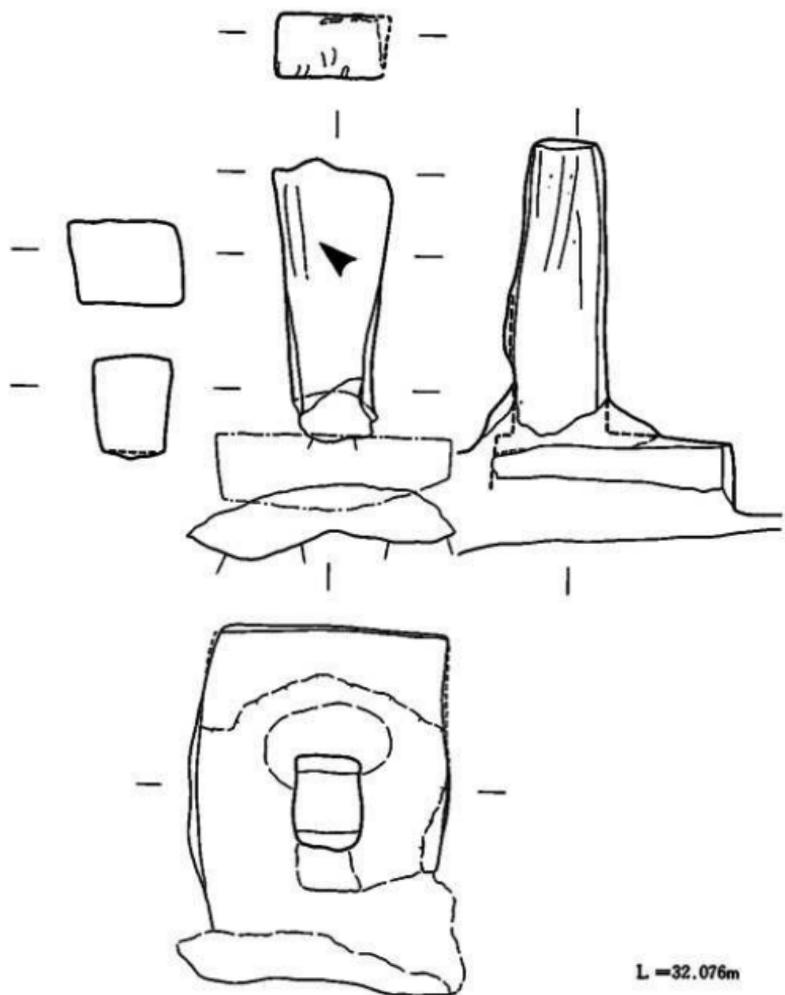
30号横穴墓

30号横穴墓は玄室主軸をN-34°-Eにとり、南南西方向に開口する。

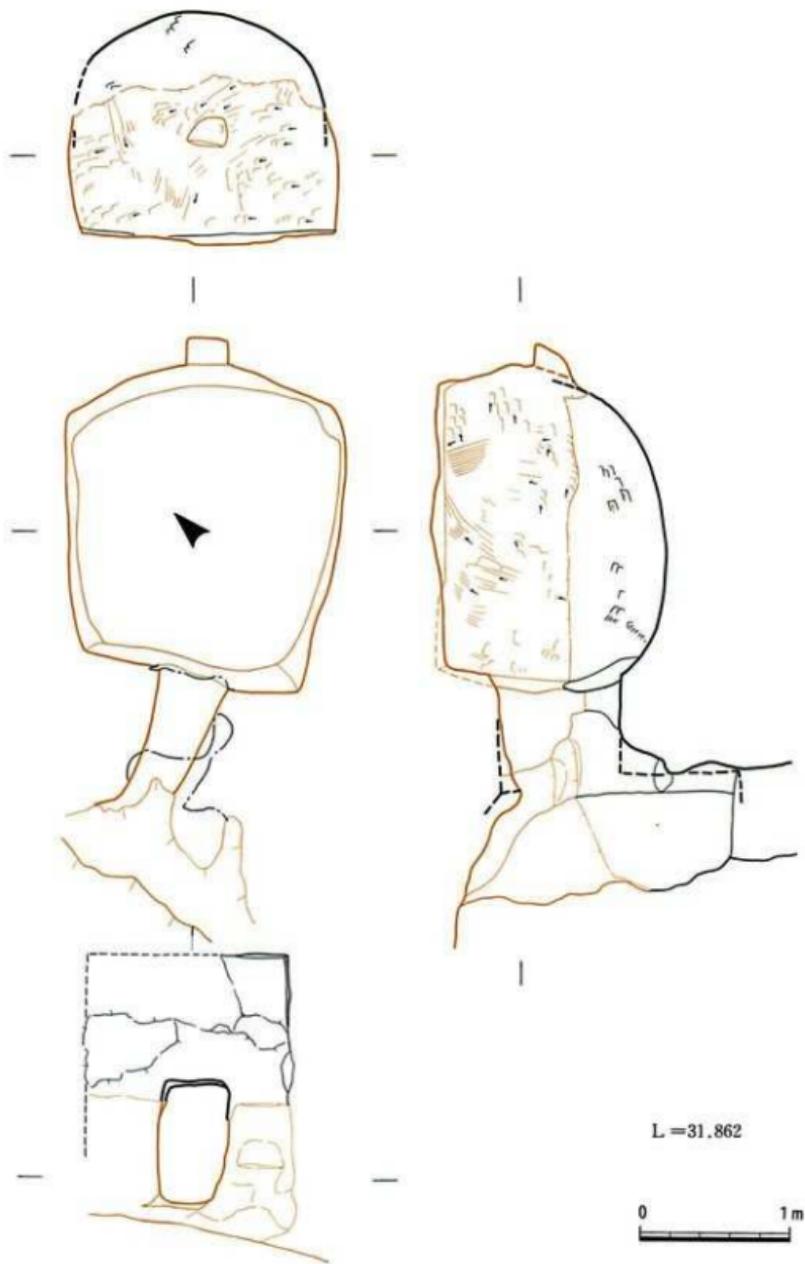
玄室の床面は約40cm、羨道の床面においては10cmほど二次的に掘り下げられ拡張が認められた。玄室平面はほぼ方形を成し、奥壁はアーチ状の形態を成し、天井部はアーチ形を呈する。奥壁と天井部に幅4cmの工具痕が認められ、掘削当初のものと考えられる。一方、拡張部には幅6cmの工具痕が観察でき、上方から下方に連続して振り下ろした痕跡が数箇所で見られた。

31号横穴墓

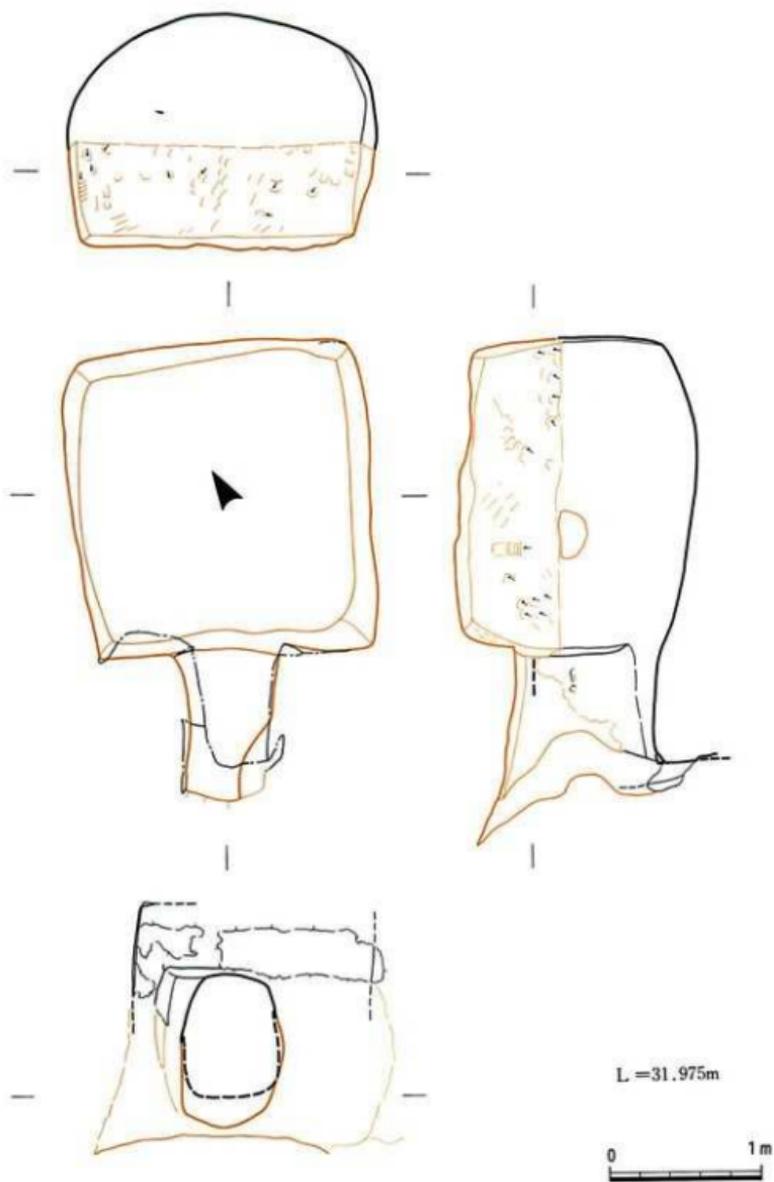
31号横穴墓は30号・32号横穴墓の間の上部に位置し、単独で存在する。玄室主軸はN-31°



第26图 27号横穴墓平面·断面实测图 (1/20)



第28图 29号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)



第29图 30号横穴墓平面·断面实测图(1/40)

—Eにとり、南南西に開口する。

羨門の壁面はやや剝離しているものの遺構の遺存状態は良い。玄室床面は妻入り長方形を呈するが、両側壁の玄門側には拡張時に使用された工具の痕跡が認められた。したがって、造墓当初は無袖の妻入り逆台形を呈していたものと推測される。奥壁の形状はアーチ状を成し、床面より垂直に立ち上がる。天井部は高さ78cmを有し、アーチ形天井を形成し、羨道部との境界は不明瞭である。奥壁と側壁には掘削当初の幅4cmの工具痕と幅5cmの工具痕の2種類が認められた。二次的に拡張された部分には数条平行の削りを単位とする痕跡があり、熊手状工具としてあつかった。

32号横穴墓

32号横穴墓は玄室主軸をN-29°30'-Eにとり、南南西方向に開口する。

玄室と羨道の床面は二次的加工により約40cmほど掘り下げられ、さらに前庭部も削平により失っている。玄室床面はほぼ方形を呈し、奥壁は垂直に立ち上がる。天井部は奥壁沿いより羨道に向かって緩やかな傾斜で下降しており羨門に至る。奥壁と側壁の下半分は二次的拡張により広げられ原形を失う。拡張部には幅8cmの工具痕が壁面全体に認められ、広げられたことが分かる。かろうじて造墓当初の壁肌が残る部分に幅5cmの工具痕が見られた。

33号横穴墓

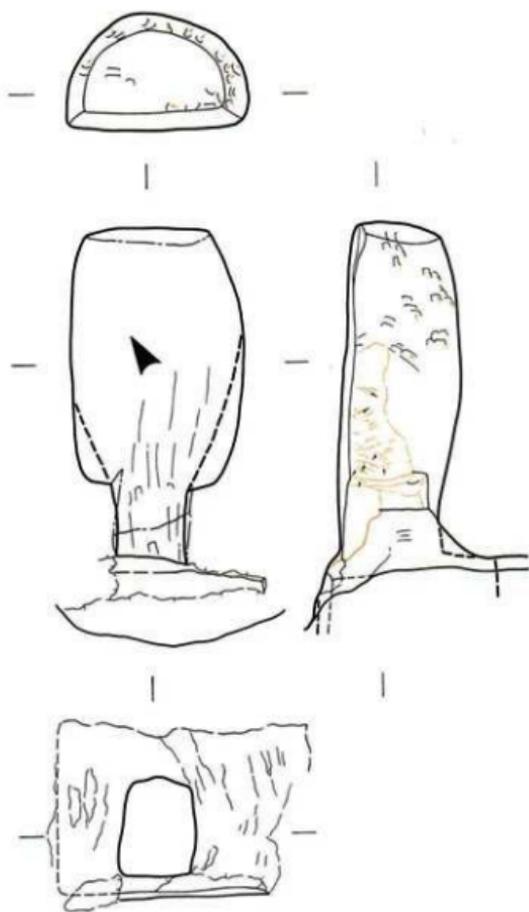
33号横穴墓は西側の34号横穴墓と併存して掘削されており、32号・35号横穴墓の間の下部に位置する。玄室主軸をN-19°-Eにとり、南南西方向に開口する。

遺構は前庭部が削平されているもののほぼ玄室形態は原形を保つ。羨門には閉塞時に積まれた人頭大の閉塞石が確認された。上部にあったと思われる閉塞石は見られず、玄室内に散らばる石が恐らくこれに当たるものと考えられる。玄室平面は奥壁から羨門に向かって直線状に延び、無袖の妻入り逆台形を呈する。奥壁は垂直に立ち上がったアーチ状の形態を呈し、天井部はアーチ形を形成する。天井部は一部が落盤し、それにより丸味を帯びる。玄室内部より須恵器の横瓶(12)が一点出土した。側壁より造墓当初の幅5.5cmの工具痕が認められた。

34号横穴墓

34号横穴墓は33号横穴墓の西側に位置し、玄室主軸をN-11°-Eにとり、南方向に開口する。

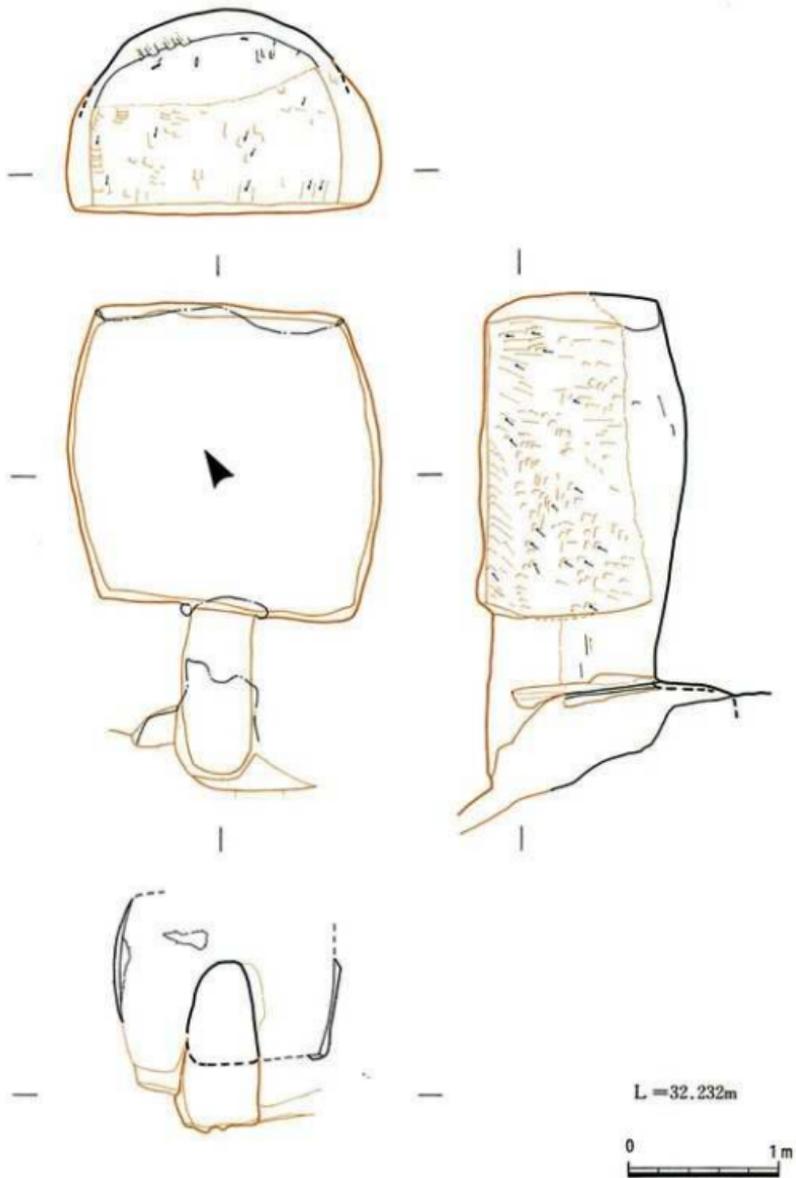
遺構の開口部分は大きく削平されていた。玄室と羨道との境界は見られず、羨門に至るものと推測される。奥壁は台形状の形態を成し、天井部はアーチ形天井を呈する。側壁には幅5cmの工具痕が奥壁方向に向かって認められた。なお、玄室内より須恵器の短頸壺(7)が出土している。



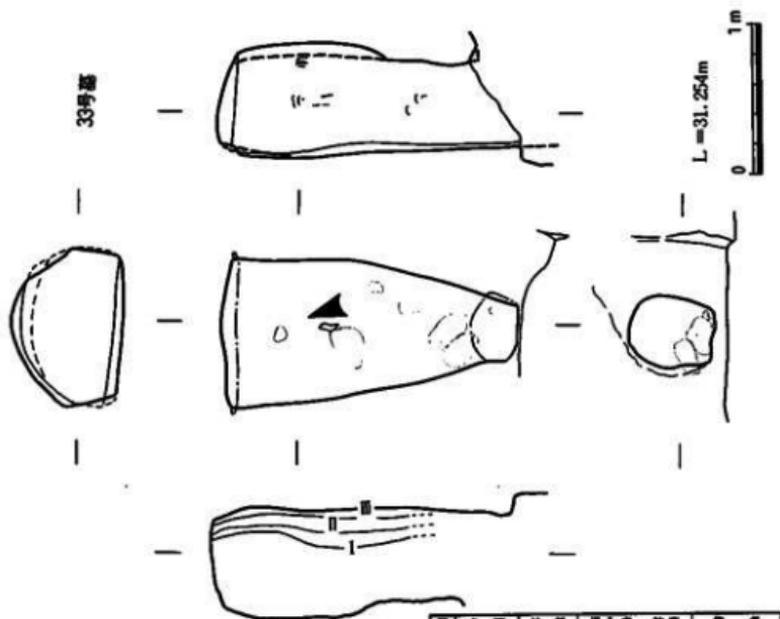
L = 33.659m



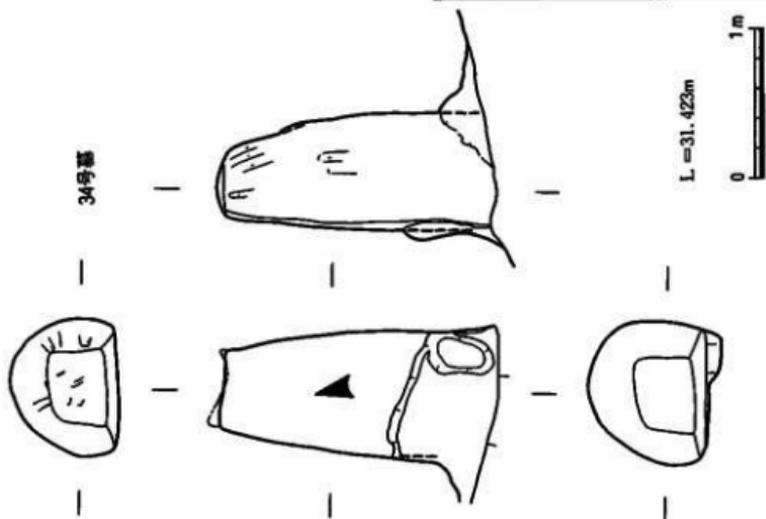
第30图 31号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)



第31图 32号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)



層	色	質	性質	透入度・乾度	備考
I	暗黒緑色		やや硬質		天井の高部層
II	茶褐色		軟質		
III	淡黒灰色		やや硬質		風化している



第32図 33号・34号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

35号横穴墓

35号横穴墓は玄室主軸をN-33°-Eにとり、南南西方向に開口する。

遺構の床面は二次的に約40cm程掘り下げられ、奥壁には幅1m、奥行40cmの棚状の掘り込みが認められるなど、大部分が拡張され原形を失う。玄室は拡張の為、平面形の形態は不明であるが、遺存する形状からすれば狭入り長方形を呈していたものと推定できよう。造墓当初の掘削時の幅5cmの工具痕が右側壁上部で確認された。一方、拡張部分には幅10cmの工具痕が玄門の両側壁に認められ、それ以外の拡張部分には幅1cm大の棒状工具痕が認められた。また、玄門側壁上部には円形の掘り込みが左右に見られ、痕跡より掘削には幅1cm大の棒状工具が使用されたものと思われる。

36号横穴墓

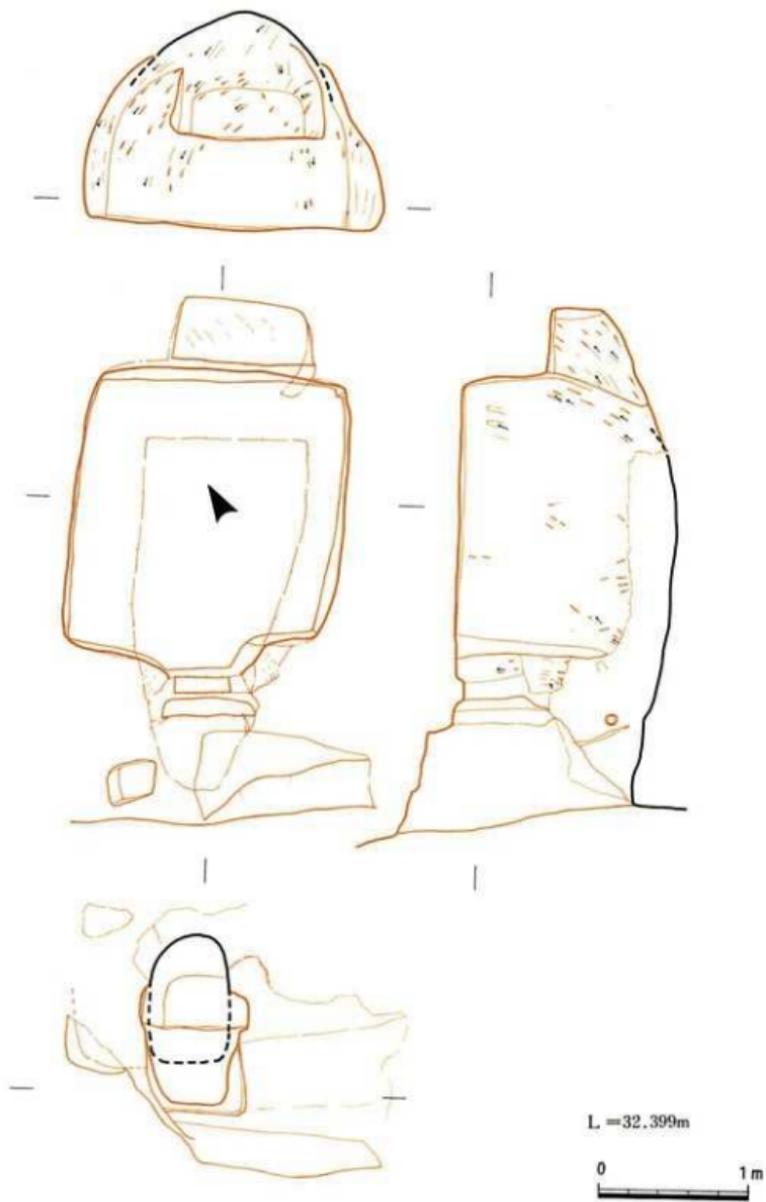
36号横穴墓は二次的拡張により37号横穴墓と玄室内部につながる。玄室主軸をN-27°-Eにとり、南南西方向に開口する。

遺構の床面は50-60cm程掘り下げられ、原形を失う。前庭部上部の飾縁は一部のみ残存しており、遺存する規模からすれば崖面から羨門まで120cm掘り込みが行われたことが窺える。玄室は拡張が著しく形態は不明である。奥壁の中程には幅70cm、高さ50cm、奥行40cm程の棚状の掘り込みが見られた。造墓当初の奥壁面はその上部にかろうじて残されており、奥壁は垂直に立ち上がりアーチ状の形態を呈していたことが分かる。天井部はアーチ形を成し、羨道部との境界は無かったと思われる。造墓当初の掘削面には幅5cmの工具痕が確認でき、二次的加工面には幅6cmと幅7cmの工具痕が認められた。

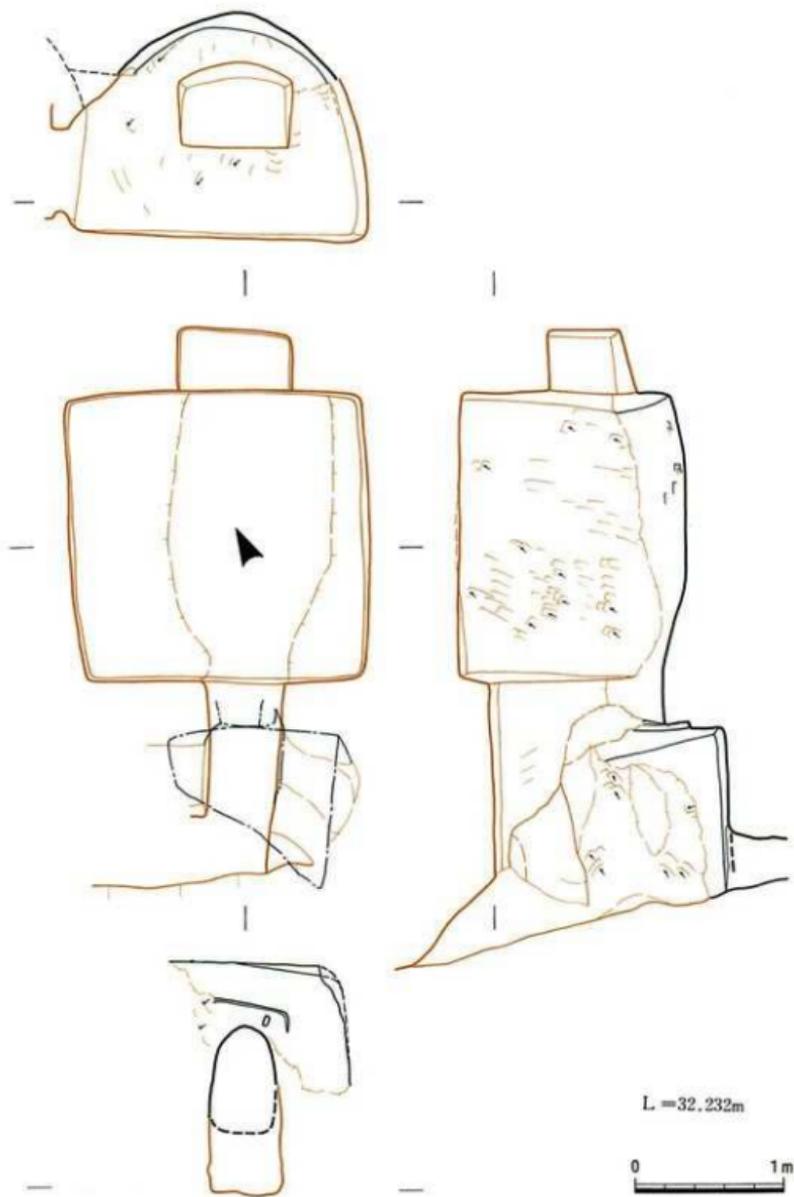
37号横穴墓

37号横穴墓は36号横穴墓の西側に位置し、玄室主軸をN-18°-Eにとり、南南西方向に開口する。

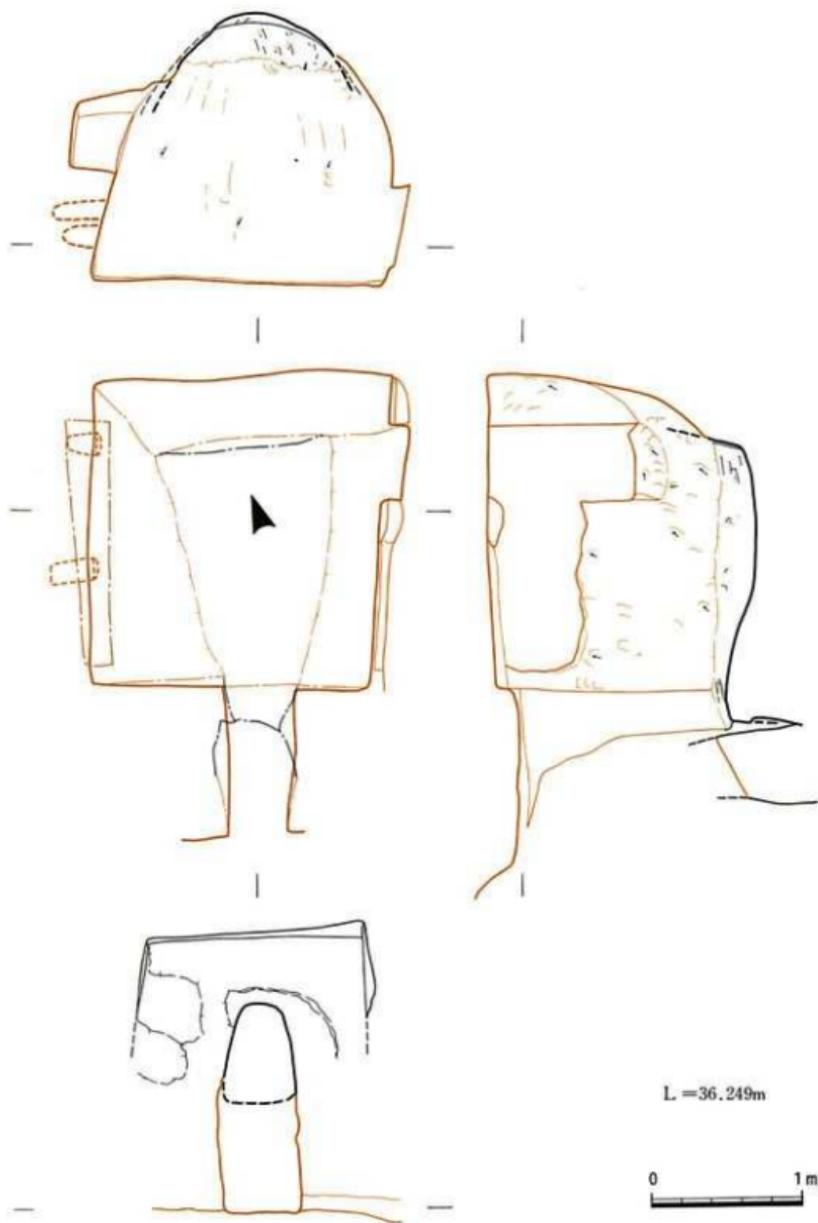
床面は約80cm程掘り下げられ、天井の一部のみ当初の痕跡を残す。羨門の飾縁は上部のみ遺存する。玄室は床面が深く下げられており、当初の平面形態は正確に判断できない。なお、奥壁上部がかろうじて残っておりアーチ状を呈していたことが分かる。右側壁は二次的拡張により、36号横穴墓の玄室とつながる。左側壁には現床面より約60cmの位置に、幅160cmにおよび棚状の掘り込みが見られた。そのやや下部に穴が2ヶ所認められ、棒状のものを差し込んだものと考えられる。当初の壁面には幅4cmの工具痕が認められた。一方、拡張部分には幅7cmの工具痕が見られた。痕跡から36号横穴墓と拡張が同時期に行われたと判断される。なお玄室床面の右袖付近より染め付けの磁器(23)が出土している。



第33图 35号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)



第34图 36号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)



第35图 37号横穴墓平面·断面实测图(1/40)

38号横穴墓

38号横穴墓は玄室主軸をN-15°-Eにとり、南方向に開口する。

羨門の左半分は前庭部の面影を残すものの、右側は20cm以上掘り下げられていた。玄室内部は下半分が二次的加工により原形を失う。しかしながら、奥壁の形態がアーチ状を成していることから、アーチ形天井を呈していたと推定できる。玄室床面は約40cmほど幅10cmの工具により掘り下げられ、側壁には拡張時に使用されたとと思われる幅1cmの棒状工具痕が確認された。なお、当初の壁面には幅5cmの工具痕が見られた。

39号横穴墓

39号横穴墓は玄室主軸をN-22°30'-Eにとり、南南西方向に開口する。

羨道部は大きく削平され、玄室の床面および左側壁が大きく拡張される。また、奥壁には幅70cm、奥行20cm程の棚状の掘り込みも認められた。造墓当初の痕跡は天井部と奥壁の一部に残り、幅5cmの工具痕が確認された。拡張部分は大半が幅7cmの工具を使用していたが、一部で幅8cmの工具痕が認められた。

40号横穴墓

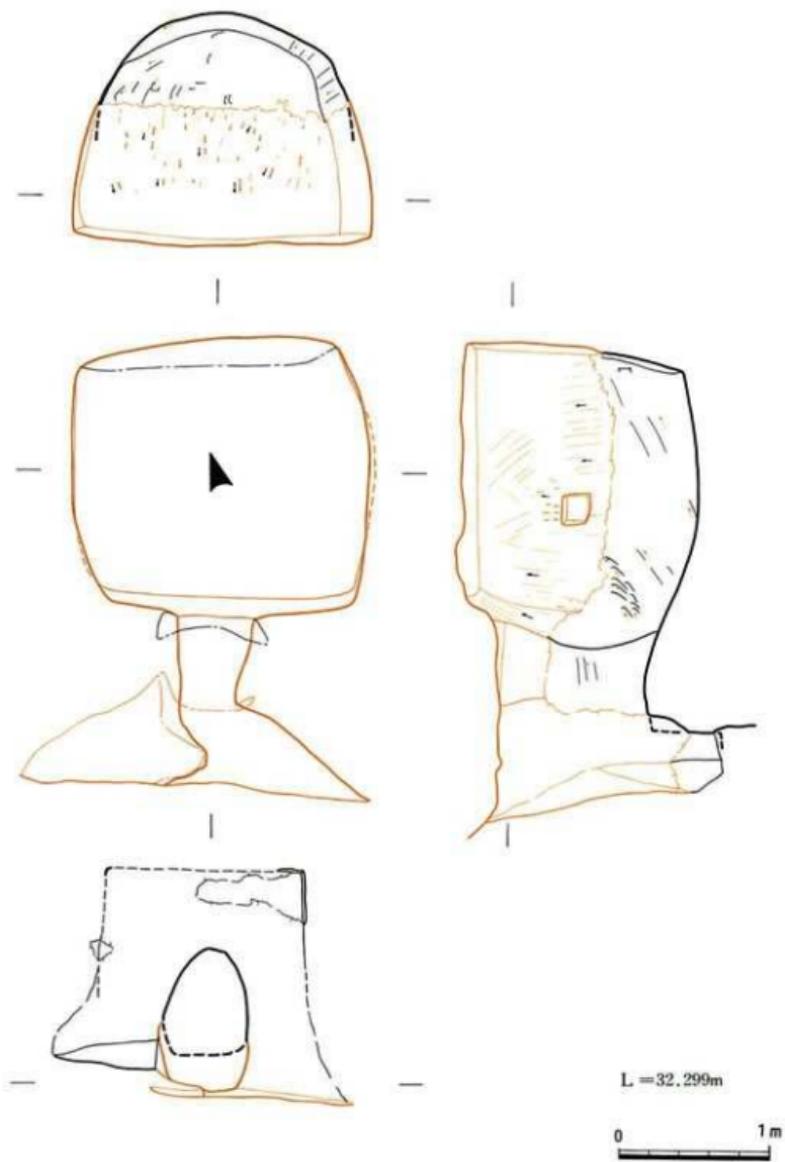
40号横穴墓は39号・41号横穴墓の間の下部に位置し、玄室主軸をN-30°-Eにとり、南南西方向に開口する。

遺構は前庭部の前端部がやや削平を受けていることと、羨門の上部が剥落している以外遺存状態は良い。土層の堆積を観察すると前庭部前の堆積土層が上部から地山まで真直削られ、2次堆積が行われたことが窺える。土質が砂質であり、昭和時代にみかん園として重機で開墾を行ったらしく、この時に遺構の前端部が削平されたものであろう。幸い羨門は当時の閉塞状態が残り、40-50cm大の石が積まれ、その表面には硬質の堆積土層が覆っていた。なお、埋葬し閉塞を行った際に前庭部の左側に供献土器として置かれた須恵器の壺(9)が検出された。玄室床面はやや袖が狭くなった隅丸方形を呈し、天井部はアーチ形を成す。玄室には大量の埋土が流れ込んでおり、中には天井からの崩落層も認められた。また、堆積土層のXIV層より須恵器片が出土していることや風化土層が見られることから追葬が認められる。

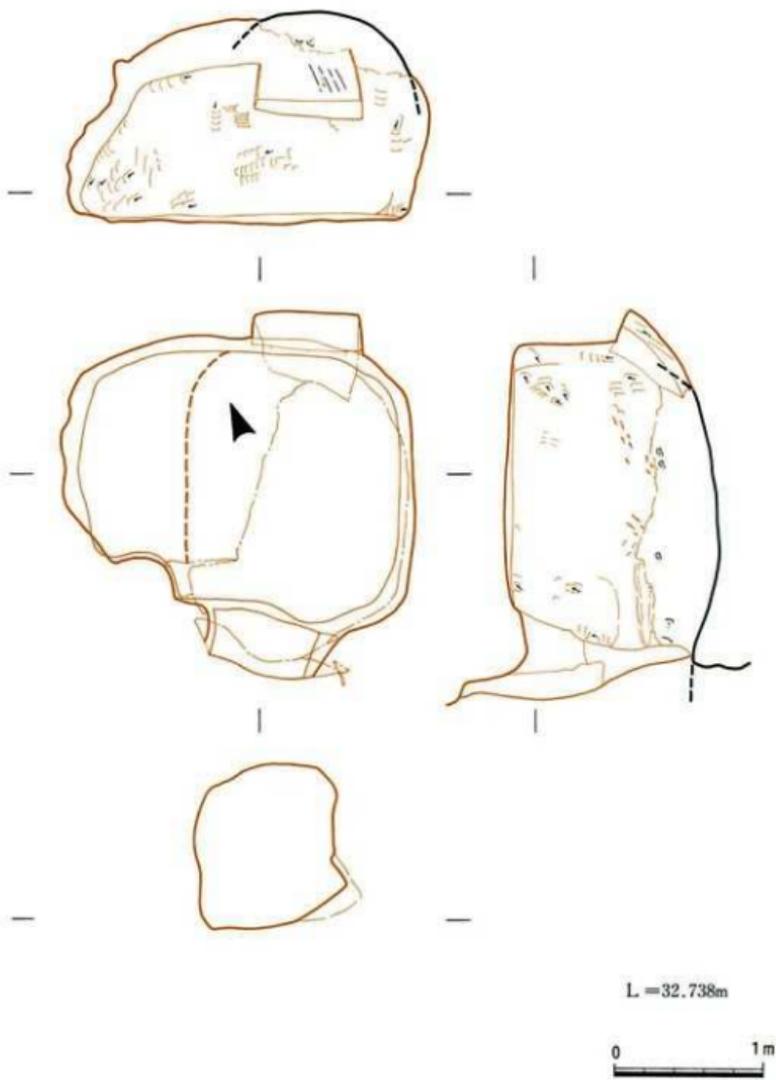
41号横穴墓

41号横穴墓は玄室主軸をN-17°30'-Eにとり、南南西方向に開口する。

羨道の前端部は削平を受け、床面は約20-30cmの掘り下げが認められた。奥壁の形態はアーチ状を成し、天井部はアーチ形を呈し、側壁と天井との境界には稜線が見られた。なお、右奥壁は若干の拡張が認められた。側壁の拡張部分には上部に幅1cmの棒状工具痕が見られ、下部に幅8cmの工具痕が残る。一方、掘削当初の壁面には幅6cmの工具痕が見られた。



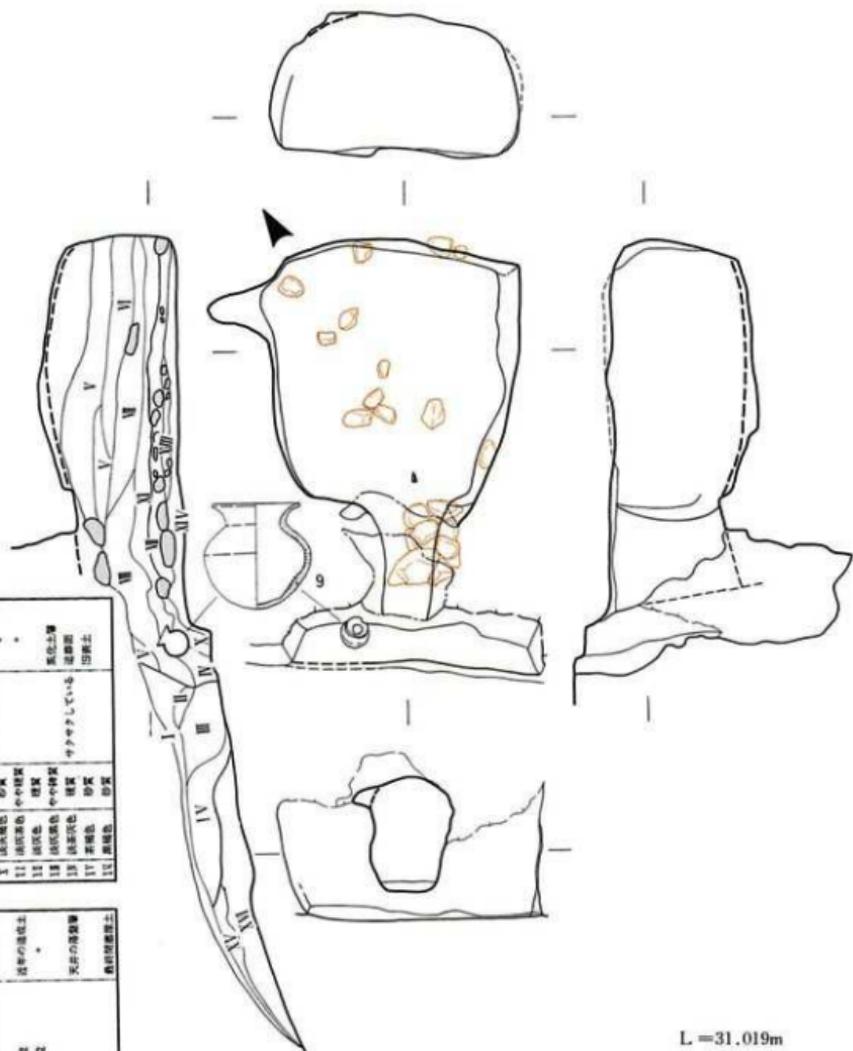
第36图 38号横穴墓平面·断面实测图(1/40)



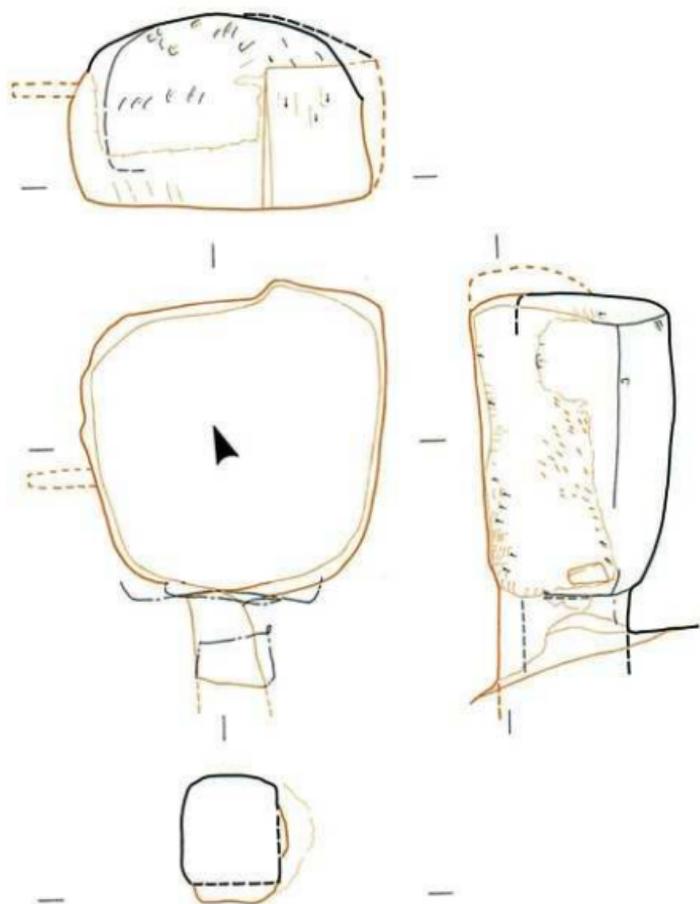
第37图 39号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)

層	色	質	透入層・状況	備考
IX	淡灰色	硬質	サナギしている	動物骨埋土
V	淡灰色	砂質	サナギしている	・
II	淡灰色	やや硬質		
III	淡灰色	硬質		灰化土層
III'	淡灰色	やや硬質		
III''	淡灰色	硬質	サナギしている	埋土
IV	黄褐色	砂質		埋土
IV'	黄褐色	砂質		埋土

層	色	質	透入層・状況	備考
I	淡灰色	砂質	サナギしている	二次埋土層
II	黄褐色	砂質		
III	黄褐色	砂質	砂状	活年の埋土
IV	黄褐色	砂質	砂状	・
V	黄褐色	砂質		天部の埋土層
VI	淡灰色	やや硬質		
VI'	淡灰色	硬質		動物骨埋土



第38図 40号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)



L = 32.610m

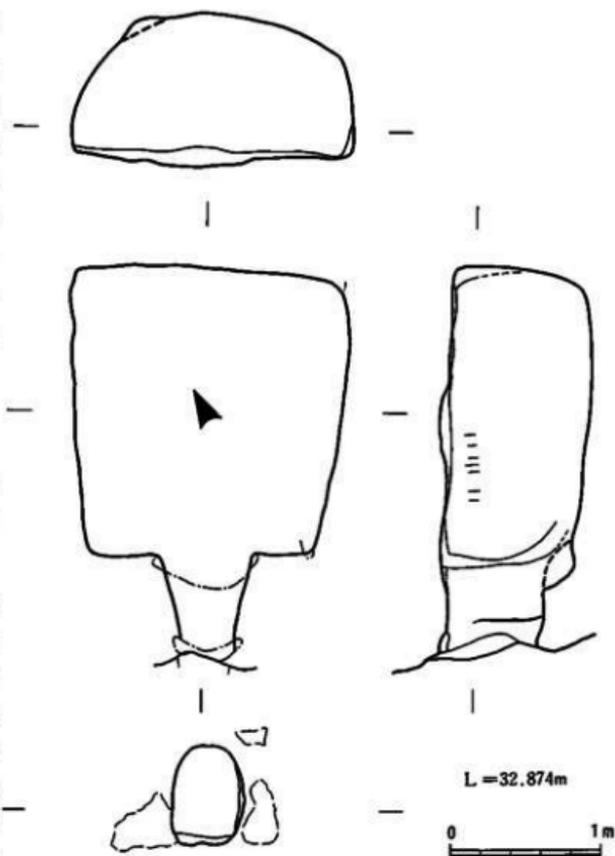


第39图 41号横穴基平面·断面实测图 (1/40)

42号横穴墓

42号横穴墓は玄室主軸をN-26°-Eにとり、南南西方向に開口する。

羨道の前端は削平を受けているが、玄室はほぼ原形を保つ。玄室平面はやや前壁の袖が狭いが方形を呈する。奥壁は形成されているが、側壁とは明瞭に区分されていないもの、床面より垂直に立ち上がり天井部に至る。天井部はアーチ形を成し、羨道部との境である玄門において稜線が見られ、明瞭に区分される。



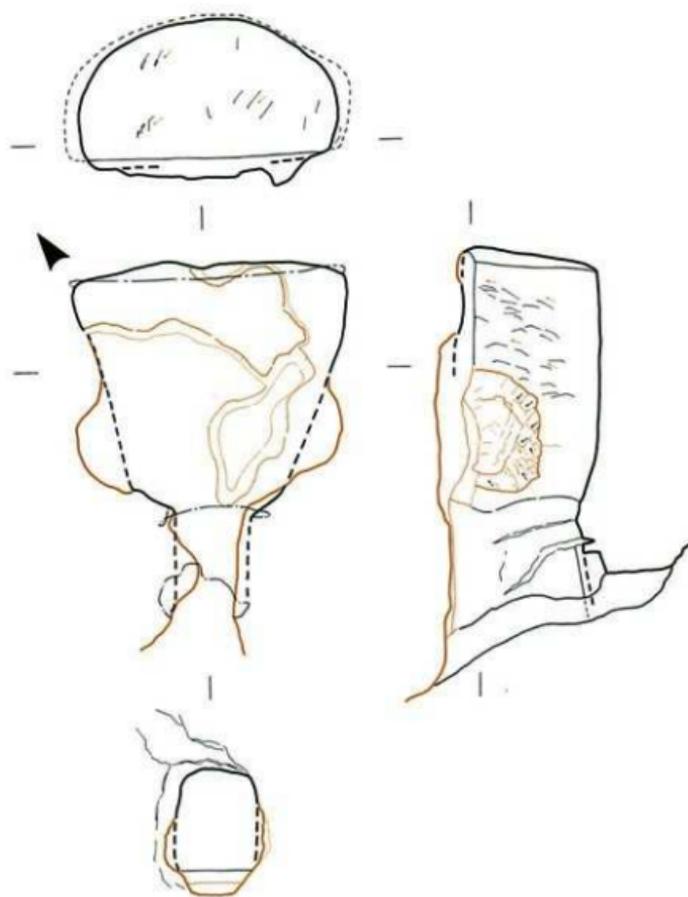
43号横穴墓

43号横穴墓は玄室主軸をN-35°-Eにとり、南南西方向に開口する。

玄室平面は逆台形を成すが両側壁に半円の膨らみを持つ形態となっている。この膨らみは加工の痕跡より二次的に掘り広げられた部分であり、掘削当初は逆台形の平面形態を呈していたものと判断される。奥壁は床面よりほぼ垂直に近い立ち上

がりを成し、明瞭な稜線を側壁との境に有し、アーチ状の形態を呈する。天井部は奥壁沿いから玄門までほぼ水平な高さを成し、アーチ形天井を形成する。

第40図 42号横穴墓平面・断面実測図(1/40)



L = 33.803m

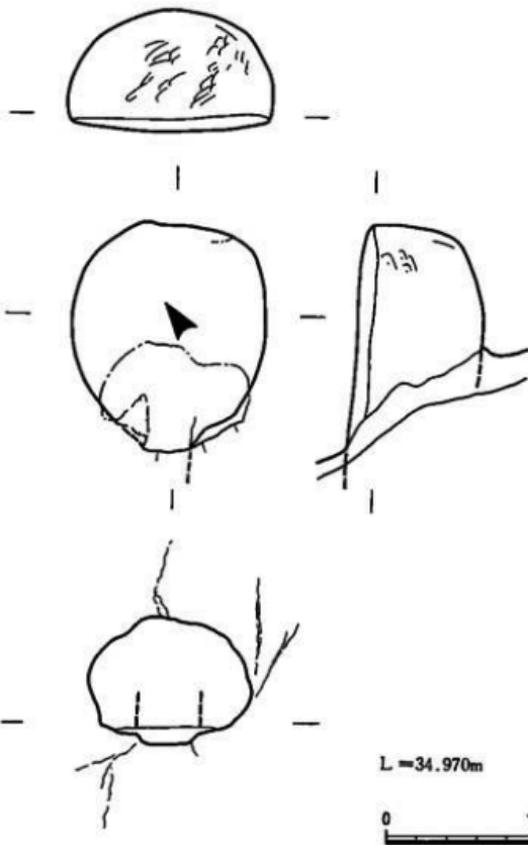


第41图 43号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)

44号横穴墓

44号横穴墓は43号・45号横穴墓の間の上段に位置し、玄室主軸を $N-39^{\circ}-E$ にとり、南西方向に開口する。

羨道部分は削平を受けているが、玄室はほぼ原形を残しているが、玄室平面は群中で唯一円形を呈し、天井はドーム形を成す。奥壁には右上から左下方向に工具痕が見られた。玄室内より磁器の小坏(21)が出土している。



第47図 44号横穴墓平面・断面実測図(1/40)

45号横穴墓

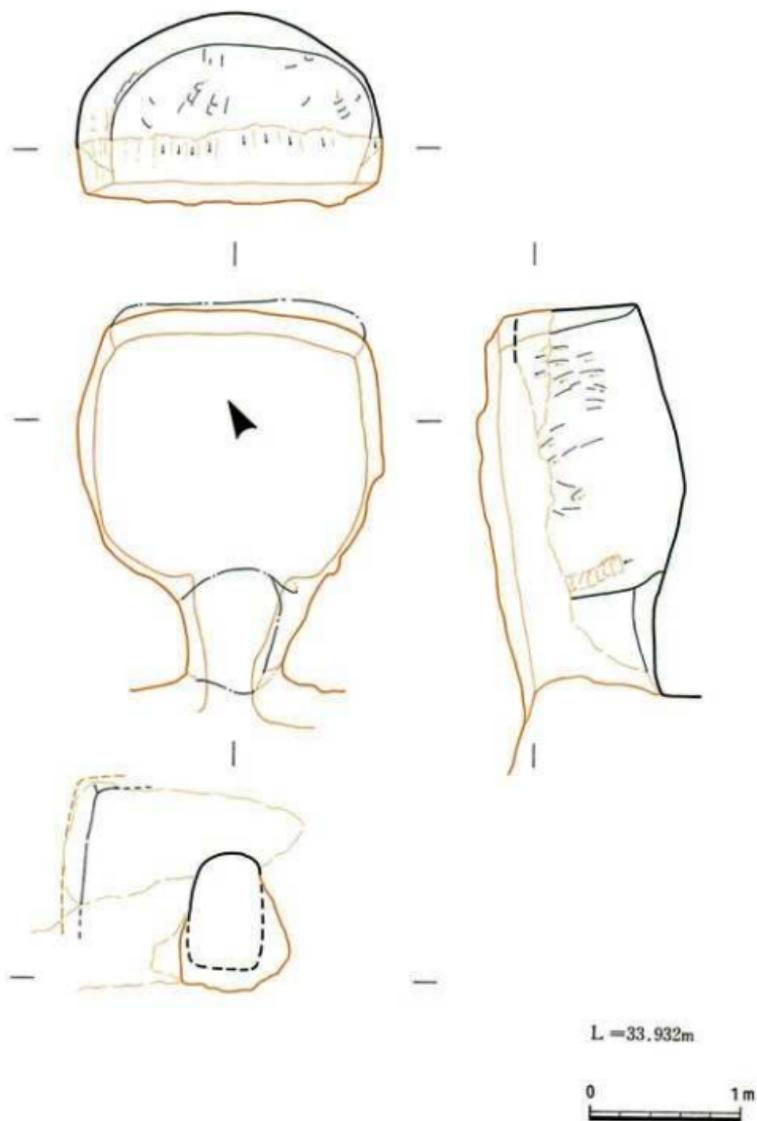
45号横穴墓は玄室主軸を $N-25^{\circ}30'-E$ にとり、南南西方向に開口する。

床面は羨門より奥壁に向かって約 10° の勾配で下る。床面は二次的に幅10cmの工具で掘り下げられていた。奥壁は床面より垂直に立ち上がり、アーチ状の形態を呈する。天井部分は奥壁下がりのアーチ形天井を呈するが、遺構全体に奥下がりの傾向が見られた。奥壁と側壁には掘削時の幅6cmの工具痕が確認された。

46号横穴墓

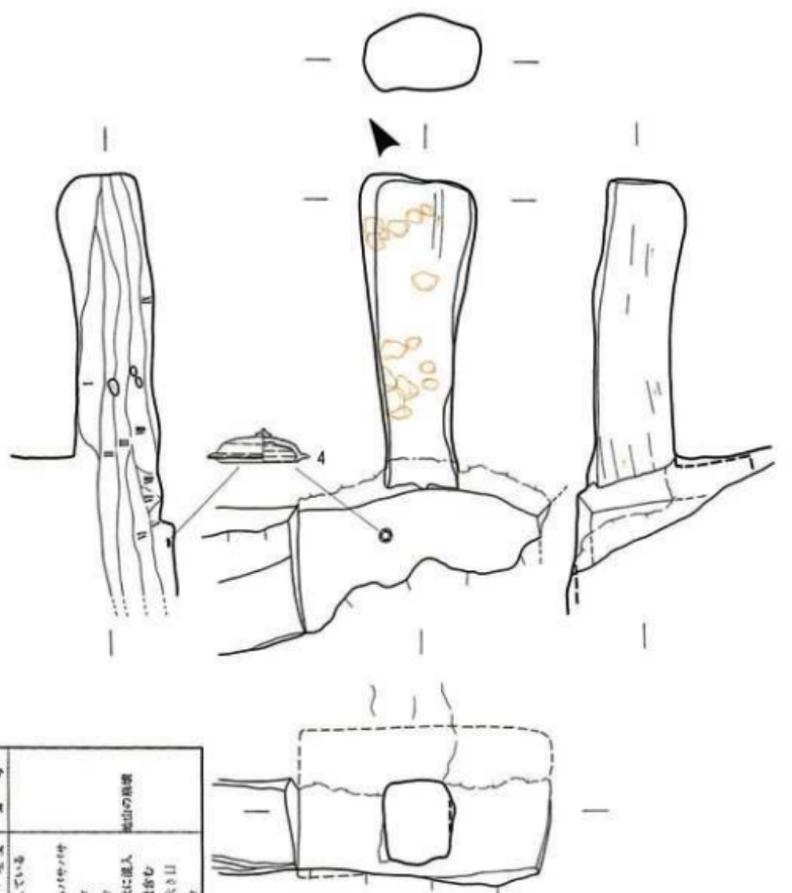
46号横穴墓は玄室主軸を $N-35^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

遺構は羨門の上部が剝離している以外、前庭部が残っており遺存状況は良い。前庭部の床面は幅140cmを有し、コ字状を成す。玄室床面は幅約60cmの奥壁より開口部に向かって主軸方向に長く無袖の形態を取り、羨門では幅45cm、高さ60cmを有する。前庭部の左側床面直上より須恵器の



第43图 45号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)

層	色	質	注	区	原人墓・坑墓	備考
I	淡褐色	砂質			中ラヤクしている	
II	黄褐色	砂質				
III	暗茶褐色	砂質			砂礫を含まないが中	
IV	暗茶褐色	砂質			砂礫を含む	
V	灰褐色	砂質			砂礫を含む	
VI	暗茶褐色	砂質			アロック状に混入	城山の崩落
VII	灰褐色	砂質			砂礫も少量含む	
VIII	灰褐色	砂質			砂礫やウツタの目	
IX	灰白色	硬質			小礫を含む	



L = 35.212m

0 1m

第44図 46号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

蓋(4)が出土している。玄室には大量の埋土があり、Ⅰ～Ⅳ層までは後世に埋まった土層であり、羨門付近のⅡ層に陶器の破片(19)が混入していた。側壁には奥壁方向に数条の工具痕が見られた。

47号横穴墓

47号横穴墓は群中で西側から2番目に位置し、玄室主軸を $N-21^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

羨門部分の壁面は大きく剥落し、丸味を帯びる。前庭部の床面は幅180cmを有し、コ字状を呈する。羨道は95cmと長く、羨門の床面において前庭部との境界に段を持つ。玄室床面は袖部分の方がやや長く、平入り隅丸長方形を呈する。玄室床面中央には幅4cmの排水溝が見られた。天井部はドーム形を成し、玄室の四ヶ所のコーナーの壁面の境には床面から60cmほど稜線が認められた。玄室床面と壁には幅4cmと幅5cmの工具痕が認められた。玄室内より土師器の坏(18)と青白磁の蓋(16)が出土している。

48号横穴墓

48号横穴墓は群中で最西端に位置し、玄室主軸を $N-30^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。羨道部と玄室の前端部分の床面は削平を受けていた。玄室床面は狭入り長方形を呈し、アーチ形天井を呈する。天井部と側壁との境は明瞭に稜線が認められた。玄室床面中央には幅20cm、長さ50cmほどの排水溝が付設している。壁面には造墓当初の幅6cmの工具痕が認められた。玄室内より青磁の碗(15)が出土している。

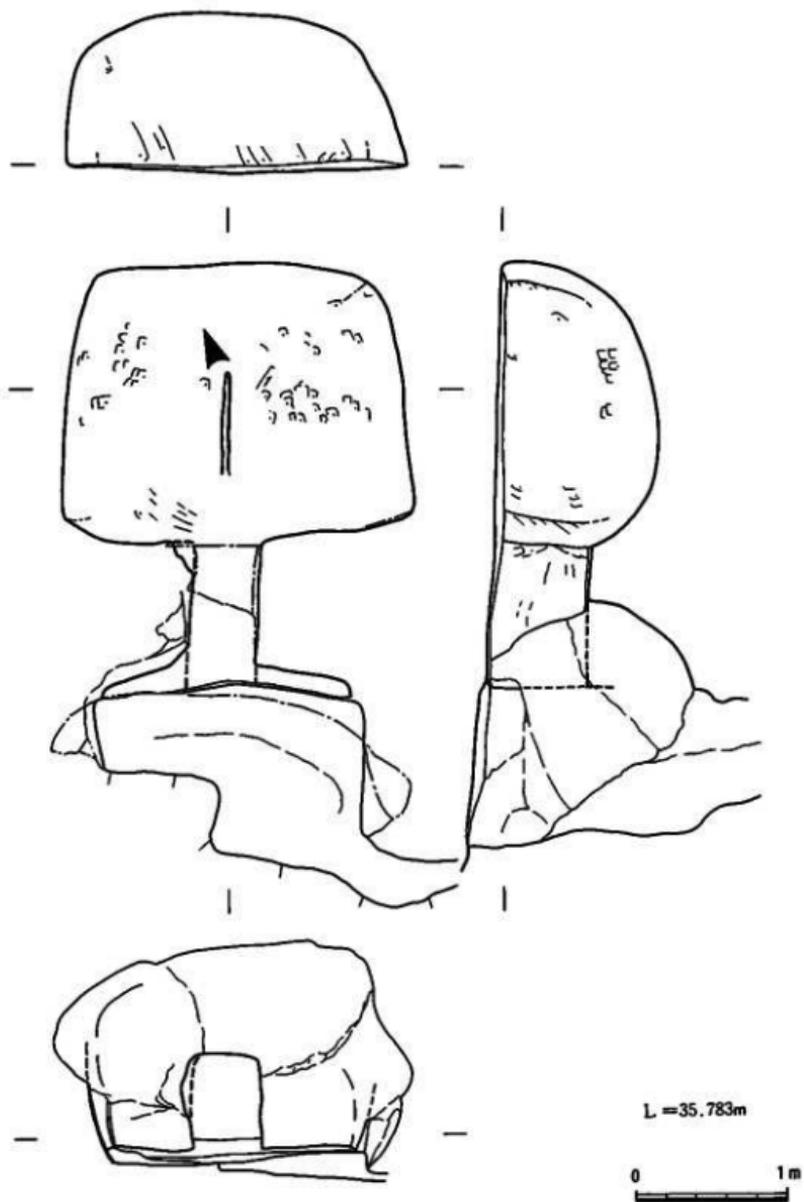
49号横穴墓

49号横穴墓は玄室主軸を $N-18^{\circ}-E$ にとり、南南西方向に開口する。

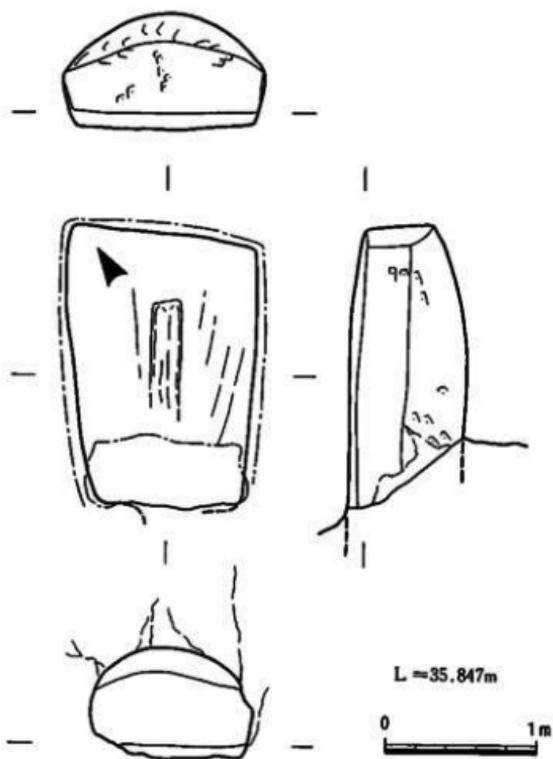
遺構はほぼ造墓当初の原形を保つ。前庭部床面は幅170cmあり、羨門に横幅90cm、縦幅10cmの長方形の掘り込みが施されていた。また、羨門壁には床面より高さ90cmの位置において掘り込みが認められることから当初羨門部分に蓋が施されていたのであろう。羨道は長さ70cmを有し、高さ72cmの玄門に至る。玄室平面は逆台形を呈し、床面はほぼ平らである。奥壁は床面より垂直に立ち上がり、アーチ状を呈する。天井部はほぼ平らなアーチ形を成し、玄門付近で緩やかに下降し、羨道部に向かう。奥壁ないし側壁には造墓当初の幅5cmの工具痕が認められた。

さらに、前庭部前には約50cmほど下がって横幅3.5mのテラス状の区画が認められた。この部分には拳大の礫がⅣ層で多数堆積しており、ある時期に閉塞石として使用されたものと考えられる。なお、造墓当初の造成はⅤ層とⅥ層まで削平を行っている。

羨門には50cm大の礫岩と前庭部下のテラスに見られる礫と同じものが羨門に積まれていたが、土層の観察と遺物により後世におけるものと判断できた。また、羨門でⅤ層目の埋土から土

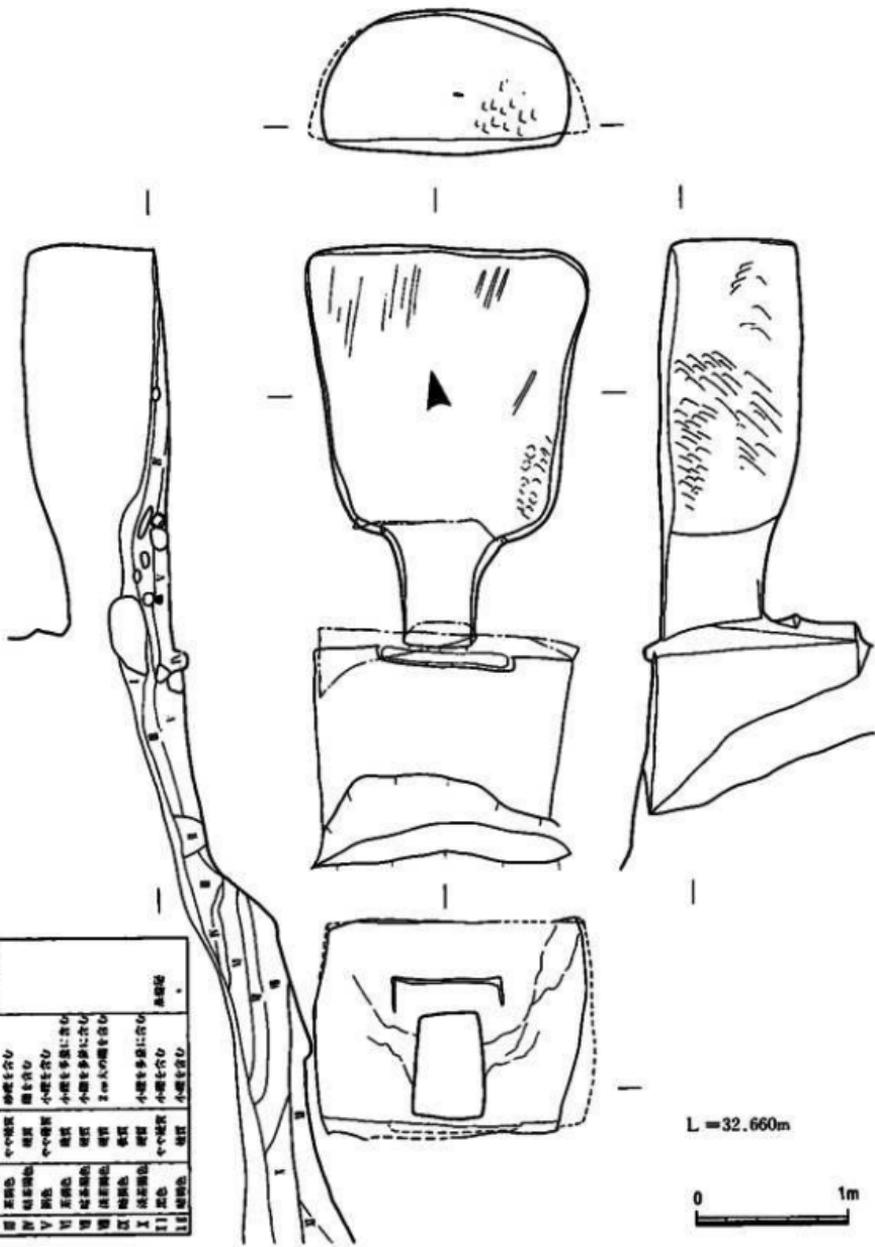


第45图 47号横穴墓平面·断面实测图 (1/40)



第46图 48号横穴基平面·断面实测图(1/40)

階	色	質	厚	層	名	備
I	赤褐色	硬質		Ⅰ	硬質土	最上の層
II	赤褐色	硬質		Ⅱ	硬質土	硬質土を含む
III	赤褐色	硬質		Ⅲ	硬質土	硬質土を含む
IV	赤褐色	硬質		Ⅳ	硬質土	硬質土を含む
V	赤褐色	硬質		Ⅴ	硬質土	硬質土を含む
VI	赤褐色	硬質		Ⅵ	硬質土	硬質土を含む
VII	赤褐色	硬質		Ⅶ	硬質土	硬質土を含む
VIII	赤褐色	硬質		Ⅷ	硬質土	硬質土を含む
IX	赤褐色	硬質		Ⅸ	硬質土	硬質土を含む
X	赤褐色	硬質		Ⅹ	硬質土	硬質土を含む
XI	赤褐色	硬質		Ⅺ	硬質土	硬質土を含む
XII	赤褐色	硬質		Ⅻ	硬質土	硬質土を含む



第47図 49号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)

師器の坏(17)が反転した状態で出土している。また、玄室内のⅣ層目より陶胎染付境(20)が出土し、Ⅴ層目より土師器の蓋(14)が出土している。なお、前庭部の最前端には上面で幅30cmあまりの溝状の掘り込みが認められた。これは土層の堆積状況から最終的に掘削されたものと判断される。また、前庭部と前方部の落ち込みとの間の右側には直径40cmの円形の掘り込みが見られ、遺構の状態からある時期に柱状のものが立てられていたと思われる。

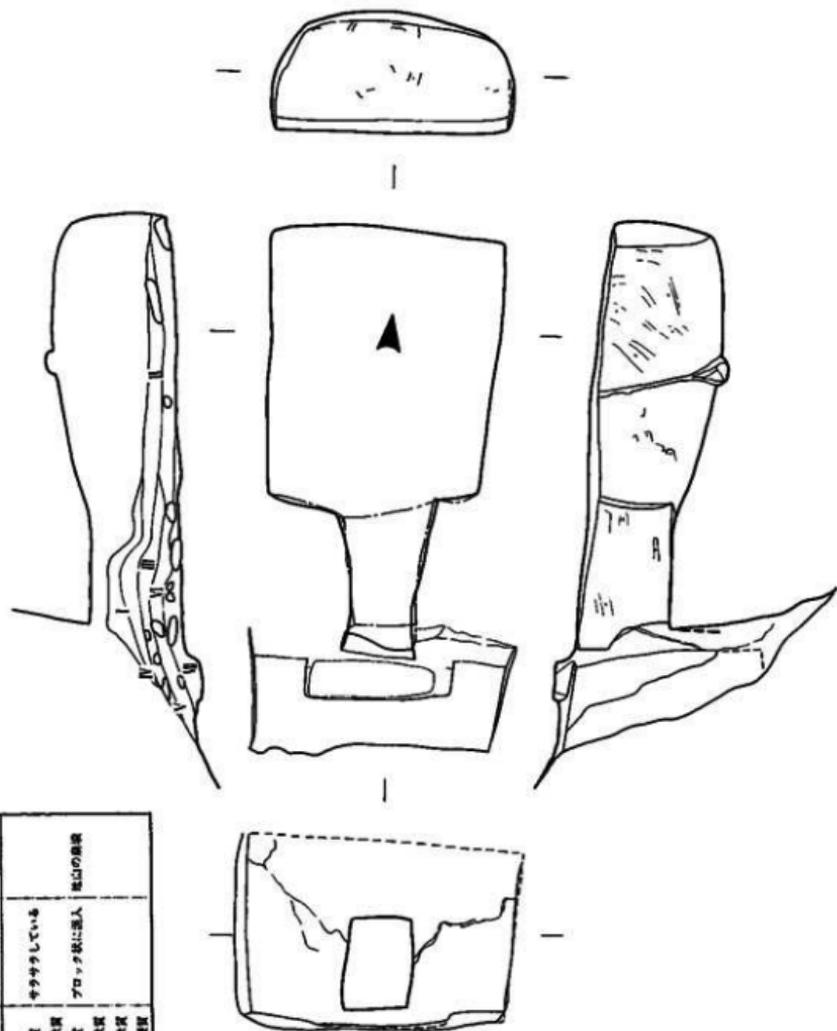
50号横穴墓

50号横穴墓は49号横穴墓の床面より約1m高い所に位置し、玄室主軸をN-5°-Eにとり、南方向に開口する。

前庭部は幅170cm、奥行約60cmと49号横穴墓に比べて狭い。羨門床面には横幅100cm、縦幅25cmの長方形の掘り込みが施され、蓋がこの部分に付設されたものと考えられる。羨道は長さ100cmを有し、天井部の高さは一定である。玄室床面は整った妻入り長方形を呈し、奥壁は垂直に立ち上りアーチ状を成す。天井部はアーチ形を呈し、緩やかな弧を描きながら玄門に至る。天井中央部に見られる亀裂は自然現象によるものと考えられる。奥壁と側壁に造墓当初の幅5cmの工具痕が見られた。

羨門は埋土により塞がれ、Ⅲ層からⅤ層にかけては拳大の礫が混入し、閉塞石に使用されたものと考えられる。前庭部ないし羨門の左半分にはこの礫が少なく土層の観察により一度開口されていることが窺えた。前庭部下部の落ち込み部分にこの礫が広がっていることから掻き出した時点で廃棄されたものと判断される。

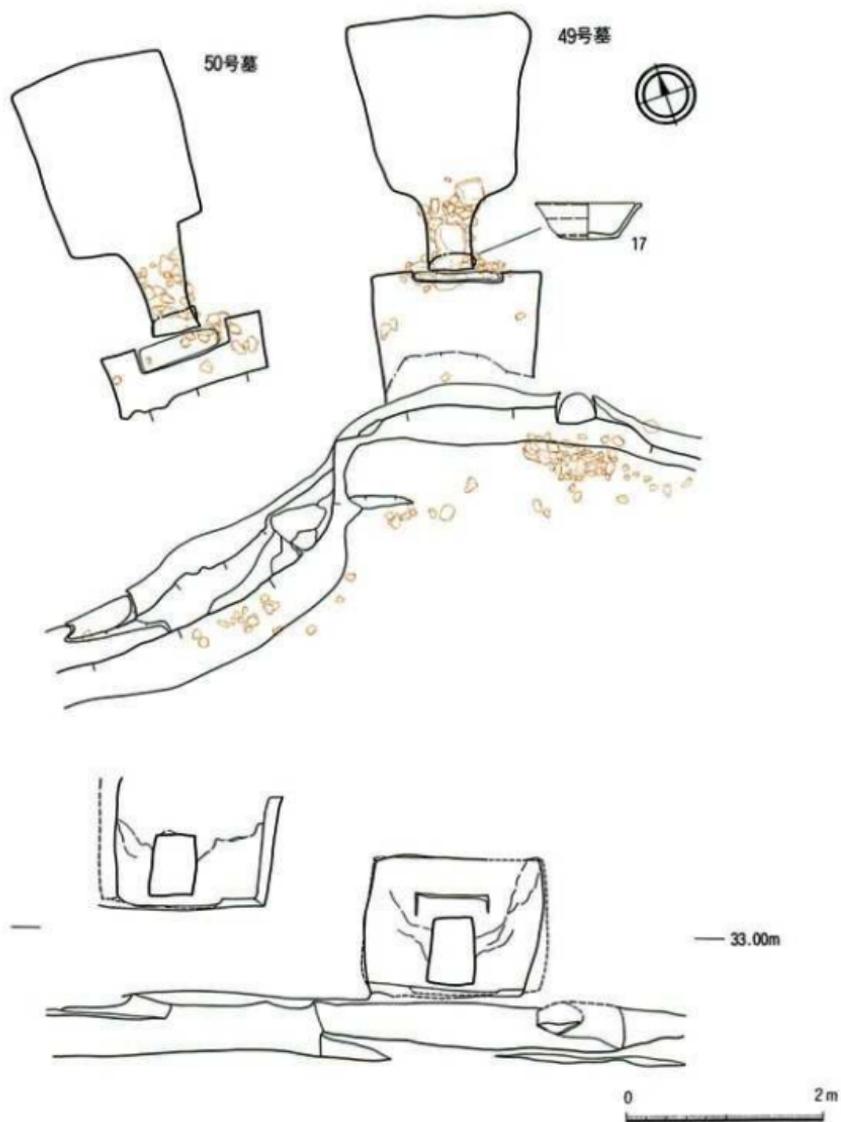
跡名	土質	柱位置	遺入物・程度	備考
1	黄土			
2	褐色土	鉄釘	ややキラしている	
3	褐色土	やや磁瓦		
4	褐色土	砂瓦	プロット表に遺入	壁口の縁状
5	褐色土	やや磁瓦		
6	褐色土	やや磁瓦		
7	褐色土	やや磁瓦		



L. = 32.868m



第48図 50号横穴墓平面・断面実測図 (1/40)



第49图 49号·50号横穴墓平面·正面实测图 (1/60)

横穴墓 番号	羨門		漢道		玄門		玄室				出土遺物	備考
	幅	高さ	長さ	幅	高さ	プラン	長さ	最大幅	天井形	高さ		
1号墓						妻入り 不整形		130	アーチ	56		
2号墓	46		80	60								
3号墓						平入り 楕円形?						
4号墓						妻入り 隅丸長方形	160	120	アーチ (後右)		耳環	
5号墓						妻入り 隅丸長方形		90	アーチ (後右)	58		
6号墓				55					アーチ			
7号墓												
8号墓						妻入り 羽子板形		70	アーチ (後右)	40		
9号墓	42		60	56		妻入り 隅丸長方形	155	125	アーチ (後右)	55		
10号墓	50		75	52		妻入り 長方形	185	145	アーチ			
11号墓	47		70	60	70	妻入り 長方形	200	145	アーチ (後右)	90	須恵器・甕?	
12号墓				65	75	隅丸方形	180	190	アーチ (後右)	90		
13号墓						方形	180		アーチ (後右)			
14号墓						妻入り 長方形		90	アーチ (後右)	65		
15号墓						妻入り 長方形?		76	アーチ (後右)	40		
16号墓				80		妻入り 隅丸長方形	200	145	ドーム	112	鉄鑿	
17号墓				74		方形	170	160	アーチ (後右)			
18号墓		48				妻入り 楕円形		90	アーチ (後右)	65		
19号墓	31	65		43	63	妻入り 羽子板形	170	105	アーチ	76		
20号墓						妻入り 長方形		80	アーチ (後右)	60		
21号墓				52		妻入り 隅丸長方形	200	85	アーチ	65	須恵器・甕?	
22号墓						方形?		154	アーチ (後右)	110		
23号墓						妻入り 隅丸長方形		103	アーチ (後右)	64		
24号墓						隅丸逆台形		170	アーチ	90		
25号墓						方形	170	180	アーチ (後右)	93		

第2表 横穴墓遺構一覧表(1)

(単位はcm)

横穴墓 番号	羨門		羨道		玄門		室					出土遺物	備考
	幅	高さ	長さ	幅	高さ	プラン	長さ	最大幅	天井形	高さ			
26号墓	40	80	50	62	67	方形	180	160	アーチ (後有)	90	須恵器・長瀬壺 高坏、刀子		
27号墓	20					羨入り 長方形	90	40	平天井	28			
28号墓						方形	170	160	アーチ (後有)				
29号墓						羨入り 長方形			ドーム				
30号墓						方形	200	200	アーチ (後有)				
31号墓	45		50	50	70	羨入り 逆台形	172	115	アーチ (後有)	78			
32号墓				50		羨入り 長方形?	200		アーチ (後有)				
33号墓	39	60				羨入り 逆台形	196	100	アーチ (後有)	65	須恵器・横瓶		
34号墓						羨入り 長方形		82	アーチ (後有)	77	須恵器・短須壺		
35号墓						羨入り 長方形	185		アーチ (後有)				
36号墓									アーチ (後有)				
37号墓						方形?			アーチ (後有)		磁器(染付)		
38号墓			65			隅丸方形?	185		アーチ (後有)				
39号墓						羨入り 隅丸長方形	200		アーチ (後有)				
40号墓	30		70	50	74	隅丸長方形	170	150	アーチ		須恵器・壺		
41号墓						羨入り 隅丸逆台形	197	185	アーチ (後有)				
42号墓				63	70	方形	185	175	アーチ	92			
43号墓				50		平入り 逆台形	155	185	アーチ (後有)	90			
44号墓						円形	145	128	ドーム	82	磁器・小坏		
45号墓						方形?			アーチ (後有)		磁器		
46号墓	45	60				羨入り 長方形	200	62	アーチ (後有)	52	須恵器・蓋 陶器・瓿		
47号墓	45		95	45	64	羨入り 隅丸長方形	180	234	ドーム	108	土師質土器・坏 青白磁・蓋		
48号墓						羨入り 長方形	180	125	アーチ (後有)	77	青磁・碗		
49号墓	45	66	70	75	72	逆台形	185	185	アーチ (後有)	93	須恵器・蓋、土師 器・蓋、坏、陶胎染付		
50号墓	47	60	100	65	57	羨入り 長方形	185	153	アーチ (後有)	82			

第3表 横穴墓遺構一覧表(2)

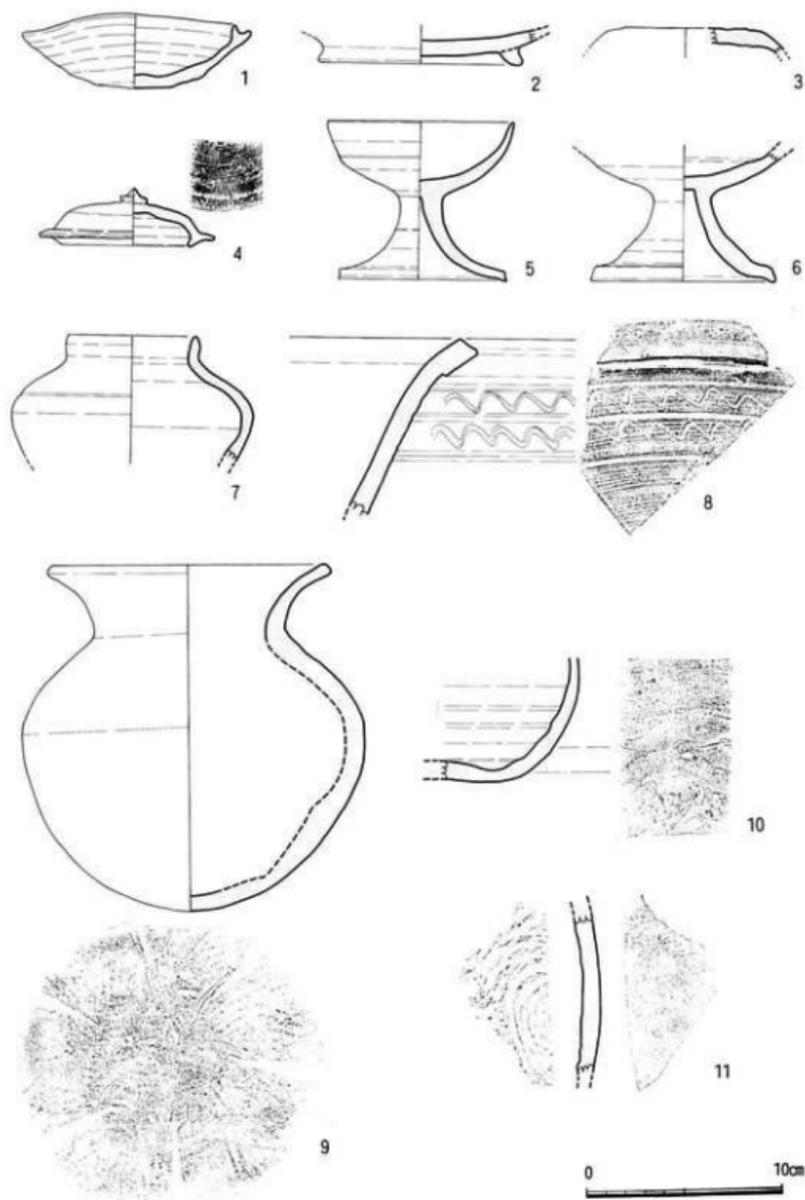
(単位はcm)

3 出土遺物

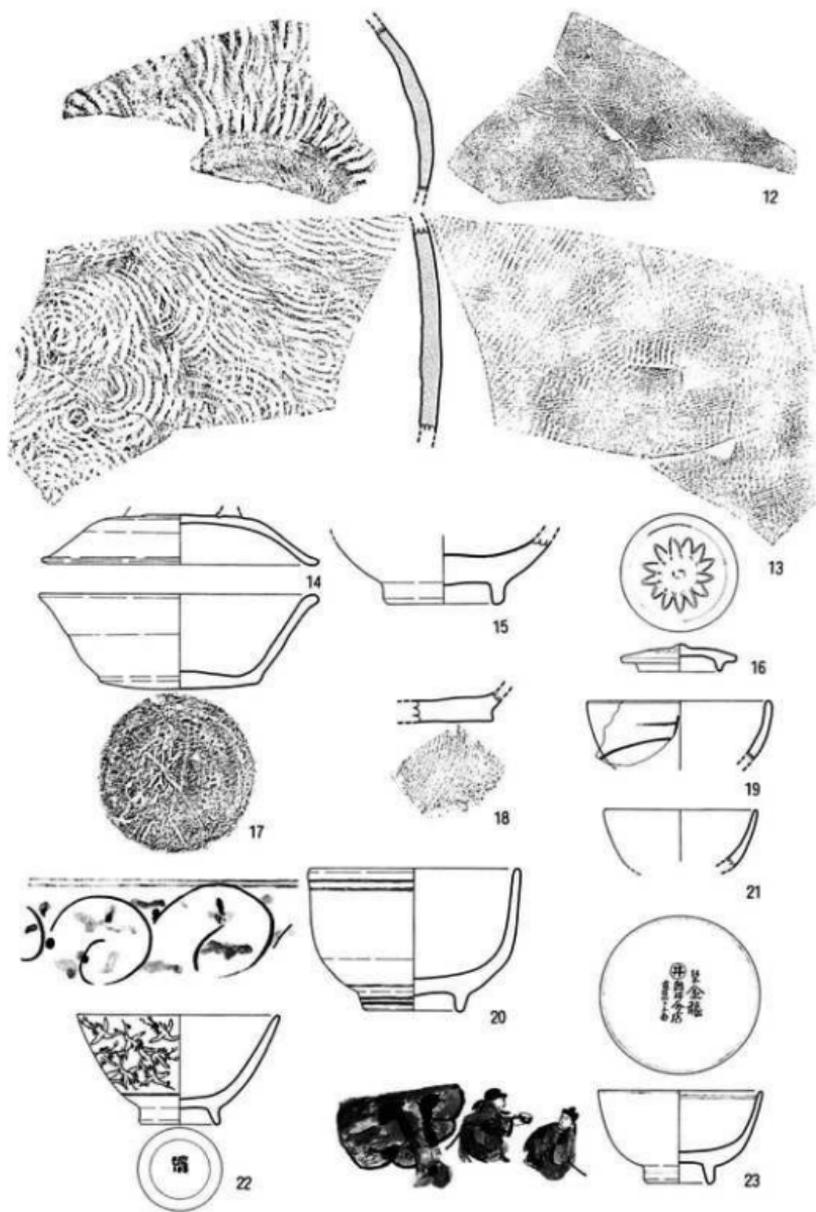
出土遺物は、早くから開口された横穴墓が大半を占めていることと二次的利用に伴う加工によって床面が下げられていることから遺物の点数は極めて少量である。埋葬当初の遺物については7世紀中葉の所産を中心とする須恵器が未開口横穴墓より若干出土が見られる。しかしながら、副葬品の質・量ともに6世紀代の横穴墓に見られるものと比較して大変劣っている。また、玄室内部に二次的加工の認められる玄室からは中世から近代に相当する遺物が確認されており、横穴墓の二次的使用が窺える。出土人骨については横穴墓によって遺存状態は様々であった。埋葬当初の人骨は歯が残る程度であり、5号横穴墓で近世に相当する人骨が出土している以外、当初の人骨に該当しないものも一部で確認されている。したがって、埋葬人骨からの分析は大変困難となっており、遺物のみの検討に留めることとなった。

- (1)の坏身は、底部にやや丸味をもち、緩やかに傾斜して口縁部に至る。マキアゲ、ミスビキ成形を行い、底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を施す。
- (2)は高台部分しか残っておらず器形は不明である。高台は、八の字形に付され、接地部は平らである。高台から底部にかけては回転ヘラ削り調整を施し、体部は回転ナデ調整を行っている。内面は、不整方向のナデが見られる。
- (3)の蓋は、マキアゲ、ミスビキ成形により、内面と底部に回転ナデ調整を施す。
- (4)の蓋は、非常に小型で受部が水平方向に伸び、内面のかえりが比較的長いものである。天井部には擬宝珠に近いつまみが付されている。成形は、マキアゲ、ミスビキを行い、天井部外面には回転ヘラ削り調整で、他の各部は回転ナデ調整である。なお、口縁部近くにヘラ記号を施している。
- (5)の高坏は坏部の体部に1条の稜をもち、坏部は丸味をもって立ち上がっている。脚は緩やかに外反し、裾部で内湾して下がり、これに沈線を巡らせ、さらに端部で広がる。
- (6)の高坏は、短い脚をもつもので、ラッパ状に外反した後、端部付近で屈曲させ短く水平に伸び、やや外傾きみに下る。調整は回転ナデ調整が施される。
- (7)の短頸壺は、直立する短い口頸部をもち、体部は口頸基部よりなだらかに下り、1条の稜線を有する。外面は、回転ヘラ削り調整が行われ、内面は回転ナデ調整が施されている。
- (8)の甕は、口縁部が緩やかに外反し、端部でわずかに肥厚する以外にはほぼ厚さは一定である。外面には回転クシナデ調整を施し、刺突文が数条見られ、その間に2条の波状文が施されている。
- (9)の甕は、口頸部が緩く外反し、口縁端部は丸味を帯びている。体部は球形に近い形態である。外面上部は回転ナデを施すが、底部は平行叩き後、半スリケシ調整を行っている。内面底部は粘土を張り付けた後、指オサエ調整痕がみられる。

- (10)は平瓶と思われるもので、底部より体部にかけて緩やかに立ち上がる。外面はカキ目調整が施されている。
- (11)は甕と思われるもので、外面にはカキ目調整が施され、内面には円弧叩きの痕跡が残っている。
- (12)は横瓶と思われるもので、外面はカキ目調整、内面には円弧叩きが施されている。
- (13)は甕と思われるもので、外面は平行叩き後、半スリケシを行っている。内面は同心円叩きを施している。
- (14)は土師器の蓋で、天井部はほぼ平らで口縁部にかけてなだらかに傾斜し、口縁端部で丸味を帯びる。天井部は手持ちのヘラ削りを施し、それ以外は回転ナデ調整が行われている。
- (15)は青磁の碗で、垂直に伸びた高台をもつ。底部は厚く、口縁部に向かって緩やかなカーブで立ち上がる。
- (16)は青白磁の蓋で、天井部に蓮弁を施し、かえりの部分と内面には軸が施されていない。
- (17)の土師器の坏は、平底の底部と体部との間に屈曲部をもち、口縁部にかけて直線ぎみに立ち上がり、口縁端部でやや外反し、丸味をもって屈曲する。底部は回転ヘラ削りが行われ、その他は回転ナデ調整が施されている。なお、外面底部には十字の形にヘラ記号が見られる。
- (18)の土師質土器の坏は、体部が不明であるが、立ち上がりが直線的に見られる。底部には板状圧痕が残されている。
- (19)の陶器の境は、肥前で焼かれた京焼風陶器である。表面には絵付けが施されている。
- (20)は、肥前系の陶胎染付境である。
- (21)は、磁器の小坏で径7.8cmを測る。
- (22)は、型打ち成形した境で、外面には鶴をモチーフとした模様が巡っている。底部には産地と窯を示す記号が施されている。
- (23)は型打ち成形の小境である。外面には、中国風の人物と木が描かれている。内面中央には、茶舗の名と電話番号が書かれている。電話番号からすれば明治末以降のもつと推測される。
- (24)の刀子は、鞘口を有し、柄部には木質が残っている。
- (25)の耳環は、銅製でその回りに金の鍍金を施すもので、径1.9cm、厚さ5.0mmを測る。
- (26)は、鉄製の盤で、全長16.8cm、刃先幅2.2cmを測る。
- (27)は、鉄製の盤で、残存長は19.9cmを測り、断面は方形で幅1.6cmを測る。頭部は約3mmほど屈曲し、断面は楕円形を呈する。

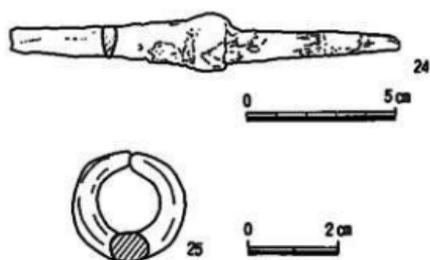


第50圖 出土遺物①

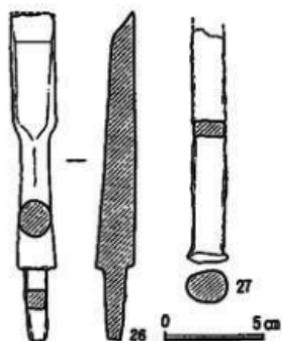


第51図 出土遺物②

0 10cm



第52图 出土遺物③



第53图 出土遺物④

遺物番号	通称名	器種	新土		色調		器面調整		法量 (cm)				備考
			底物	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	最大径	底径	
1	表 様	須臾器 坏 身		細粒	淡黒灰色	淡黒灰色	ロクロ同転 ヨコナデ	ロクロ同転 ヨコナデ	11.1	3.8		7.0	底面へラ削り残ナシ
2	25号 女室内	須臾器 角 四 石	金ウソモ 角 四 石	細粒	淡赤茶色	淡黒灰色	不整方向 ナ デ	ロクロ同転 ヨコナデ				10.4	
3	49号 前庭部	須臾器 蓋	黒ウソモ	細粒	淡黄赤色	淡黄赤色	ロクロ同転 ヨコナデ	ロクロ同転 ヨコナデ					
4	46号 前庭部	須臾器 高 坏		細粒	青灰色	黒灰色	ロクロ同転 ヨコナデ	ロクロ同転 ヨコナデ	6.6	3.9	9.0		天井部にへラ記号 宝珠張り付け
5	26号 女室内	須臾器 高 坏		細粒	灰白色	黒灰色	ロクロ同転 ヨコナデ	ロクロ同転 ヨコナデ	9.5	8.2		8.7	
6	表 様	須臾器 高 坏		細粒	淡灰白色	淡灰白色	ロクロ同転 ヨコナデ	ロクロ同転 ヨコナデ				9.3	
7	34号 女室内	須臾器 短頸壶		細粒	黒灰色	黒灰色	ロクロ同転 ヨコナデ	ロクロ同転 へラ削り	6.6		12.2		
8	表 様 東 側	須臾器 壺		細粒	灰黒色	黒色	ヨコナデ	ヨコナデ					二条の波状文
9	40号 前庭部	須臾器 壺		細粒	淡青灰色	淡黒色	ヨコナデ 底面削オキエ	底面に 平行タタキ板	14.5	17.7	17.9		
10	表 様	須臾器 平 瓢		砂粒	淡灰色	暗黒色	ロクロ同転 ヨコナデ	カキ目調整 手持ちへラ削り				6.0	
11	11号 前庭部	須臾器 甕?		細粒	淡灰褐色	淡灰白色	円弧叩き	カキ目調整					
12	33号 前庭部	須臾器 狭 瓶		細粒	黒色	淡黒灰色	円弧叩き	平手叩き					
13	21号 女室内	須臾器 甕?		細粒	淡黒灰色	淡灰色	当て丹板	タタキ板					
14	49号 女室内	須臾器 蓋	角 四 石 赤色酸化土粒	細粒	淡赤茶色	淡黄白色	ロクロ同転 ヨコナデ	ロクロ同転 ヨコナデ	14.2	2.5		8.8	
15	48号 女室内	青 磁 甕		細粒	淡緑灰色	淡緑灰色						6.2	
16	47号 女室内	青白磁 甕		細粒	白色	淡緑青色			4.2	1.4	5.9		
17	49号 前庭部	土師器 坏 身	石黄、黒ウソ モ、角四石	細粒	明黄白色	明黄白色	ロクロ同転 ヨコナデ	ロクロ同転 ヨコナデ	14.2	4.9		8.3	底面にへラ記号
18	47号 女室内	土師器 坏 身	角 四 石 赤色酸化土粒	細粒	明赤茶色	明赤茶色	溝状ナデ						
19	46号 前庭部	陶 器 埴			淡灰褐色	淡灰褐色			9.4				
20	49号 女室内	陶胎染 付 埴		細粒	灰白色	灰白色			10.8	7.3		5.2	
21	44号 女室内	磁 器 小 坏		細粒	白色	白色	ヨコナデ	ヨコナデ	7.8				
22	45号 前庭部	磁 器 甕			白色	白色			10.4	5.7		4.2	
23	37号 女室内	磁 器 小 甕			白色	白色			8.4	4.8		3.6	
24	26号 女室内	刀 子											
25	4号 女室内	耳 環											
26	16号 女室内	甕											全長16.8cm 幅2.2cm
27	表 様 東 側	甕											

第4表 出土遺物一覧表

(単位はcm)

第Ⅳ章 まとめと考察

1 形態分類について

横穴墓の内部構造は主として玄室の平面形態と天井の形態によって分類され、さらに羨道の形態、玄室内施設などによる形態分類もあげられる。長谷横穴墓群の内部構造をみると、玄室の平面形態は大きく方形、妻入り長方形に分類できる。この内、妻入り長方形については大型のものと小型のものが見られ、さらに両袖のものと無袖のものに細分できる。天井形態はドーム形とアーチ形とに分類できるが、アーチ形はさらに奥壁と側壁および天井とが区別を明確に示すものと、区別の付かないものに分けられる。こうした各内部構造の形態から、長谷横穴墓群では4類に形態分類をおこなった。

A類は平面形が方形を呈し、天井がアーチ形を成すものである。このうち天井形には2型式あり、奥壁の高さがほぼ天井高と同じで平らなものをA類aとし、奥壁が天井に向かって内彎し、奥壁と天井との境が最も高くなるものをA類bとした。いずれも奥壁は側壁との境に明瞭な稜線を有するものである。なお、A類aは、羨道部と玄室との境界において明瞭なものをA類a1とし、奥壁から羨道にむかって天井が真っすぐ伸びて羨門に至り、境界が不明瞭なものをA類a2に分類した。

B類は平面形が妻入り長方形を呈し、天井がアーチ形を成すものである。このうち大型と小型の規模によってB類aとB類bに大別した。B類aの平面形は妻入り長方形を主とするが、やや袖が奥壁幅に比べて狭いものも包括する。奥壁は床面から垂直に立ち上がり天井部に至っている。天井部はほぼ平らである。B類bは、B類aと比較して玄室規模が小さく、玄室の幅も大変狭いのが特徴である。なお、B類のaとbを羨道部と玄室との境界の有無により、さらに4形態に細分した。

C類は妻入り小型長方形であり、天井はアーチ形を成すものである。平面形において玄室前壁の袖は退化しており認められない。このため、羨道から奥壁に向かって一直線に掘削がおこなわれており、奥壁側に広がりを見せる。奥壁は床面より垂直に立ち上がり天井部に至っている。天井高は奥より羨門にかけてほぼ水平である。

D類は平面形が方形もしくは平入り長方形を呈し、天井がドーム形を成すものである。長谷横穴墓群においてわずか3例の確認であった。

以上のように玄室は4類に分類できたが、内部構造における形態の相違は造墓の時間的先後関係を示す一つの目安となるものである。こうしたことから各部類ごとに形態的特徴をふまえてその変遷を推察したい。

A類では、まずA類a1とA類a2との先後関係が挙げられる。A類a1はA類a2に比べ玄室と羨道の境界が明瞭に認められ、細部にわたり造りが丁寧に仕上げられている。ところがA類a2で

は玄室と羨道の天井の境が不明瞭になり、最終的に奥壁から羨門にかけて天井部がなだらかに伸び、玄室天井部と羨道天井部が繋がる。こうしたことからA類a1からA類a2の変遷が想定される。

B類においても、A類と同様に次第に天井部において退化傾向が認められることからB類a1からB類a2の変遷が想定できる。さらにこうした退化傾向は横穴墓の規模においても影響が見られると考えられることから、B類a1→B類a2→B類b1→B類b2の序列が推測される。

C類は、B類bの形態において玄室前壁の袖が退化したものであることから、これに後出する形態と考えられる。

D類は墓数が極めて少ないため形態的特徴により時期差を判断することはできない。しかしながら、本横穴墓は県下の横穴墓形態の変化を見た場合、4類中で最も古い形態に比定できよう。

これらA類からD類の相対年代を推定すれば、まず最初にドーム形天井を呈するD類が出現したと思われる。さらにA類a1とB類a1が大差ない時期差で出現したものであろう。それらはそれぞれa1からa2の変遷を想定することができる。その後、玄室規模が縮小したB類b1・b2が出現し、次第に玄室の前壁の袖が退化したC類に移行するものと考えられる。

これらA類からD類の絶対年代は玄室内部の拡張されたものが多いことや、出土遺物を伴う横穴墓が一部の確認であったことから各形態の時期を判断することは困難である。ただし、26号横穴墓(A類a1)と40号横穴墓(B類a1)から7世紀の第2四半期の須恵器が出土し、46号横穴墓(C類)よりやはり7世紀の第2四半期の須恵器が出土している。しかしながら26号横穴墓と40号横穴墓は追葬時の遺物であり、横穴墓の構築年代はそれより逆上ることは明白である。一方の46号横穴墓の遺物は初葬時のものであることから構築年代を示すものと言えよう。こうしたことからA類とB類はC類より先行して出現した形態であることを確認するに至っている。

分類	玄室		玄室と羨道の境		備考	横穴墓
	平面形	天井形	袖	不明瞭		
A類	a1	方形	アーチ形	有	天井が平らなもの	13号・25号・26号・28号・41号・42号・45号
	a2	方形	アーチ形	有	不明瞭	12号・30号・32号・35号・36号・38号
	b	方形	アーチ形	有	不明瞭	奥壁が最も高いもの 22号・24号
B類	a1	羨入り長方形	アーチ形	有	不明瞭	10号・11号・40号・48号・49号・50号
	a2	羨入り長方形	アーチ形	有	不明瞭	9号
	b1	羨入り長方形(小型)	アーチ形	有	?	4号・5号
	b2	羨入り長方形(小型)	アーチ形	有	不明瞭	19号・31号
C類	羨入り長方形(小型)	アーチ形	無	不明瞭		1号・8号・14号・15号・18号・20号 21号・23号・27号・33号・34号・46号
D類	方形	ドーム形	有	不明瞭	奥壁が形成されていない	2号・29号・47号

第5表 形態分類表

2 分布と群構成について

長谷横穴墓群は東西に長く、地層に沿って分布し、A群でⅠ支群（1号横穴墓）とⅡ支群（2号～8号横穴墓）とⅢ支群（9号～48号横穴墓）によって形成されている。B群は、49号・50号横穴墓の2基で形成されている。この内のA群のⅣ支群では、上下2段の分布が認められる。下段に位置する横穴墓は16号・17号・19号・21号・23号・26号・33号・34号・40号横穴墓である。調査時にはすでに削平されているため墓道は消失してしまっているが、造営時には上段と下段にそれぞれ墓道があり、各々の横穴墓に付随していたものと推測される。そして、上段よりも下段に位置する横穴墓のほうが形態的に新しいことや、上段に分布する横穴墓の地質が固結した凝灰質シルト層をねらっておこなわれており、下段に分布する横穴墓の地質は凝灰質砂・砂質シルトの互層で非常にもろいことが認められることから、上段をある程度造墓した後、下段に墓域が広がったことが窺える。これらの横穴墓の分布の在り方から見てA群には最低3本の墓道があったことが推測される。この内の2本はⅢ支群の上下2段に位置するもので、あと1本はⅡ支群の各横穴墓の羨門につながっていたものである。



第54図 群構成と墓道推定線

A群のⅠ～Ⅲ支群では、支群毎にそれぞれ横穴墓の内部構造や開口する方向、更に隣接する横穴墓との配列や前庭部の共有する相互の位置関係によって、そこに幾つかの単位群が分類できるようである。すなわち、4号・5号横穴墓、6号・7号横穴墓、9号・10号・11号横穴墓、12号・13号横穴墓、14号・15号横穴墓、16号・17号横穴墓、22号・24号・25号横穴墓、28号・29号・30号横穴墓、33号・34号横穴墓、32号・35号横穴墓、36号・37号横穴墓、38号・39号横穴墓、41号・42号横穴墓、43号・45号横穴墓、49号・50号横穴墓がそれぞれである。

これらの単位群はおよそ2～3基を単位とする特徴が見られ、同じ高さ位置しているもので、上下段にまたがって単位群は形成されていない。単位群内にある横穴墓の内部を比較すると同程度の規模であることから、横穴墓の被葬者に優劣を見いだすことはできない。しかしながら、単位群内において玄室の内部構造に形態変遷が認められることから、随時、造墓が展開され単位群が形成された可能性が高い。それらを単位毎に見れば、まずD類の横穴墓（2号・29

号・47号横穴墓)が当間隔に単独で造墓を開始する。この内の28号・29号・30号横穴墓の単位群では形態変遷により順次造墓が認められる。こうした造墓の展開する様子はそこに世代の累代的な造墓現象が捉えられていると考えることができよう。これに続きA類aやB類aの形態を呈する横穴墓が造墓される。これらは前段階のD類の横穴墓の間に墓域をそれぞれ確保して広がっており分布に秩序が見られる。それらの単位群をみると形態的に大差が見られず、短時間の内に順次造られたことが窺える。よってこの段階では同世代における造墓と言えよう。そして最終的にB類bやそれに続くC類の形態を呈する横穴墓が造墓される。これらの分布は前段階に見られるような墓域を分割占有し、そこに空間を確保したのではなく、下部や上部などにこれまで造られた横穴墓の墓域を避けて無秩序に掘削が行われている。さらに、この段階の横穴墓の分布の在り方に粗密が認められる。特に14号横穴墓から23号横穴墓にかけて、この段階の横穴墓が密集している。つまり造墓が衰退に従い、最終段階まで造墓活動を行った造墓集団と造墓を打ち切った造墓集団とが存在したことを明示するものである。おそらくは、この段階において墓域および造墓が規制されたことを意味しているであろう。

以上のように、最初に造墓活動を開始し形成された単位群(形成期)においては、世代の累代的な現象を捉ええられるものの、次の段階(A類a・B類a)に出現した横穴墓およびこれによって形成された単位群(発展期・展開期)には、世代の累代的な現象を捉えることはできないものと考えられる。また、この段階において短時間に爆発的に造墓がおこなわれていることから世代の継承とは考えられず傍系親族などの造墓集団の拡大として捉えられよう。そして最終段階(停滞期・衰退期)の横穴墓(B類b・C類)に移っていくに従い、規模の縮小と造墓数の減少傾向と共に墓域も規制され、終焉に向かっている。やはり世代の累代的な現象は捉えられず、横穴墓の規模から追葬の減少も認められる。そしてこの傾向は、有力造墓集団のみが最後まで造墓が行われたことを示唆しており、前段階から造墓集団に変化が見られる。

このように、単位群の構成、群が形成する過程により造墓集団の最小単位と造墓集団の構成を表しているといえよう。

段階	分類形態	A 群						B 群	
		支 群		支 群				II支群	I支群
I期	D 類	7				29			2
II期	A類a1	48	15 13 12 11			36	36 25	13	
	B類a1・A類b		46				34 22	11 10	49 50
III期	A類a2			36	36 35 32	30		12	
	B類a2			39	37			9	
IV期	B類b1								5 4
	B類b2					31		19	
V期	C 類	46			34 33	27	23 21 20	14 15 14	8

第6表 形態変遷表

3 工具痕について

横穴墓は岩盤を削り貫いて築造するため、なんらかの道具を使わなければならない。道具の想定については出土遺物から知ることと、壁に残された工具の痕跡から推測することができる。長谷横穴墓群については出土遺物に鉄鏝が認められるが、横穴墓造墓当初の工具は発見されていない。かろうじて、横穴墓の大半が固結した凝灰質シルト層～砂質シルト層に掘削がおこなわれているため岩壁面に無数の工具痕が残されていた。このため、工具痕の幅、方向に注意を払い観察をおこなった。その結果、造墓当初と二次的加工を含めて10種類の工具痕が認められた。これらを特徴や形状などから5種類に工具を分類した。以下、工具幅別に形状、方向、特徴を説明する。

1類(1cm幅)…壁面を観察すると先端は1cmの幅で長方形を呈する。痕跡から工具は棒状で円柱を成し、先端付近で尖るものと推測できる。痕跡は主に側壁の中央付近に見られ、上方から真下方向に見られることから振り下ろすというよりハンマーなどによって打ち込む方法によるものと考えられる。また、床面には認められず壁面の拡張に使用されたことが窺える。なお、工具痕は全て造墓時の壁面を切っているため二次的加工によるものである。

2類(3cm幅)…6号横穴墓のみで観察された。先端の刃先はコ字形を成す。壁面にはこの3cm幅と1cm幅とが併存して認められた。

3類(4cm・5cm・5.5cm・6cm幅)…刃先はコ字形を成し、痕跡は側壁において奥壁に向かって水平方向、もしくはやや奥壁下がりに残存する。奥壁では上方から下方向に痕跡が見られる他、刺突痕が観察できる。内部の状態より大半が造墓時の工具痕として認められる。

4類(7cm・8cm・10cm幅)…刃先は隅丸ないしU字形を成し、拡張部分のみに観察できる。工具の痕跡は側壁や奥壁の下部、さらに床面の掘り下げに集中している。痕跡より上方から下方向に振り下ろすように掘削したものと理解できる。

5類(熊手状)…18号と31号横穴墓のみで観察される工具痕で、他の工具痕のように平滑でなく、数条の引っ掻いた様な爪痕状の痕跡が見られる。これらをよく観察すると4条を一つの単位としており、幅は6.5～7cm程である。いずれも拡張部分で観察できた。

以上のように、横穴墓の掘削には5種類の工具が観察されるが、特徴や形状などからこれらの工具を推測することができよう。

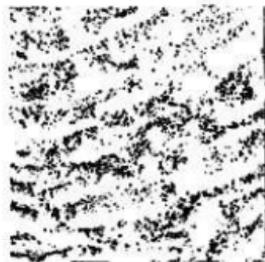
1類は1cm幅のもので棒状の形状を成す。出土遺物の中に鏝(27)が出土しており、形状などからこうした工具を想定できる。

2類は3cm幅のもので、出土遺物に平鏝(26)があり、痕跡からすればこうした工具痕と推定される。

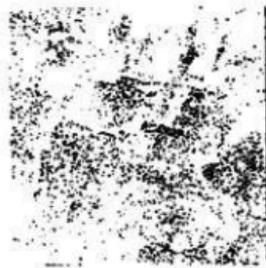
3類は4～6cm幅の工具であり、大半が造墓時のものである。いずれも刃先はコ字形を成し、古墳や横穴墓から出土する鉄製の手斧と工具幅や壁面に残された痕跡が類似していることが



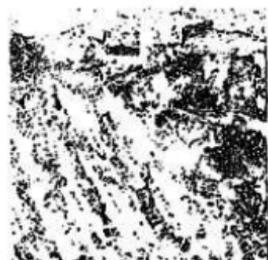
5 cm幅
31号墓 右侧壁・奥



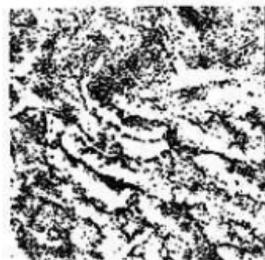
5.5cm幅
10号墓 奥壁・左



6 cm幅
13号墓 天井・左



7 cm幅
13号墓 奥壁・左



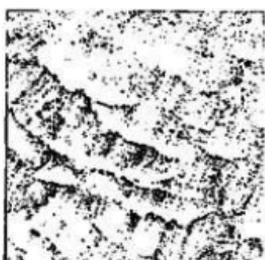
8 cm幅
28号墓 左侧壁・下



熊手状
31号墓 前壁・右



10cm幅
2号墓 左侧壁・上



10cm幅
10号墓 前壁・右



10cm幅
45号墓 左侧壁

0 20cm

ら、こうした工具が該当されよう。

4類は7~10cm幅の工具であり、全て拡張部分で観察されるもので二次的に使用されたものである。刃先は隅丸ないしU字形を成し、幅広い工具である。このため、工具としてはU字形鍬が想定される。

5類は熊手状の工具であり、二次的加工に使用されている。こうした工具としては鉄製の又鍬が想定できよう。

なお、1類・2類・4類・5類が3類より新しいという以外、時期差は明確にはできなかった。さらに、横穴墓の形態の変化に伴い掘削時の工具の幅の変化は認められなかった。

また、造墓の掘削工程については二次的加工が多く、詳細は明らかにすることはできないが、18号横穴墓において掘削の痕跡が明瞭に確認できた。掘削は横穴墓内部に残された工具痕から羨門から玄室の前方部にかけて直線的に工具痕を残す部分（A工程）と、さらにそれより奥壁にかけて水平方向に掘削を行った部分（B工程）に大きく二分される。この場合、2つの掘削工程が考えられ、一つがA工程で掘削・調整が行われた後、B工程に進んだとするものと、B工程からA工程に進んだものとする両方が推察できる。

玄室内部の調整は、大半の横穴墓においてほぼ同様に見られる。右側壁は手前から奥壁方向に、奥壁は上から下に、左側壁は奥壁から羨道に向けて工具痕が観察される。天井は下から見上げると時計回りに工具痕が残る。壁面や床面においてもやはり時計回りに調整が行われたことが窺える。

このように、工具痕からは工具の種類、掘削工程、内部の調整などが判明でき、これにより各横穴墓で似通った造墓技術の在り方を示していることを示唆することができた。これが、造墓の掘削に専門集団を想定する一つの示唆するものであろうが、これには周辺部における他の横穴墓群との比較をおこなう必要があろう。

横 番	穴 号	工 具									熊手
		1 cm	3 cm	4 cm	5 cm	5.5cm	6 cm	7 cm	8 cm	10cm	
1	号			当							
2	号									二	
3	号	二									
4	号						当				
5	号	二		当	当?						
6	号	二	二								
7	号										
8	号				当						
9	号			当	二					二	
10	号					当				二	
11	号	二			当						
12	号			当							
13	号	二					当	二		二	
14	号				当						
15	号					当					
16	号										
17	号										二
18	号				当						
19	号			当							
20	号						当				
21	号			当							
22	号					当					
23	号			当							
24	号					当					
25	号				当						
26	号			当							
27	号				当						
28	号	二					当	二	二	二	
29	号	二		当				二			
30	号			当			二				
31	号			当	当						二
32	号				当				二		
33	号					当					
34	号				当	当					
35	号	二			当	当				二	
36	号				当	当	二	二			
37	号			当				二			
38	号	二			当	当				二	
39	号				当	当		二	二		
40	号										
41	号	二					当		二		
42	号										
43	号										
44	号										
45	号						当			二	
46	号				当						
47	号			二	当						
48	号						当				
49	号				当						
50	号				当						

(当…掘削当初 二…二次的加工)

第7表 工具分類表

4 結語

大分平野の横穴墓の展開は、豊前地域の竹並横穴墓群や上ノ原横穴墓群で確認された初期横穴墓と言われるものが、5世紀後半にはこの地域で成立し、こうした墓制が伝播したものと考えられている。横穴墓がどのような経路で伝播し展開していったかは定かではないが、大分平野の横穴墓では以下の地域で分布が認められる。西大分の鞍川下流域、大分川下流右岸の高城から曲にかけて連なる台地斜面、賀来川と大分川が合流する賀来地区北側の庄ノ原から上野にかけて伸びる台地の南斜面、七瀬川左岸の木ノ上から下岸にかけての丘陵斜面、大野川の右岸に発達した丹生台地の斜面、戸次を中心とする大野川の両岸の台地斜面とする、大きく分けた6地域である。

まず、大分市で最も古い横穴墓は、現段階で木ノ上地区に所在する高来山横穴墓とされており、所産時期に5世紀後半から6世紀前半が当てられている。内部構造は平面形態が平入り長方形を成し、天井はアーチ形を呈する。遺物は玄室内から鉄剣・銅鏡・鉄鉾・刀子・鉄鏃などが出土している。

これに続くものとして大野川右岸に位置する飛山横穴墓群が上げられる。造墓期間は6世紀中葉から7世紀前半を中心とするもので次第に終焉を迎えたと考えられる。ただし、表採資料に6世紀前半代における所産のものがあることから造営開始はさかのぼるものと推測される。形態は平面が狭入り長方形もしくは方形を成し、天井が寄棟形を呈するものから、時期が下がると共に平面形態がやや不整形を成すようになり、天井もドーム形やアーチ形へ移行する。遺物には金銅製雲珠・銀張鏡板・金銅張杏葉など、この時期の石室の群集墳の副葬品より優越している。

飛山横穴墓群の造立後、6世紀後半には大分平野の各地域で急激に造墓が開始される。分布状況から7世紀前半代に最盛期を迎えており、7世紀後半代には追葬と共に終焉に向かっていく。この時期の横穴墓の内部構造は天井と奥壁の境界が明確に見られるアーチ形や箱型に類似する平天井形を呈するものであるが、時間の流れと共に玄室は前壁が奥壁より狭まり、天井と奥壁の形成が不明瞭なアーチ形や天井の低いドーム形に変遷していく。遺物は従前の横穴墓に埋葬されている武器や馬具類など軍事的な様相が影を潜めるようになる。こうした動きは当初横穴墓は在地の有力集団に一早く受け入れられ、軍事的に力を持った有力家長を中心に継承されていったことを示しており、大分平野では石室の群集墳が見られず、飛山横穴墓群などで首長墓クラスの副葬品に相当するものが取められている事象からすればこのことを認知できよう。さらに時間の経過は次第に造墓集団の拡大と共に横穴墓の増加を引き起こしている。

またこの時期の横穴墓群の群構成における単位群の分化の事例として、大分県三光村の上ノ原横穴墓群の調査で、数メートル間隔でくざられている墓域で連続的な造墓がおこなわれており、これが一つの家族集団の累代的連続の表れとして考えられている。これについては横穴墓

の被葬者の人骨から得られる形質人類学の見地からの分析において確かめられている。

なお、個々の横穴墓群の分布はその裾部が可耕地として可能である地理的位置にあることから、そこに農業経営基盤をおいていた集団が横穴墓群を造営したのであろう。しかしながら、その地域でどの程度を経済単位とする集団が横穴墓群を形成したかは、言及しがたい。

長谷横穴墓群は調査により7世紀中葉の遺物が出土していることや横穴墓の玄室形態から、6世紀後半から7世紀前半に横穴墓の造墓が開始され、順次展開していったものと思われる。

長谷横穴墓群はこうした7世紀代の群集墳としての様相を物語るものであり、大分平野の横穴墓の衰退期に相当される。これまで大分平野では不明であった横穴墓の最終形態と群構成を垣間見ることができた。おそらく、この長谷横穴墓群に埋葬された被葬者はその前方に広がる可耕地を基盤に生活を営んだ集団に相当するものであったに違いない。長谷横穴墓群が一つの集団で形成されたものか、いくつかの集団が集まって形成されたものかは不明である。横穴墓のまとまりとして2-3基を単位にしており、出現期は最も中心的で岩質の良好な場所を選んで掘削をおこなっている。この単位群は世代の累代的な現象が見られ、造墓集団の内で中心的で優位な被葬者の様相が窺える。これに続く時期には、横穴墓間は等質的で優劣は見られず、時間的に併行関係にあることから同世代間による造墓活動の様相が窺える。さらに造墓がピークを迎えており、ほぼ同時期に複数の被葬者に限定された墓域がそれぞれに与えられており、造墓集団が拡大している。そして、造墓活動の開始から一定期間の後、横穴墓の数は減少し、衰退に向っている。そこには、墓域の偏りが認められ、限られた家族集団の被葬者のみが埋葬されたに違いない。それは造墓に対する規制が被葬者集団に影響を及ぼし、この内の有力家族集団のみが造墓活動を続けることができたことの現われとして理解したい。このことは、終末期における政治的規制を受けて造られた各地の古墳にも言えることであり、やはりこの横穴墓群においても同様な経過をたどったものと言えよう。

これまでこの付近の遺跡からは6世紀から7世紀に相当する集落はおろか住居跡も発見されておらず横穴墓群との関係は分かっていない。今後、集落における住居跡の構成や集落間の繋がりが明白になれば横穴墓群における群構成と比較し対応させることによって被葬者集団の姿が明確になるものといえよう。

5 その他

長谷横穴墓群の35号・36号横穴墓では奥壁の中央部分に掘り込み棚状の施設が認められる。これらの横穴墓は床面が掘り下げられ内部が改変されている。棚状部分は二次的使用時に何らかの目的で造られたものと考えられ、煤が付着していないことから火の使用は認められない。長谷横穴墓群には中世から江戸時代の出土遺物や後世の人骨片があることから、鎌倉地方を中心に発達した矢倉と呼ばれる納骨堂兼供養堂や納骨の二次的利用と類似しており、これらとは直接関係はないにしてもこうした二次的再利用が行われたものと推察される。

なお、49号横穴墓では特種な付設施設が認められた。この49号横穴墓の前庭部の前端にはテラスが広がり、その右前壁面に径40cm、深さ15cmの柱穴状の掘り込みの遺構が認められるものである。遺構の切り合いからすれば当初横穴墓造墓時に掘削されたものではなく、二次的に掘削されたものと推察される。羨門や玄室内より平安時代の土師器が出土しており、追善供養が行われその時に供献されたものであろう。このようなことから、この柱穴状遺構はこうした事象と何らかの関係があると思われる。



写真① 35号横穴墓（玄室内部）



写真② 36号横穴墓（玄室内部）



写真③ 49号横穴墓（前庭部）



写真④ 49号横穴墓（前庭部）

参考文献

〔論文〕

- 山本 清 1962 「横穴の形式と時期について」 『鳥根大学論集（人文科学）第11号』
佐田 茂 1975 「九州横穴の型式と時期」 『考古学雑誌』第61巻1号
広瀬 和雄 1978 「群集墳論序説」 『古代研究』15
村上 久和 1985 「壘の横穴墓」 『えとのす』29号
池上 悟 1988 「横穴墓の被葬者と性格論」 『論争・学説 日本の考古学』5 古墳時代
花田 勝広 1988 「横穴墓の造墓技術」 『ヒストリア』第120号 大阪歴史学会
村上 久和 1991 「北九州周辺の横穴墓」 『おおいた考古』第4集 大分県考古学会
田中 良之 1991 「横穴墓被葬者の情報」 『おおいた考古』第4集 大分県考古学会
土生田純之 1991 「古墳における儀礼の研究」 『九州文化史研究所紀要』第36号

〔報告書〕

- 『法皇山横穴古墳群』 1971 加賀市教育委員会
『飛山』 1973 大分県教育委員会
『宗禪師横穴群発掘調査報告書』 1976 仙台市教育委員会
『竹並遺跡』 1980 竹並遺跡調査会
『朝田墳墓群Ⅴ』 1982 山口県教育委員会
『上ノ原遺跡群Ⅰ～Ⅴ』 1982～1986 大分県教育委員会
『大塔山横穴墓群』 1987 鳥取県教育文化財団

写 真 图 版

第1図版



調査区全景（西方向から）



長谷横穴墓群遠景（西南方向から）



長谷横穴墓群遠景（南方向から）

第2図版



9号横穴墓（正面から）



14号横穴墓（玄室内部）



26号横穴墓（玄室内部遺物出土状況）



26号横穴墓（玄室内部人骨出土状況）



31号横穴墓（玄室内部又鋤状工具痕）



33号横穴墓（玄室内部）

第3图版



35号横穴墓（玄室内部幅10cm工具痕）



32号·33号·34号·35号横穴墓



37号·38号·39号·横穴墓



40号横穴墓（前庭部土層堆積狀況）



40号横穴墓（前庭部遺物出土狀況）



48号横穴墓（玄室内部）

第4図版



49号・50号横穴墓



49号横穴墓（正面から）



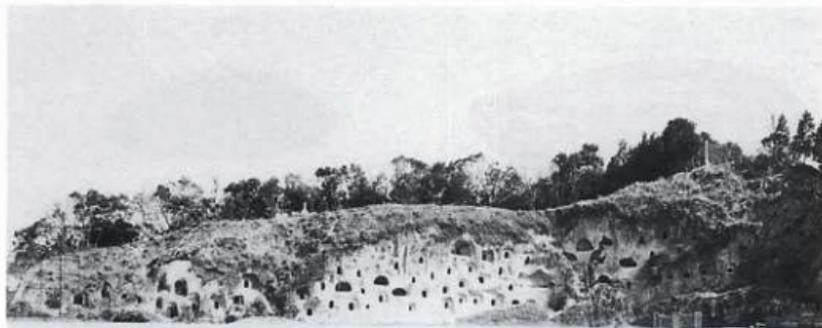
49号横穴墓（玄室内部）



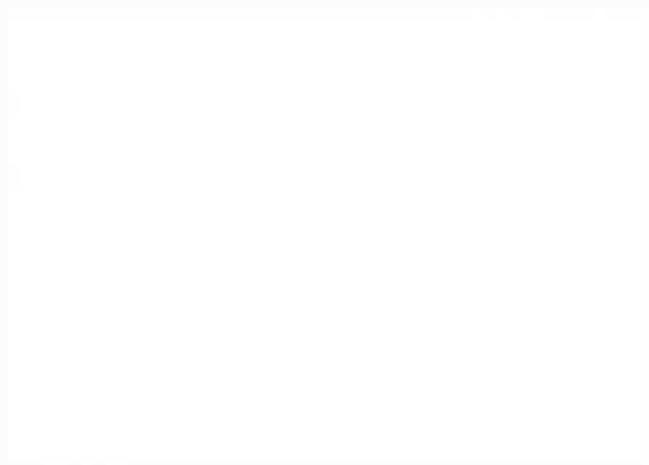
49号横穴墓（羨門遺物出土状況）



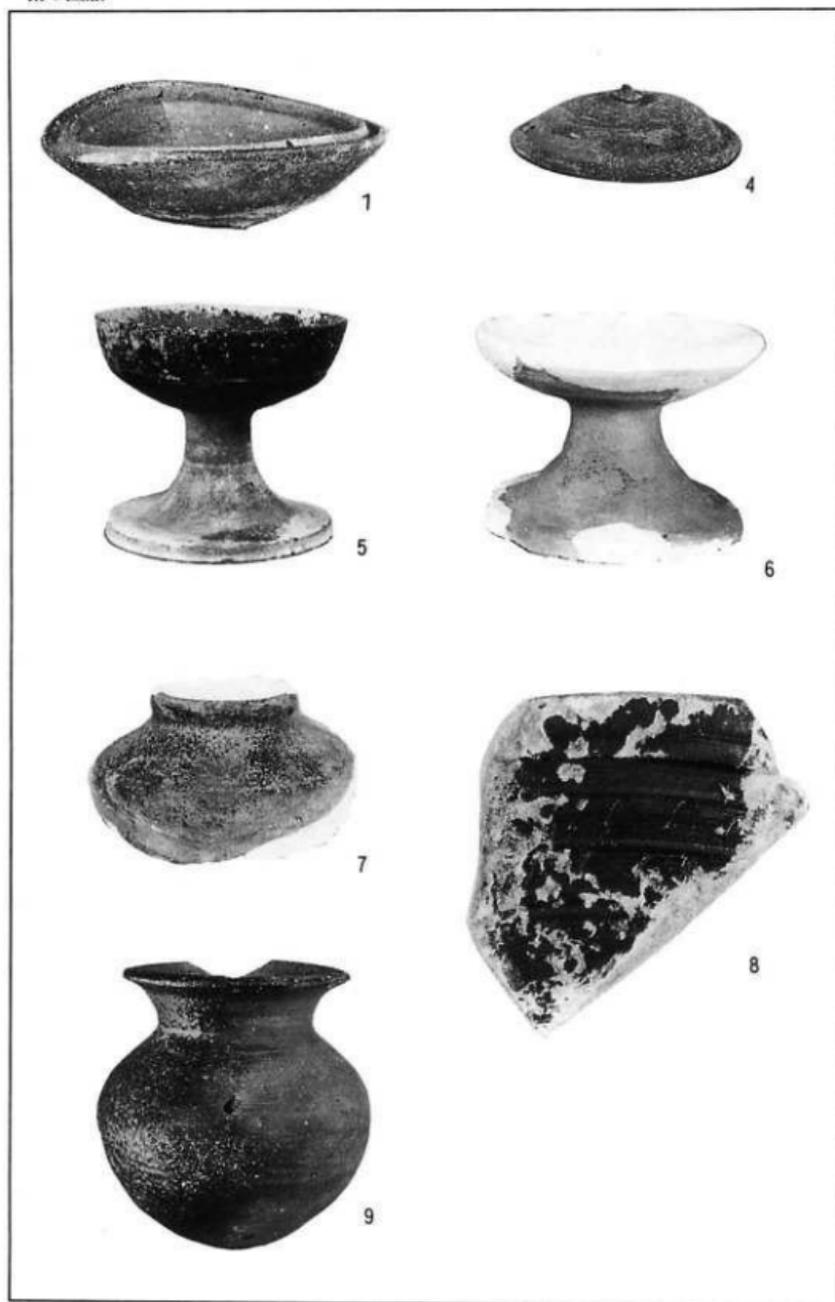
50号横穴墓（玄室内部）



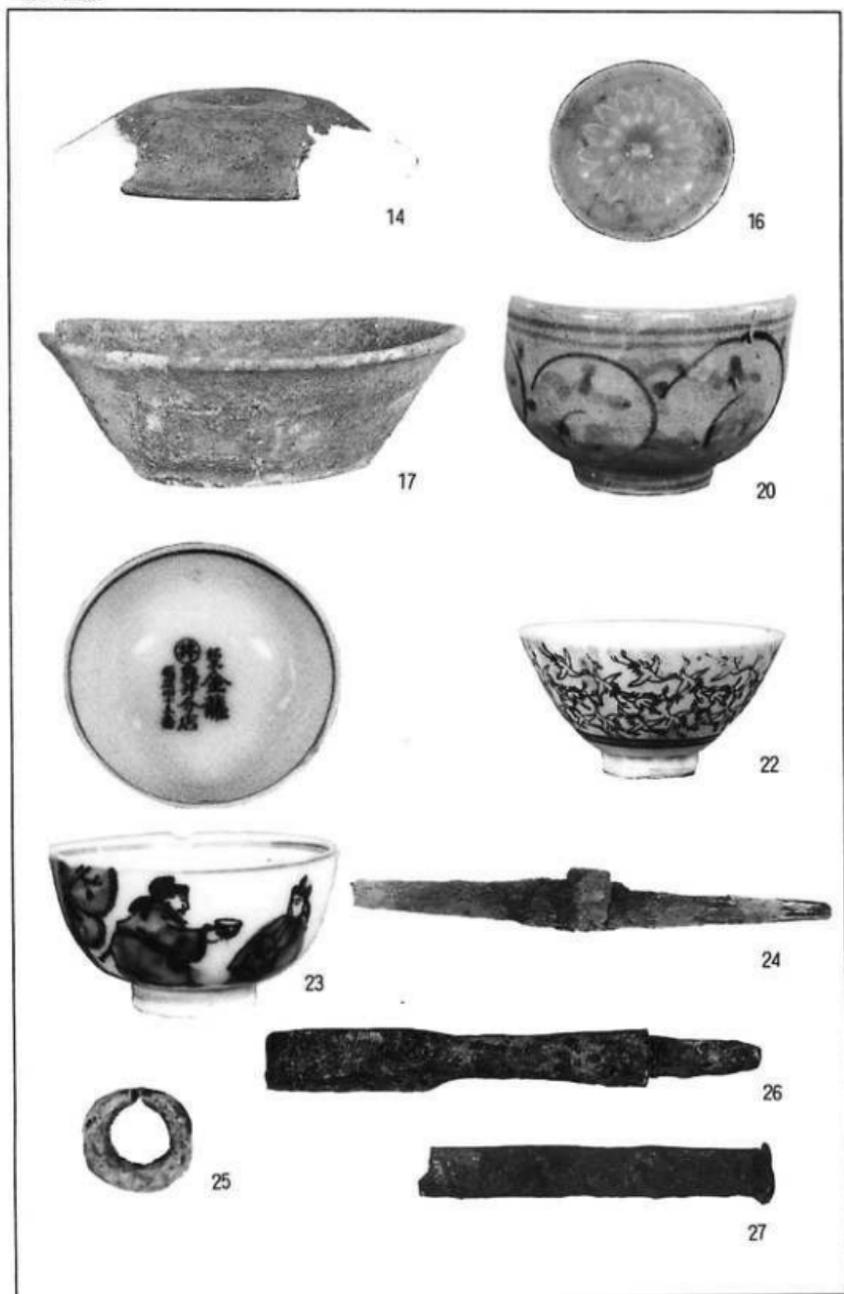
滝尾百穴横穴墓群全景（南方向から）



長谷横穴墓群発掘参加者



出土遺物①



出土遺物②

長 谷 横 穴 墓 群
大分県大分市羽田所在遺跡の発掘調査報告書

平成4年8月31日

発行 大分市教育委員会
印刷 (有)いづみ印刷社
